

平成19年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅰ

幼少年期に身につけておくべき  
基本運動（基礎的動き）に関する研究

— 第 3 報 —

財団法人 日本体育協会  
スポーツ医・科学専門委員会

平成19年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅰ  
幼少年期に身につけておくべき基本運動（基礎的動き）に関する研究

— 第 3 報 —

研究班長 阿江通良（筑波大学）

研究班員 飯干明（鹿児島大学）、加藤謙一（宇都宮大学）、窪康之（奈良産業大学）、國土将平（鳥取大学）、佐々木玲子（慶応義塾大学）、佐藤徹（北海道教育大学）、中村和彦（山梨大学）、野中壽子（名古屋市立大学）、本間三和子（筑波大学）、山神眞一（香川大学）

担当研究員 森丘保典（スポーツ科学研究室）

<目次>

1	基礎的動きの観察・評価力の向上に向けて（阿江通良）	1
2	小学校低・中学年における基本運動（基礎的動き）の調査報告（國土将平）	2
3	基礎的動きの評価観点学習用DVDの検証について	
3-1	幼少年期に身につけておくべき基礎的動きの評価観点テストについて（飯干明）	14
3-2	基礎的動きに関する評価観点および学習用DVDの妥当性・有用性の検討（加藤謙一）	20
3-3	動作の評価能力向上を目的とした学習プログラムの効果に関する報告（窪康之）	24
3-4	映像を用いた基礎的動きの評価の妥当性—全体印象と部分的着目点での評価（佐々木玲子）	30
3-5	動きの観察能力と質的評価（佐藤徹）	33
3-6	基本的運動の質的評価における学習効果について—保育系学生を対象として—（野中壽子）	42
3-7	基礎的動きの評価観点の効果および評価テストの信頼性について（本間三和子）	48
3-8	幼少年期に身につけておくべき基礎的動きに関する評価観点テストについて（山神眞一）	58
4	おわりに代えて：本プロジェクト成果の活用法について（阿江通良）	62

# 1 基礎的動きの観察・評価力の向上に向けて

阿江 通良（筑波大学）

本プロジェクトは、歩、走、跳、投などの幼少年期に身につけておくべき基礎的動きについて、幼少年の習得度に関する実態調査を行い、基礎的動きの評価法、効果的な習得法などを提案することをねらいとしている。

初年度（平成17年度）には、習得すべき基礎的動きの検討を行なうことを目的として、基礎的動きのリストアップを行い、それをもとに15種の基礎的動きの習得度を調査した。そして、調査した動きの適否、評価の観点と基準、質的評価と量的評価の関係や軽重などを検討した。その結果、基礎的動きの習得度の調査に関して以下のことが示唆された。

- ①評価法（評価の観点、基準など）を統一する必要がある。
- ②「できる」、「できない」という第1段階評価に加え、動きの質やできばえ（難度）などの第2段階評価も行なう必要がある。
- ③評価の基準となる動きのパターン（モデル）を必要がある。

第2年度（平成18年度）には、水中における動きを含む29種の基礎的動きを決定し、質的評価の観点および基準を作成した。これらの基礎的動きから5～24種を選んで幼児から大学生までの210名を対象に調査を行った。そして、評価法の適切性、被験者の動き（VTRを再生）などについて詳細に検討した結果、以下のことがわかった。

- ①質的評価の精度は評価者の習熟度に大きく依存する。
- ②質的評価の観点を提示することによって評価のバラツキが小さくなり、評価の精度が向上する。
- ③評価観点にもとづいて動きを評価する前に、全体印象（印象分析）に着目して動きを評価する必要がある。

④評価者の運動観察力のトレーニングが必要である。このことが体育の専門家でない保育士や小学校教員の幼児や児童の動きへの関心を高めることに役立つ。

⑤評価に先立って標準的な動きのパターンをサンプルとして提示する必要がある。

最終年度（平成19年度）には、動きの全体印象を質的評価の観点に加えるとともに、評価者の運動観察・評価力を向上させるため、動きの評価テスト用DVD、動きの評価学習用DVD資料を作成し、保育士や小学校教員に子どもの基礎的動きを観察・評価してもらい、その妥当性や有効性を検討した。さらに、作成したテスト用DVDを用いて学習した評価者により小学生914名の基礎的動き（総調査数15種）の成就率を調査し、データの蓄積に努めた。

その結果、以下のことがわかった。

- ①動きの全体印象を含む質的評価の観点を提示することによって動きの観察・評価に不慣れた評価者でもかなり正しく動きを評価できる。
- ②作成したDVDにより動きの観察・評価の学習を行なうことにより、動きの観察・評価力は向上する。

また、今回作成した動きのDVDやモデル映像については現場の指導者のニーズが高く、幼児から小学生までの幅広い発達段階にわたるモデル映像が要求されており、今後、学習用DVDの構成や映像を改善する必要がある、表現（文言）を含めてよりの確な質的評価の観点や基準を探っていく必要があるなどの課題も明らかになった。

本年度の調査結果の詳細については各班員の報告を参照していただきたい。なお、本報告書のおわりに、本プロジェクト成果を指導に活用する場合の一例を述べた。

## 2 小学校低・中学年における基本運動（基礎的動き）の調査報告

國土将平（神戸大学）

### 1. はじめに

幼少年期に身に付けておくべき基本の運動（基礎的運動）の調査項目、測定・評価方法について1年以上検討されてきた。本調査では、この調査項目の中から、実施の可能性、簡便性を考慮し、小学校において、実際に調査・測定を行い、測定・評価方法上の問題点を探るとともに、児童の基本の運動の実態を把握することを目的とする。

### 2. 方法

鳥取市内の小学校7校を対象として、平成19年10月～11月にかけて調査を実施した。対象学校において、小学校1年生から4年生917名を対象として基本運動の調査を実施した（表1）。

調査項目は、前回報告書2）3）ならびに会議

で検討された基本的な動きとそれを含むテスト項目のリストに基づき、対象年齢や場面設定、難易度、実施場所などを考慮し、日常生活の場から7種目、生存・危機の場の対応から6種目、スポーツの場から5種目の合計18種目を抽出した（表2）。調査に際して、困難度や場面設定を考慮し、3グループに分け（表3）、各学校と事前打ち合わせを行い、どのグループを調査が可能であるか相談

表1 対象者数

学年	男	女	合計
1年生	106	91	197
2年生	128	134	262
3年生	170	182	352
4年生	53	50	103
合計	457	457	914

表2 測定項目

分類	基本的動き	テスト項目
① 日常生活	懸垂（屈）	懸垂支持（だんご虫） うんてい
	歩（前後）×水平、上り、下り、バランス	平均台歩き（往復あり）
	全力疾走	50m走
	跳（水平、鉛直×助走の有無）	立ち幅跳び 走り幅跳び
	混合跳、よじ登る、降りる、跳び降りる	跳びのりおり
② 生存 対・ 危機 の	転（回転、受身）	前転 後転
	よじ登る	登り棒
	よける（静）、かわす（動）	ジグザグ走
	投（軽-重、正確投-遠投）	遠投 正確投（キャッチボール・投）
③ スポ ー ツ	蹴（静-動、正確蹴り-距離蹴り）	ボールキック（プレース） ボールキック（ゴロ）
	捕（受け） 軽-重	キャッチボール（捕）
	ドリブル（手）	ドリブル
	回る（縦軸回転、ピルエット）	両足まわり跳び（左右）

表3 困難度、グループ、実施場所による測定項目分類

分類	テスト項目名	困難度	グループ	場所
①	うんてい	1		
①	懸垂支持（だんご虫）	2		運
①	50m走	2	1	動
②	遠投	4		場
③	ボールキック（ブレース・ゴロ）	5		
①	平均台歩き（往復あり）	1		
②	前転・後転	1		体
①	跳びのりおり	2	2	育
①	立ち幅跳び	3		館
②	ジグザグ走	3		
②	登り棒（3m）	2		
③	両足まわり跳び（左右）	3		運
③	ドリブル	4	3	動
③	キャッチボール（正確投・捕）	5		場
①	走り幅跳び	5		

注：困難度は著者の判断による便宜的値、1：やさしい～5：難しい

の上、3グループの中から2グループを決定した。従って、対象者は12種目の測定を実施する。測定はそれぞれのグループを1限の授業時間で測定し、同日もしくは2日間に分けて測定を実施した。なお、規定時間以内に測定が完了できない場合には測定を中断しており、対象者は各位必ずしも12項目全ての測定を実施できていない。以上の測定上の制限により、種目別対象者数は表4に示すようになる。

測定者は鳥取大学の学生、大学院生である。運動の評価については、先行研究であげられている評価観点を参考にし、評価シートを作成した（資料）。全体印象はA、B、Cの3段階評価で行った。全体としての動きがよくできていればA（よくできる）、ある程度できていればB（できる）、できなければC（できない）とした。動作の評細目は「できている」を○、「できていない」を×で評価した。なお、測定者は測定に際し、事前に測定の講習会を実施し、また、動作の評価方法は当会議で作成した動作評価のテスト用DVDを用いて事前に学習した。なお、運動動作の評価は、各種目2名の担当者を決定し、そのいずれかが評価した。調査実施の実態に即した形式をとるため、測定時に同時に評価した。従って、評価の妥当性、信頼

性、客観性は本調査では検討しない。

### 3. 結 果

懸垂支持について、肘を屈曲した状態での支持は男子では学年が進むにつれ高くなる傾向を示したが、女子では2年生以降変化が見られなかった。膝を屈曲した状態での支持では、男女とも1年生と4年生が高率であった。

うんていについて、男女とも学年が進むにつれ、C評価の率は低下する一方で、A評価の率は男子では低下、女子では顕著な変化が見られなかった。動作細目の評価を見ると1年生において成率は低く、それ以降高くなるが、継続した傾向は見られなかった。

平均台歩きについて、1年生の時よりA評価が50%を超えており、更に学年が進むにつれ徐々に評価が高く流刑校であった。動作細目を見ると方向転換のバランスが、男子では2年生、4年生で、女子では1年生で80%を下回っていた。

50m走について、全体印象は30-50%がA評価であり、学年別の一定傾向の変化は見られなかった。なお、3年生では他の学年に比較してやや評価が悪い。動作細目についても50%を下回る項目

はないが、成就率の変化に一定の傾向は見られなかった。

立ち幅跳びについて、男子においては全体印象の評価が向上する傾向が見られたが、女子においては余り変化が見られなかった。動作細目についてみると、離地時の前傾の評価が他の項目の評価より低く、80%に達していない。また4年生女子において、肘の後方への引き、離地時の前傾の率が他と比較しても低かった。

走り幅跳びについて、測定は2年生と3年生のみであった。2年生では男女差はあまりないが、3年生になると男子は大幅に向上し、女子は逆に低下しており、男女差が顕著となった。

跳びのりおりについて、跳びのりと跳びおり両者とも学年が進むにつれ、評価が向上した。跳びのりと跳びおりを比較すると跳びのりのほうが難しかった。動作細目では、学年が進むにつれ、「すばやく跳びのり」動作の成就率の向上が著しい。

前転について、学年が進むにつれ、C評価の者が減少する傾向であった。特に4年生の女子の評価が他よりも高かった。動作細目を見ると、男女とも、背中をまるめたまま転がる率が、1・2年

生で低く、3年生以上になると急激に高くなった。

後転について、学年が進むにつれ、C評価の者が減少する傾向であった。特に4年生の女子の評価が他よりも高かった。動作細目をみると、3項目とも学年が進むにつれて、成就率が大幅に向上していた。前転と比べると評価が低かった。

登り棒について、調査は3年生までであるが、全体印象でも動作細目についても、男女とも学年がすすむにつれて評価が低くなる傾向であった。

ジグザグ走について、男子では、学年が進むにつれ全体印象が良くなる傾向であったが、女子では2年生以降は顕著な変化は見られなかった。動作細目については、スピードを落とさずに走る項目は、他と比較して低い傾向であった。

遠投について、男女とも学年が進むにつれ評価が著しく高くなった。また、男女差も顕著でありA評価は男子では1年生の時点で50%を超えているが、女子では小学校4年生で50%を超えた。動作細目を見ると、女子では1・2年生でステップ脚の問題よりひねり動作、腕の遅れの動作の成就率が低かった。

キャッチボールについて、測定は2・3年のみであったが、正確投げ、捕球ともに2年生から3

表4 測定項目別対象者数

学年	男子					女子				
	1年生	2年生	3年生	4年生	合計	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
懸垂支持	106	107	101	53	367	90	112	106	49	357
うんてい	49	36	43	35	163	37	46	40	29	152
平均台歩き	60	79	166	53	358	63	89	169	50	371
50m走	106	93	102	53	354	90	91	106	49	336
立幅跳	50	77	146	52	325	45	87	150	50	332
走幅跳	0	21	30	0	51	0	28	36	0	64
跳びのりおり	94	79	153	53	379	84	89	161	50	384
前転	64	79	155	53	351	57	89	157	50	353
後転	64	79	155	53	351	57	89	157	50	353
登り棒	46	46	72	0	164	35	42	84	0	161
ジグザグ走	69	74	128	53	324	63	84	127	50	324
遠投	106	88	102	53	349	90	90	106	49	335
キャッチボール	0	20	30	0	50	0	27	36	0	63
ボールキック	106	84	127	53	370	90	83	134	49	356
ドリブル	0	21	67	0	88	0	28	70	0	98
両足まわり跳び	0	18	67	0	85	0	25	70	0	95

年生になると大幅に全体印象、正確投げ回数、捕球回数ともに向上した。捕球動作の細目については、腕を曲げてのボールコントロールが難しい項目であった。

ボールキックについて、男子において、プレースキック。ゴロキックとも学年が進むにつれて、その評価は大幅見向上した。女子においては、プレースキックは一定の向上傾向は見られなかったが、ゴロキックでは評価が向上した。男子においてはプレースキックの方が評価が高かったが、女子ではゴロキックの評価が高くなった。動作細目を見ると、蹴り脚のバックスイングが最も成就ついるが低く、軸足がボールの横に踏み込まれる、蹴り脚が勢いよく前方に振られているが難しい項目であった。

ドリブルは、2・3年生のみの測定となったが、3年生になるとわずかながら評価が高くなる傾向を示した。男女差はみられなかった。動作細目を見ると、2年生ではボールを見るために下を向いている傾向を示し、2・3年生では身体とボールの位置関係の安定性が課題であった。

両足まわり跳びは左右の回転、ならびに角度を指定しての回転でそれぞれ評価を行った。2・3年生のみの測定となったが、男子では2年生から3年生に全体印象が向上しているが、女子では逆に低下する傾向であった。回転角度が180° の時の方が360° と比較すると、動作細目の評価が良い傾向であった。左右による差は顕著ではない。

## 4. 測定上の問題点など

### 4.1. 測定実施上の問題・課題

測定項目が多く、測定を依頼した場合でも、測定のイメージが学校側に伝わるまで、かなりの時間を要した。実際に今回の測定では平成18年10月に事前説明、測定の可能性の打診を行い、19年2月、5月、8月、9月の合計4回の調査打ち合わせ（9月は学校別に詳細打ち合わせ）が必要であった。説明に際して、学校の協力を得るための調査

マニュアル作成、器具の配置図、人員の見込み、調査グループで準備する調査用具、学校の施設・物品の状況や借用の是非など、綿密な準備を必要とした。学校に調査依頼して調査を実施する場合、これらの情報を集約してすぐに利用可能な状態にすることが必要であろう。

### 4.2. 測定環境上の問題

学校に設置されているうんていの形状は様々で、アーチ状になっているものや円形、傾斜のついているもの等あり、測定の条件を一定にすることが難しかった。

ジグザグ走では、旧体力診断テストのジグザクドリブル用のボールを用いたが、学校ではすでにボールを廃棄してしまっている学校が大半であり、その確保に苦慮した。

登り棒は多くの場合、支持部までの高さが3m未満であり、最も低いものは2.6mであった。具体的な高さを指示する必要がある。

### 4.3. 測定実施上の問題

今回の測定で最も評価の難しかったのはキャッチボールである。テニスボールの正確投げが難しく、ボールの強さと方向のコントロールが難しそうであった。また、捕球は相手の正確投げの結果に制限されており、正確に投げられないと捕球は著しく難しくなる。また、ボールを一度後方へ反らすと取りに行く時間も必要となる。マニュアルでは5回となっていたが、時間の制約上今回は3回で実施した。

### 4.4. 評価上の問題

測定に際して、動作の評価者は、事前の動作評価のトレーニングをDVDを用いて行ったが、測定者自身、その効果は高く、評価のスキルアップにつながったと評価した。その一方で、測定時に自己の評価基準が一定であるかどうかについて、疑問を感じることを報告した。

また、結果を見ると、動作細目の評価が良いが、全体印象の評価が低く、一貫性に欠けると感じられる部分もある。評価の難しさは継続した課題であるが、さらに検討が必要であろう。

表5 測定項目別・性・学年別の全体印象と動作評価

項目	性別		男				女			
	学年		1	2	3	4	1	2	3	4
懸垂支持	人数		106	107	101	53	90	112	106	49
	①肘屈曲維持		31.1%	35.5%	45.5%	62.3%	30.0%	42.9%	45.3%	42.9%
	②膝屈曲維持		70.8%	58.9%	54.5%	69.8%	60.0%	50.9%	50.0%	63.3%
うんてい	人数		49	36	43	35	37	46	40	29
	全体印象	A	42.9%	36.1%	14.0%	25.7%	27.0%	43.5%	32.5%	34.5%
		B	24.5%	36.1%	44.2%	57.1%	24.3%	19.6%	37.5%	44.8%
		C	32.7%	27.8%	41.9%	17.1%	48.6%	37.0%	30.0%	20.7%
	①腕や足の振り込み		71.4%	63.9%	51.2%	74.3%	54.1%	54.3%	70.0%	65.5%
	②腕を左右交互に出す		34.7%	44.4%	46.5%	45.7%	27.0%	63.0%	80.0%	65.5%
	③一段以上とばす		28.6%	30.6%	25.6%	45.7%	8.1%	52.2%	57.5%	55.2%
平均台歩き	人数		60	79	166	53	63	89	169	50
	全体印象	A	50.0%	53.2%	69.3%	67.9%	63.5%	69.7%	67.5%	76.0%
		B	43.3%	39.2%	27.7%	30.2%	31.7%	27.0%	29.6%	24.0%
		C	6.7%	7.6%	3.0%	1.9%	4.8%	3.4%	3.0%	0.0%
	①交互に足を出す		96.7%	91.1%	98.8%	98.1%	96.8%	97.8%	98.8%	100.0%
	②方向転換のバランス		80.0%	79.7%	84.9%	73.6%	77.8%	84.3%	84.0%	84.0%
50m走	人数		106	93	102	53	90	91	106	49
	全体印象	A	41.5%	45.2%	26.5%	47.2%	28.9%	42.9%	20.8%	36.7%
		B	48.1%	44.1%	57.8%	45.3%	57.8%	40.7%	58.5%	55.1%
		C	10.4%	10.8%	15.7%	7.5%	13.3%	16.5%	20.8%	8.2%
	①腿が良くあがっている		80.2%	80.6%	58.8%	77.4%	70.0%	80.2%	57.5%	67.3%
	②歩幅が大きい		65.1%	67.7%	69.6%	90.6%	70.0%	59.3%	70.8%	93.9%
③腕が前後に大きく振られ、肘が適度に曲がっている		70.8%	62.4%	61.8%	62.3%	62.2%	64.8%	51.9%	65.3%	
立ち幅跳び	人数		50	77	146	52	45	87	150	50
	全体印象	A	38.0%	42.9%	46.6%	57.7%	35.6%	34.5%	41.3%	38.0%
		B	56.0%	46.8%	47.3%	34.6%	57.8%	59.8%	46.7%	46.0%
		C	6.0%	10.4%	6.2%	7.7%	6.7%	5.7%	12.0%	16.0%
	①肘を後方に引きながら膝と腰を曲げている		94.0%	87.0%	87.7%	88.5%	77.8%	89.7%	72.7%	66.0%
	②腕の振り込み動作がある		82.0%	79.2%	90.4%	90.4%	71.1%	79.3%	81.3%	82.0%
	③離地時に身体全体を大きく前掲している		74.0%	75.3%	76.0%	73.1%	68.9%	72.4%	64.7%	60.0%
④両脚で着地している		78.0%	81.8%	82.2%	98.1%	86.7%	90.8%	94.7%	96.0%	



表5 測定項目別・性・学年別の全体印象と動作評価（続き）

項目	性別		男				女					
	学年		1	2	3	4	1	2	3	4		
走り幅跳び	人数		0	21	30	0	0	28	36	0		
	全体印象	A			57.1%	70.0%		46.4%	22.2%			
		B			28.6%	26.7%		39.3%	75.0%			
		C			14.3%	3.3%		14.3%	2.8%			
	①踏切手前で歩幅をかえない			81.0%	90.0%		75.0%	61.1%				
	②踏切脚を力強く伸ばして前上方に飛び出している			71.4%	86.7%		75.0%	50.0%				
	③両脚で着地している			66.7%	43.3%		67.9%	44.4%				
跳びのり	人数		94	79	153	53	84	89	161	50		
	全体印象	A		25.5%	48.1%	41.8%	50.9%	9.5%	28.1%	25.5%	48.0%	
		B		63.8%	43.0%	52.9%	45.3%	66.7%	58.4%	67.7%	52.0%	
		C		10.6%	8.9%	5.2%	3.8%	23.8%	13.5%	6.8%	0.0%	
	①両腕で体を支える			92.6%	93.7%	96.7%	98.1%	79.8%	92.1%	95.7%	100.0%	
	②すばやく跳び乗る			55.3%	79.7%	83.7%	86.8%	39.3%	66.3%	78.3%	86.0%	
	跳びおり	全体印象	A		69.1%	78.7%	86.3%	90.6%	77.4%	96.4%	95.7%	90.0%
		B		23.4%	16.0%	11.1%	9.4%	21.4%	2.4%	3.7%	10.0%	
		C		7.4%	5.3%	2.6%	0.0%	1.2%	1.2%	0.6%	0.0%	
		①脚のクッションを使う			92.6%	92.0%	96.7%	98.1%	98.8%	98.8%	97.5%	98.0%
		②姿勢を崩さずに着地			80.9%	84.0%	93.5%	98.1%	91.7%	96.4%	98.8%	100.0%
	前転	人数		64	79	155	53	57	89	157	50	
		全体印象	A		21.9%	20.3%	17.4%	24.5%	21.1%	12.4%	20.4%	42.0%
B				51.6%	54.4%	68.4%	58.5%	45.6%	65.2%	62.4%	50.0%	
C				26.6%	25.3%	14.2%	17.0%	33.3%	22.5%	17.2%	8.0%	
①両手をついて頭を入れる				84.4%	70.9%	74.8%	77.4%	75.4%	78.7%	78.3%	74.0%	
②背中を丸めたまま転がる				32.8%	32.9%	61.3%	83.0%	29.8%	19.1%	63.7%	86.0%	
③起き上がる				68.8%	77.2%	70.3%	69.8%	56.1%	88.8%	70.1%	78.0%	
後転	人数		64	79	155	53	57	89	157	50		
	全体印象	A		4.7%	2.5%	11.0%	11.3%	3.5%	2.2%	10.8%	24.0%	
		B		28.1%	31.6%	36.8%	60.4%	14.0%	27.0%	43.9%	56.0%	
		C		67.2%	65.8%	52.3%	28.3%	82.5%	70.8%	45.2%	20.0%	
	①背中を丸めて顎を引く			26.6%	31.6%	39.4%	52.8%	19.3%	27.0%	43.9%	66.0%	
	②手を使って体を押している			29.7%	35.4%	41.9%	64.2%	21.1%	33.7%	45.9%	72.0%	
③まっすぐに転がる			28.1%	34.2%	35.5%	69.8%	15.8%	24.7%	42.7%	72.0%		

表5 測定項目別・性・学年別の全体印象と動作評価（続き）

項目	性別		男				女			
	学年		1	2	3	4	1	2	3	4
登り棒	人数		46	46	72	0	35	42	84	0
	全体印象	A	50.0%	52.2%	29.2%		25.7%	33.3%	23.8%	
		B	21.7%	23.9%	34.7%		31.4%	35.7%	27.4%	
		C	28.3%	23.9%	36.1%		42.9%	31.0%	48.8%	
	①腕による引きつけと脚を棒に挟む		73.9%	82.6%	47.2%		57.1%	69.0%	41.7%	
	②動きが連動している		63.0%	67.4%	47.2%		45.7%	50.0%	39.3%	
	③スピードをコントロールして降りられる		69.6%	73.9%	66.7%		57.1%	50.0%	47.6%	
ジグザグ走	人数		69	74	128	53	63	84	127	50
	全体印象	A	59.4%	70.3%	75.8%	81.1%	61.9%	71.4%	71.7%	70.0%
		B	34.8%	27.0%	21.9%	18.9%	33.3%	25.0%	27.6%	24.0%
		C	5.8%	2.7%	2.3%	0.0%	4.8%	3.6%	0.8%	6.0%
	①ボールに触れずに走る		87.0%	86.5%	83.6%	90.6%	96.8%	86.9%	89.0%	90.0%
	②スピードを落とさずに走る		69.6%	78.4%	78.1%	79.2%	74.6%	82.1%	78.7%	70.0%
	③身体を内側に倒している		91.3%	87.8%	89.8%	96.2%	84.1%	86.9%	89.0%	88.0%
遠投	人数		106	88	102	53	90	90	106	49
	全体印象	A	51.9%	69.3%	80.4%	88.7%	3.3%	17.8%	34.9%	61.2%
		B	43.4%	27.3%	19.6%	11.3%	70.0%	53.3%	62.3%	38.8%
		C	4.7%	3.4%	0.0%	0.0%	26.7%	28.9%	2.8%	0.0%
	①ステップ脚が前に出る		84.0%	91.3%	99.0%	98.1%	46.7%	55.4%	88.7%	98.0%
	②テイクバックがある		92.5%	93.3%	100.0%	100.0%	77.8%	84.3%	91.5%	98.0%
	③状態のひねりを使っている		90.6%	91.1%	96.1%	100.0%	36.7%	48.9%	74.5%	85.7%
④腕が遅れて出てくる		81.1%	86.5%	95.1%	100.0%	56.7%	50.5%	90.6%	98.0%	

表5 測定項目別・性・学年別の全体印象と動作評価（続き）

項目	性別	男				女						
		学年	1	2	3	4	1	2	3	4		
正確投げ	人数		0	20	30	0	0	27	36	0		
	全体印象	A			15.0%	53.3%			7.4%	38.9%		
		B			50.0%	26.7%			63.0%	33.3%		
		C			35.0%	20.0%			29.6%	27.8%		
	正確投げ回数	1			15.4%	13.0%			50.0%	37.0%		
		2			53.8%	39.1%			25.0%	29.6%		
		3			30.8%	47.8%			25.0%	33.3%		
キャッチボール 捕る	人数		0	20	29	0	0	27	35	0		
	全体印象	A			30.0%	62.1%			7.4%	28.6%		
		B			50.0%	24.1%			59.3%	42.9%		
		C			20.0%	13.8%			33.3%	28.6%		
	①準備した手の肘が曲がっている				90.0%	86.2%			70.4%	80.0%		
		②手のひらでボールを受けている			75.0%	75.9%			55.6%	68.6%		
			③腕を曲げてボールの勢いをコントロールしている			45.0%	62.1%			29.6%	28.6%	
	捕球回数			1			33.3%	44.4%			44.4%	55.6%
		2				50.0%	22.2%			33.3%	27.8%	
		3			16.7%	33.3%			22.2%	16.7%		

表5 測定項目別・性・学年別の全体印象と動作評価（続き）

項目	性別		男				女			
	学年		1	2	3	4	1	2	3	4
プレー スキック	人数		106	83	127	53	90	83	134	49
	全体印象	A	47.2%	51.8%	72.4%	69.8%	10.0%	6.0%	23.1%	22.4%
		B	46.2%	48.2%	21.3%	30.2%	54.4%	71.1%	56.7%	51.0%
		C	6.6%	0.0%	6.3%	0.0%	35.6%	22.9%	20.1%	26.5%
	①ボールをよく見ている		99.1%	100.0%	96.1%	100.0%	96.7%	91.6%	86.6%	91.8%
②軸足がボールの横に踏み込まれている		59.4%	77.1%	76.4%	75.5%	40.0%	42.2%	54.5%	55.1%	
ボール キック	人数		106	98	139	53	90	97	140	49
	全体印象	A	41.5%	36.7%	61.9%	60.4%	6.7%	7.2%	32.9%	38.8%
		B	48.1%	49.0%	33.8%	35.8%	50.0%	59.8%	50.0%	38.8%
		C	10.4%	14.3%	4.3%	3.8%	43.3%	33.0%	17.1%	22.4%
	①ボールをよく見ている		96.2%	99.0%	96.4%	98.1%	91.1%	95.9%	95.7%	95.9%
②軸足がボールの横に踏み込まれている		62.3%	51.0%	79.9%	75.5%	38.9%	32.0%	57.9%	63.3%	
ゴロ キック	人数		0	21	67	0	0	28	70	0
	全体印象	A		14.3%	23.9%			10.7%	20.0%	
		B		28.6%	41.8%			60.7%	47.1%	
		C		57.1%	34.3%			28.6%	32.9%	
	①同じ高さで安定してボールをついている			38.1%	59.7%			50.0%	57.1%	
②身体とボールの関係（距離）が安定している			28.6%	38.8%			53.6%	35.7%		
ドリ ブル	③顔や上体が適度に前を向いている			28.6%	62.7%			32.1%	58.6%	

表5 測定項目別・性・学年別の全体印象と動作評価（続き）

項目	性別		男				女			
	学年		1	2	3	4	1	2	3	4
	人数		0	18	67	0	0	25	70	0
全体印象	A			38.9%	43.3%			56.0%	50.0%	
	B			44.4%	49.3%			44.0%	42.9%	
	C			16.7%	7.5%			0.0%	7.1%	
右 180°	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている			94.4%	80.6%			100.0%	81.4%	
	②バランスを崩さず着地できる			83.3%	62.7%			96.0%	70.0%	
360°	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている			61.1%	92.5%			68.0%	91.4%	
	②バランスを崩さず着地できる			61.1%	55.2%			52.0%	60.0%	
全体印象	A			27.8%	40.3%			60.0%	47.1%	
	B			61.1%	49.3%			28.0%	44.3%	
	C			11.1%	10.4%			12.0%	8.6%	
左 180°	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている			94.4%	71.6%			92.0%	77.1%	
	②バランスを崩さず着地できる			88.9%	59.7%			92.0%	67.1%	
360°	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている			55.6%	91.0%			72.0%	82.9%	
	②バランスを崩さず着地できる			55.6%	47.8%			52.0%	55.7%	

資料・記録用紙

学校 年 組 氏名

1. 男 2. 女

テスト	評価	評価の観点・尺度	
懸垂支持		①肘の屈曲を保って、10秒間ぶら下がる。	記録
		②膝の屈曲を保って、10秒間ぶら下がる。	
うんてい		全体印象：リズムよく進んでいる。	
		①腕や脚の振込みを使うことができる。	
		②腕を左右交互に出すことができる。	
平均台歩き		全体印象：バランスよく、フラフラしないで歩いている。	
		①交互に足を出している。	
		②方向変換でバランスを崩さない。	
50m走		全体印象：前方にスムーズに進んでいる。	記録
		①腿が良く上がっている。	
		②歩幅が大きい。	
立幅跳		全体印象：両脚で前方へ力強く跳躍している。	記録
		①肘を後方に引きながら膝と腰を曲げている。	
		②離地時に身体全体を大きく前傾している。	
		③腕の振り込みが動作がある。	
走幅跳		全体印象：助走スピードを生かしてスムーズに踏み切ることができる。	記録
		①踏み切りの手前で、歩幅をあまり変えずに踏み切ることができる。	
		②踏切脚を力強く伸ばして前上方に飛び出している。	
		③両足で着地している。	
跳びのり おり	跳びのり	全体印象：スムーズに跳びのることができる	
		①両腕で体を支えることができる。	
		②跳び箱の上に素早く跳びのることができる。	
	跳びおり	全体印象：大きな音をたてずに柔らかく着地できる。	
		①着地で脚のクッション（膝を曲げる）を使うことができる。	
		②手を着かずに着地できる。	
前転		全体印象：転がりかなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある。	
		①両手をついてあごを引き、頭を入れられる。	
		②背中を丸めたまま転がることできる。	
後転		全体印象：立位姿勢からなめらかに転がり、スピーディな後転ができる。	
		①背中を丸めてあごを引いて転がることできる。	
		②手（腕）を使って体を押している。	
		③まっすぐ転がることできる。	

テスト		評価	評価の観点・尺度	
登り棒 (3m)			全体印象：動きが途切れず上まで登れる	
			①腕による引きつけと足で棒を挟んで脚による身体の押し上げができる。	
			②腕の引きつけと脚による押し上げが連動している。	
			③スピードをコントロールして安全に降りられる。	
ジグザグ走			全体印象：障害に触れず、きびきびと方向を変えて走っている。	
			①ボールに触れずに走ることができる。	
			②スピードを落とさずに走ることができる。	
			③方向変換時に身体を内側に倒している。	
遠投			全体印象：全身を使って、腕をむちのように振って投げている。	
			①ステップ脚（投げ腕と反対側）が前に出る。	
			②上半身のひねりを使っている。	
			③テークバック（ステップに先立ち投げ腕を後方に引いている）がある。	
			④体幹が正面を向いたとき肘が肩ラインよりも上にあり、肘が遅れてでてくる。	
キャッチボール	正確投	全体印象：相手の胸のあたりに捕りやすい球を投げている。		記録
		移動しなくてよい場所に投げられた回数を測定する。		
	(捕)	全体印象：ボールの正面に身体を移動させてキャッチしている。		
		①準備した腕の肘が曲がっている。		
②手のひらでボールを受けている。				
ボールキック	(プレス)	全体印象：助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる。		記録
		①ボールをよく見ている。		
		②軸足がボールの横に踏み込まれている。		
		③蹴り脚のバックスイングが大きい。		
	(ゴロ)	④蹴り脚が勢い良く前方に振られている。		
		全体印象：助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる。		
		①ボールをよく見ている。		
		②軸足がボールの横に踏み込まれている。		
ドリブル	③蹴り脚のバックスイングが大きい。		記録	
	④蹴り脚が勢い良く前方に振られている。			
	全体印象：ボールと身体の移動がスムーズである。			
	①同じ高さで安定してボールをついている。			
跳び (両足まわり (左右))	②身体とボールの関係（距離）が安定している。		記録	
	③顔や上体が適度に前を向いている。			
	全体印象：準備動作から着地までをなめらかに行っている。			
	(ひねり出しの動作を評価する)			
	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。			
	②バランスを崩さず着地できる。			
180度		記録		
360度				

### 3-1 幼少年期に身につけておくべき基礎的動きの評価観点テストについて

飯 干 明 (鹿児島大学)

#### 1. はじめに

幼少年期に身につけておくべき基礎的動きについて、10種類の基礎的動きの評価観点をテストするために試作されたDVDを大学生に見せ評価させた。本報告では、それらの結果を紹介するとともに、学生の自由記述から基礎的動きの評価DVDを改訂するための示唆を得ることとした。

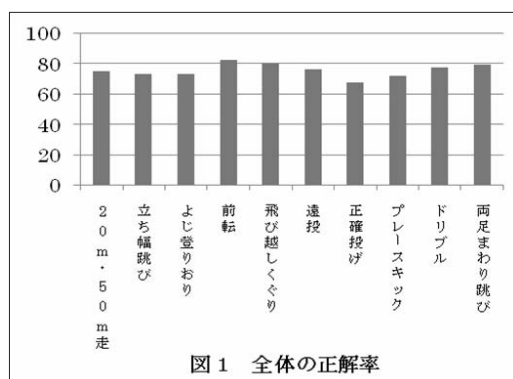
#### 2. 調査方法

調査の対象者は、鹿児島大学で発育発達に関する講義を受講した教育学部の1年生から4年生までの28名(男子6名、女子22名)であった。これらの学生に、発育期における走・跳・投の基礎的動きに関する講義を行った後、10種類の基礎的動き(20m・50m走、立ち幅跳び、よじ登りおり、前転、飛び越しくぐり、遠投、正確投げ、プレースキック、ドリブル、両足まわり跳び)の評価観点テスト用DVD(プレテスト用)を見せ、評価用紙に評価の観点・尺度(全体印象と個別の項目)の解答を記入させた。そして、10種目の評価が終了した後で、プレテスト用DVDを見た感想を自由記述で記入させた。

#### 3. 結 果

##### (1) 全体の正解率について

図1は、10種類の基礎的動きについて、全体印



象と部分観点の評価項目の全てをあわせた正解率を示したものである。「前転」の正解率が82.5%で最も高く、「飛び越しくぐり」(80.2%)、「回り跳び」(79.5%)の順になっており、最も低い正解率は「正確投げ」の67.6%であった。なお、10種類の基礎的動きの平均正解率は75.8%と高い傾向にあった。

図2は、10種類の基礎的動きについて、それぞれの動きの全体印象に関する正解率を示したものである。なお、「よじ登り(跳び乗り)おり」と「正確投げ」については、いずれも動きの異なる2つの局面の全体印象をテストしたので、「よじ登り(跳び乗り)おり」については「よじ登りおり(乗り)」と「よじ登りおり(おり)」に、「正確投げ」については「正確投げ(投)」と「正確投げ(補)」に、それぞれ分けて図示した。

全体印象の正解率は、「ドリブル」の77.9%が最も高く、「前転」(73.6%)、「正確投げ(投)」(72.2%)の順であった。一方、最も低い正解率は、「プレースキック」の48.6%であり、次いで、「正確投げ(補)」(54.3%)であった。なお、10種類の基礎的動きの全体印象の平均正解率は64.9%であった。

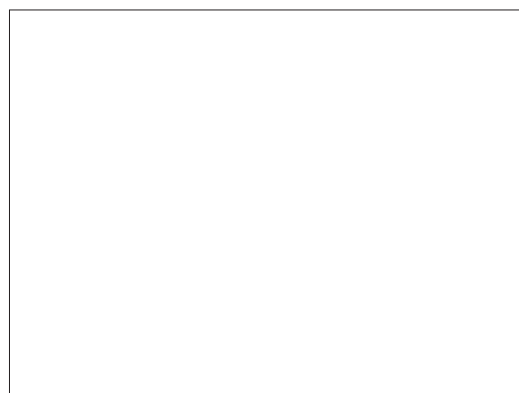
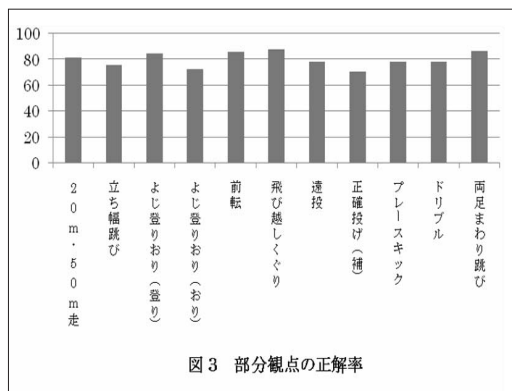


図3は、10種類の基礎的動きについて、それぞれの動きに関する2～4の部分観点の平均正解率



を示したものである。なお、「正確投げ」については、「投」の部分観点がなかったため、「正確投げ（補）」についてのみ図示した。

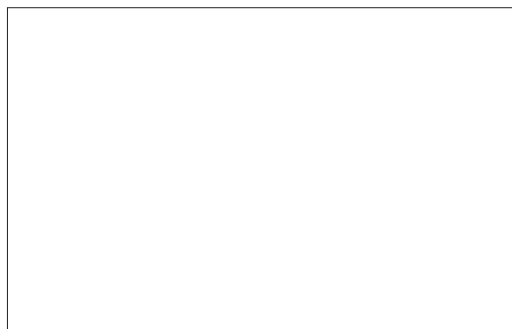


最も正確率が高かったのは、「飛び越しくぐり」の87.5%であり、「回り跳び」（86.4%）、「前転」（85.5%）、「よじ登りおり（よじ登り）」（84.5%）、「20m・50m走」（81.2%）は、いずれも80%を超える高い正確率であった。一方、最も低い正確率は、「正確投げ（補）」の70.5%であったが、10種目をあわせた部分観点の正確率は79.8%となっており、図2に示した10種目をあわせた全体印象の正確率（64.9%）よりも高い傾向にあった。

## (2) 各基礎的動きの正確率について

### 1) 20m・50m走

図4は、「20m・50m走」について、評価項目全体、全体印象（前方へスムーズに進んでいる）、部分観点全体と3つの部分観点（①腿が良く上がっている、②歩幅が大きい、③腕は前後に大きく振られ、肘は適度に曲がっている）の正確率を示したものである。

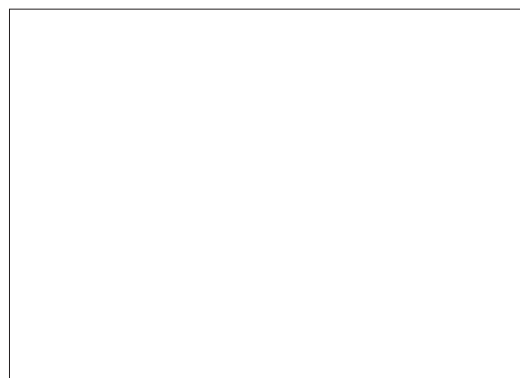


評価項目全体の正確率（図中の全体）は、75.4%であったが、全体印象の正確率は57.9%と低い傾向にあった。一方、部分観点全体（図中の部分観点）の正確率は81.2%と高く、なかでも、部分観点①（腿が良く上がっている）の正確率は、85.7%と高かった。

### 2) 立ち幅跳び

図5は、「立ち幅跳び」について、評価項目全体、全体印象（両脚で前方へ力強く跳躍している）、部分観点全体と4つの部分観点（①準備で膝と腰をよく曲げている、②腕を後方から前方にタイミングよく振っている、③離地時に身体全体を大きく前傾している、④両足で着地している）の正確率を示したものである。

評価項目全体の正確率は、73.7%であり、全体印象の正確率は65.4%であった。部分観点全体では75.8%であり、部分観点①と②の正確率は、それぞれ83.5%と84.9%が高かったが、部分観点③（離地時に身体全体を大きく前傾している）の正確率は55.6%と低い傾向にあった。



### 3) よじ登りおり（跳び乗りおり）

図6は「よじ登りおり（跳び乗りおり）」について、評価項目全体、「よじ登り（跳び乗り）」の全体印象（スムーズによじ登る（跳び乗る）ことができる）、部分観点全体と3つの部分観点（①両腕で体を支えることができる、②跳び箱の上へ素早くよじ登る（跳び乗る）ことができる、③跳び箱の上で身体のバランスがとれている）、さらに、「跳びおり」の全体印象（大きな音をたてずに柔らかく着地できる）、部分観点全体と2つの部分観点（①着地で脚のクッション（膝や腰を曲

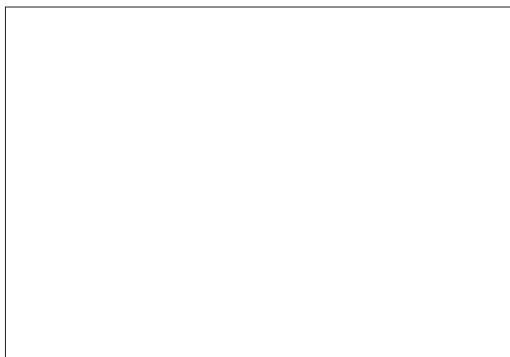
げる)を使うことができる、②着地で身体のバランスがとれている)の正解率を示したものである。



評価項目全体の正解率は、73.1%であり、全体印象の正解率は62.9%であった。「よじ登り(跳び乗り)」の部分観点全体の正解率(図中の「登り部分観点」)は84.5%であり、各部分観点の正解率は、①が88.6%、②が77.1%、③が87.9%であった。一方、「跳びおり」の全体印象の正解率は50.0%と低かったが、「跳びおり」の部分観点全体の正解率は72.5%であった。また、部分観点①の正解率は55.7%と低かったが、部分観点②は89.3%と高かった。

#### 4) 前 転

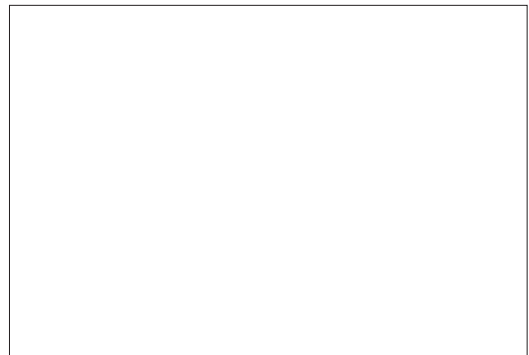
図7は「前転」について、評価項目全体、前転の全体印象(転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある)、前転の部分観点全体と3つの部分観点(①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる、②背中を丸めたまま転がることことができる、③起き上がることことができる)の正解率を示したものである。



評価項目全体の正解率は、82.5%であり、全体印象の正解率は73.6%であった。また、部分観点全体の正解率は85.5%であり、各部分観点の正解率は、①が78.6%、②が94.3%、③が83.6%であった。

#### 5) 跳び越しくぐり

図8は「跳び越しくぐり」について、評価項目全体、全体印象(跳ぶ動きとくぐる動きがすばやく連続している)、部分観点全体と2つの部分観点(①ゴムを跳び越すことことができる、②体を低くしてゴムをくぐることことができる)の正解率を示したものである。

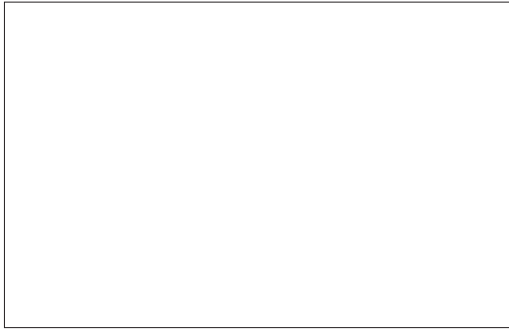


評価項目全体の正解率は、80.2%であり、全体印象の正解率は65.7%であった。また、部分観点全体の正解率は87.5%であり、各部分観点の正解率は、①が91.4%、②が83.6%であった。

#### 6) 遠 投

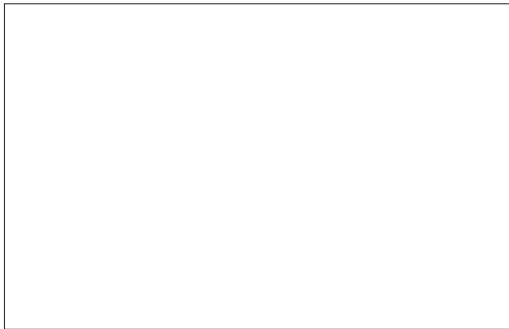
図9は「遠投」について、評価項目全体、遠投の全体印象(全身を使って、腕をむちのように振って投げている)、遠投の部分観点全体と3つの部分観点(①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている、②ステップ脚(投げ腕と反対側)が前に出る、③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる)の正解率を示したものである。

評価項目全体の正解率は、76.4%であり、全体印象の正解率は71.2%であった。また、部分観点全体の正解率は78.1%であり、各部分観点の正解率は、①が76.0%、②が93.5%、③が64.6%であった。



### 7) 正確投げ

図10は「正確投げ」について、評価項目全体、投の全体印象（相手の胸のあたりに捕りやすい球を投げている）、補の全体印象（ボールの正面に身体を移動させてキャッチしている）、補の部分観点全体と3つの部分観点（①準備した腕の肘が曲がっている、②手のひらでボールを受けている、③腕を曲げてボールの勢いをコントロールしている）の正解率を示したものである。



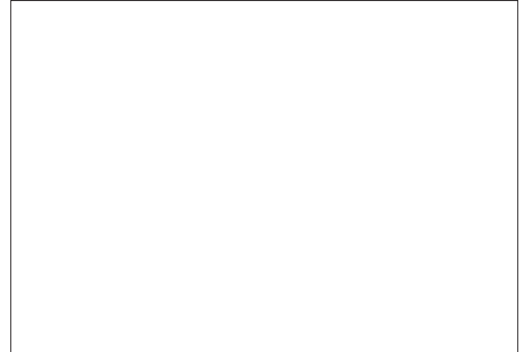
評価項目全体の正解率は、67.6%であり、「投」の全体印象の正解率は72.2%であったが、「補」の全体印象の正解率は54.3%と低い傾向にあった。また、「補」の部分観点全体の正解率は70.5%であり、各部分観点の正解率は、①が69.3%、②が73.6%、③が68.6%であった。

### 8) プレースキック

図11は「プレースキック」について、評価項目全体、プレースキックの全体印象（助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる）、キックの部分観点全体と4つの部分観点（①ボールをよく見ている、②軸足が力強く踏み込まれている、③蹴り足のバックスイングが大きい、④蹴

り脚が勢い良く前方に振られている）の正解率を示したものである。

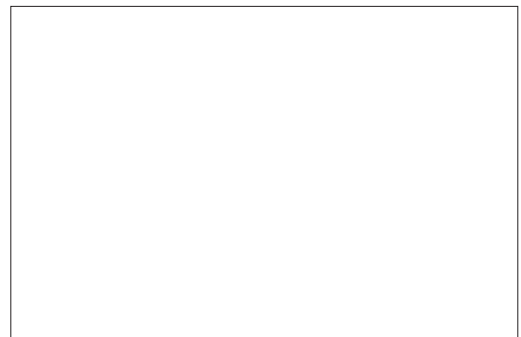
評価項目全体の正解率は、72.0%であったが、プレースキックの全体印象の正解率は48.6%で低かった。部分観点全体の正解率は77.9%であり、各部分観点の正解率は、①が82.9%、②が72.1%、③が92.1%、④が64.3%であった。



### 9) ドリブル

図12は「ドリブル」について、評価項目全体、ドリブルの全体印象（ボールと身体の移動がスムーズである）、部分観点全体と3つの部分観点（①同じ高さで安定してボールをついている、②身体とボールの関係（距離）が安定している、③顔や上体が適度に前を向いている（極度に下をむいていない、ボールばかり見ていない）の正解率を示したものである。

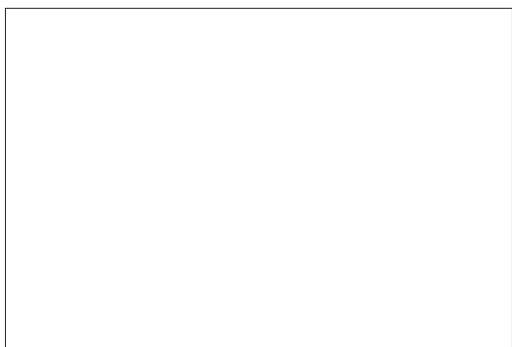
評価項目全体の正解率は、78.0%であり、全体印象の正解率は77.9%であった。また、部分観点全体の正解率は78.1%であり、各部分観点の正解率は、①が86.4%、②が77.9%、③が78.1%であった。



## 10) 両足まわり跳び

図13は「両足まわり跳び」について、評価項目全体、全体印象（準備動作から着地までなめらかに行っている）、部分観点全体と2つの部分観点（①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている、②バランスを崩さず着地できている）の正解率を示したものである。

評価項目全体の正解率は、79.5%であり、全体印象の正解率は65.7%であった。また、部分観点全体の正解率は86.4%であり、各部分観点の正解率は、①が75.0%、②が97.9%、であった。



## (3) 学生の感想について

10種類の基礎的動きの評価が終了した後で、プレテスト用DVDを見た感想を自由記述で記入させたところ、①子どもの動きに関する感想と、②評価用DVDに関する感想とに大別できた。それぞれの主な感想は、以下のようなものであった。

### 1) 子どもの動きに関する感想

- ・投げる動作、捕る動作の不得意な人が多くみられた。
- ・できる子、できない子はこんなにも差があるのかと驚いた。なるべく体を大きくつかっている方が、バランスもよく、動きがなめらかになると思った。たとえ幼稚園児でも、体を動かすことに慣れている子、慣れていない子は、大きく分かれてしまうと感じた。
- ・動きは、基礎をしっかりと行えば、ある程度できると感じたので、教育する場合は、部分観点をしっかりと教えなければならぬと思った。
- ・子どもたちの動きは、1人ひとりに特徴があり、年齢や体格に関係なく得意、不得意なものがある

と思った。特に、投げたり、捕ったりする動作では、大きな差が出るため、小さい頃からの運動習慣は大切だと思った。

- ・結果だけでなく、過程も大切なものだと思った。記録がよくてもフォームを誤ってしまったことでケガにつながることもあるから、動作をきちんとみてあげることが大事だと思った。それと、幼児期の時点で、すでにフォームが違う子たちもいて、個人差の違いもみなければいけないと思った。
- ・運動の種目によっては、体の大きさが関係してくるものがあった。具体的には、跳び越しくぐりをするときに体の大きな子どもは少し不利であったように感じた。やはり、幼稚園児に比べると小学生の動きが大きく、ポイントを押さえていると思った。
- ・腕振りが速いだけでは走るのが速くなるというわけではないことが分かった。ただ見ているだけでは、上手か下手かわからなかったが、今回は、その子はどうすれば上手くできるようになるか考えるようになった。
- ・子どもたちの様々な動きをみて、同じ年代の子どもでも、これ程に個人差があるものなのかと驚いた。やはり個人差があるので、1人ひとりの能力に応じた適切な指導が欠かせないということを改めて感じた。「これくらい年齢だったら、これくらいできるだろう」という先入観をもつことのないよう、子どもの実態を十分に把握した上で個々に合った指導方法を展開していくべきだと思った。

### 2) 評価用DVDに関する感想

- ・映像がよく見ると、どこができていないのかよくわかる。自分自身、運動ができないので、何をすれば上手くなるのかわからなかった。しかし、このように部分別にどこが達成できているかをみることで、少しはコツをつかめたのではないかと思う。
- ・子どもたちの動きを、こんな風にじっくりみることがなかったので、いろいろな点を一緒にみるのが難しく感じた。思っていたよりできているところもあったが、こんなに動きができないのだなと感じるところもあった。どこ

をみたらいいのかを少しは知ることができてよかった。

- とても難しくて違いがあまり分からなかったが、何度か見て経験すれば、しっかり見定めることのできる判断力がつくと思う。
- 立ち幅跳びの評価は4つの観点があって大変だった。
- 立ち幅跳びでは、腕の引き上げが跳ぶタイミングとあっていないと、全体の印象がわるくなってしまう。
- 模範が大学生で、幼稚園児、小学生と評価するため、基準を1つにすることが難しいので、評価しにくいと思った。
- A～Eまで評価すると、Aの時とEの時の評価（印象）が変わることがあった。
- 映像で評価するなら、4回のうち1回をスロー再生にすると、より詳しく見ることができるのではないか。音があると動きを予測しやすいかもしれない。室内での撮影は、光の入る向きを考慮したセッティングをしないと被験者の写りが悪くなる。暗幕を閉めたらどうか。
- 一部、見にくかったので、DVDは、全て同じ

アングルで流して欲しかった。

#### 4. まとめ

幼少年期に身につけておくべき基礎的動きについて、10種類の基礎的動きの評価観点をテストするために試作されたDVDを大学生に評価させ、感想を自由に記述させた。その結果、動きによっては、正解率の低いものもみられたものの、全体的には正解率の高い傾向にあった。DVDを見ることで、大学生は、幼少年期に基礎的動きを身につけることの重要性を再認識し、全体印象や部分観点に着目しながら動きを見ることの重要性を学んだようである。今回は、都合により学習効果を検討することができなかったが、基礎的動きを評価するために試作されたDVDは、基礎的動きを評価したり学習するのにかなり役立つものと推察される。今後、さらに有用なDVDを作成するためには、模範を同年齢にすること、撮影方向や映像の大きさを統一することを中心に、部分観点の評価数、音声、シャッター速度の設定、などについても考慮していく必要がある。

## 3-2 基礎的動きに関する評価観点および学習用DVDの妥当性・有用性の検討

加藤 謙一 (宇都宮大学)

### I はじめに

本プロジェクトでは、子どもの運動習得度の評価について、何m投げられたか、何秒で走れたかなどの量的な観点(記録)ではなく、どのような動きが身に付いているかという質的な観点(できばえ)によって評価するため指標(観点)を作成することを目的の一つとしている。そして、平成18年度において運動習得の評価に関する観点や尺度の作成をした(平成18年度本プロジェクト報告書)。本年度では、そうした観点を保育士や小学校教員などの指導者に子どもの動作を観察・評価してもらい、その妥当性や有効性を検討することを試みた。

### II 研究方法

#### 1. 観察者および観察対象とした基礎的動き

観察者は保育士6名であった。観察者は次の10の基礎的動きについて観察・評価した。すなわち、1) 疾走(幼児30m走:児童50m走)、2) 立ち幅跳び(幼児)、3) よじ登り跳びのり/跳びおり(児童)、4) 前転(幼児・児童)、5) 跳び越しくぐり(幼児・児童)、6) 遠投(幼児・児童)、7) 正確投げ・キャッチボール(児童)、8) プレースキック(幼児)、9) ドリブル(児童)、10) 両足まわり跳び(幼児)。

上記10の基礎的動きについてそれぞれ6名(幼児・児童)が行っている様子をランダムに編集した。

表1に、観察対象となった基礎的動きの評価の観点を示した。観察者は、この評価の観点をもとにチェック用シートに全体印象(A, B, C)および部分観点(○または×)を評価した。各種目の映像は、1名ずつ4回くり返され、観察者には1回目の映像では全体印象について、それ以降は部分観点について観察することを指示した。また、

10の基礎的動きの全体印象および部分観点の評価基準は、本プロジェクト班員が作成した。

#### 2. 観察評価テスト

観察者は、観察評価テストを2回実施した。1回目の観察評価(preテスト)が終了した後、学習用DVDを視聴し約1ヶ月後に2回目の観察評価(postテスト)を実施した。なお、preテストとpostテストで観察するモデルは同一の幼児・児童であるが、postテストではその順序を入れ替えて編集した。

#### 3. 学習用DVDによる評価観点の学習

観察者は、1回目の観察評価(preテスト)した後、学習用DVDを用いて、幼少年期に身につけておくべき基本運動(基礎的動き)としてリストアップされた運動について学習した。学習用DVDには、よい動きのモデル(大学生)が動画として収録されており、その動画には評価の観点が示されている。学習期間は約1ヶ月間で視聴回数は少なくとも1回以上(可能であれば毎週1回学習:3-4回)とした。なお、学習用DVDは次のように動作が編集され、学習できるようになっている。メニュー画面上でそれぞれの動画を再生すると、通常再生(2回)→スロー再生(1回)→通常再生(1-2回)と複数回連続して再生できること、通常再生では評価観点の全体印象の説明文を挿入し、理想的な動作の全体的な印象を確認できることである。また、スロー再生においても、動きの部分についての評価観点の説明文を示し、運動の局面ごとに着目すべき部位と理想的な動作(どこが、どうなっているか)を確認できるようになっている。最後の通常再生では、前述の全体印象と部分についての評価観点を頭に思い浮かべながら、もう一度動作を観察できるようにした。なお、上記の説明文は表1に記載された観察の観点である。

#### 4. 評価結果の分析

観察者のpreテストとpostテストの正答率を

表1 基礎的動きの評価の観点

動作	評価の観点
疾走	<p>全体印象：前方にスムーズに進んでいる</p> <p>①腿がよく上がっている</p> <p>②歩幅が大きい</p> <p>③腕は前後に大きく振られおり、肘は適度に曲がっている</p>
立幅跳	<p>全体印象：両脚で前方へ力強く跳躍している</p> <p>①準備で膝と腰をよく曲げている</p> <p>②腕を後方から前方にタイミング良く振っている</p> <p>③離地時に身体全体を大きく前傾している</p> <p>④両足で着地している</p>
よじ登り跳びのり／ 跳びおり	<p>全体印象：スムーズによじ登る（跳びのり）ことができる</p> <p>よじ登り ①両腕で体を支えることができる</p> <p>跳び乗り ②跳び箱の上に素早くよじ登る（跳びのり）ことができる</p> <p>③跳び箱の上で身体のバランスがとれている</p> <hr/> <p>全体印象：大きな音を立てずに柔らかく着地できる</p> <p>跳びおり ①着地で脚のクッション（腰や膝を曲げる）ことができる</p> <p>②着地で身体のバランスがとれている</p>
前転	<p>全体印象：転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある</p> <p>①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる</p> <p>②背中を丸めたまま転がることできる</p> <p>③起き上がることができる</p>
跳び越しくぐり	<p>全体印象：跳ぶ動きとくぐる動きがすばやく連続している</p> <p>①ゴムを跳び越すことができる</p> <p>②体を低くしてゴムをくぐるることができる</p>
遠投	<p>全体印象：全身を使って、腕をむちのように振って投げている</p> <p>①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている</p> <p>②ステップ脚（投げ腕と反対側）が前に出る</p> <p>③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる</p>
正確投げ／ キャッチボール	<p>投 全体印象：相手の胸あたりにとりやすい球を投げている</p> <hr/> <p>全体印象：ボールの正面に身体を移動させてキャッチしている</p> <p>①準備した腕の肘が曲がっている</p> <p>捕 ②手のひらでボールを受けている</p> <p>③腕を曲げてボールの勢いをコントロールしている</p>
プレースキック	<p>全体印象：助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる</p> <p>①ボールをよく見ている</p> <p>②軸足が力強く踏み込まれている</p> <p>③蹴り脚のバックスウィングが大きい</p> <p>④蹴り脚が勢い良く前方に振られている</p>
ドリブル	<p>全体印象：ボールと身体の移動がスムーズである</p> <p>①同じ高さで安定してボールをついている</p> <p>②身体とボールの関係（距離）が安定している</p> <p>③顔や上体が適度に前を向いている（極度に下を向いていない、ボールばかり見ていない）</p>
両足まわり跳び	<p>全体印象：準備動作から着地までなめらかに行っている</p> <p>①体をまっすぐにして上方に跳び上がっている</p> <p>②バランスを崩さずに着地できる</p>

比較するために、全ての動作の全体印象および部分観点の評価基準と観察者の回答との一致した数を集計し、対応のあるノンパラメトリック検定（ウィルコクソンの符号順位と検定）を行った。統計処理では、有意性の判定基準を5%とした。

### Ⅲ 結果と考察

表2に、10の基礎的動きにおける評価基準と観察者の回答との一致率を示した。preテストは、その一致率が疾走（68.3%）と正確投げ（68.7%）を除き、8動作が70%以上であった。postテストは、ドリブルと両足まわり跳びの2動作がpreテストよりも有意にその一致率が増加した。また、有意ではないが一致率が増加したものは5動作（疾走、前転、跳び越しくぐり、遠投、プレースキック）あり、その値は75.0%–85.8%で高い値を示した。こうした結果は、学習によって一致率が向上する可能性を示唆していると考えられる。

しかしその一方で、学習前後において、正確投げの一致率は68.7%から59.3%に有意に減少したことや、僅かであるが、よじ登り跳びのり／跳びおりの一致率も76.7%から72.4%へ減少した。このことは、全ての動作において良好な一致率が示さなかったこと意味している。

そこで、一致率が大きく向上しなかった理由や学習効果を向上させるにはどのようにしたらよい

かについて以下に考察する。

第1には、学習用DVDの視聴回数が少ないことによる観点の理解不足が考えられる。当初は、学習期間を約1ヶ月の中で1週間に1回で3–4回をめぐりに視聴することを想定（依頼）していた。しかし、観察者が実際に学習した回数は全て1回であった。これは学習期間が年末年始にかかり、視聴する時間的余裕がなかったことが大きな理由として考えられる。また、このような特別な時期でなくても一般に教育現場は通常の業務に追われなかなか余裕をもって視聴する時間がとれないことも推測できる。したがって、その学習内容はできるだけ短く、分かりやすいものを提供する必要がある。すなわち、映像にはアニメーションなどを駆使して動作のタイミングや力の入れ方なども分かるような提示するなどの工夫が必要であろう。

第2には、評価対象となったモデルは同じ動作でも同じ方向から撮影されていないなど統一されていないことであった。また映像も不鮮明であったことも評価の判断を迷わせた一因として考えられる。このことは観察者のテスト後の感想からも理解できる。すなわち「映像が小さくて見づらかったり、ドリブルの映像では、横から見たいことや、遠くて児童の顔の向き、目線がどちらに向いているのかわかりにくかった（複数名）など観察対象の映像が鮮明でなかったこと、さらに両足まわり跳びにおいてもモデルによって角度が違っていたことが指摘された。」このような問題点は、撮影方法を統一すれば解決できると思われる。

第3には、観察力を習得するための時間的な余裕が十分でなかったことも考えられた。今回一致率が下がった動作は、よじ登り跳び乗り／跳びおりと正確投げであった。両者はともに乗ることと降りることや、投げることと受け取ることのように2つの動作を連続的に観察・評価しなければならないが、まだ、観察に慣れていない観察者には、こうした連続した動作を一瞬のうちに評価することが難しかったことが推察される。

加えて、学習によって観察の観点が増えたことも判断を迷わせた一因として考えられる。すなわち、学習以前では観るべき部分が限られていたため、あるいは観られなかったものが、観察の観点

表2 10の基礎的動きにおける評価基準と観察者の回答との一致率

	一致率(%)	
	pre	post
疾走	68.3	75.0
立幅跳	77.3	77.3
よじ登り跳びのり／跳びおり	76.7	72.4
前転	81.7	85.8
跳び越しくぐり	73.3	76.7
遠投	73.3	81.7
正確投げ	68.7	59.3*
プレースキック	74.0	76.7
ドリブル	72.5	82.5*
両足まわり跳び	70.0	81.1*

\* :  $p < 0.05$



を学習したことによってその視点が増え、かえって混乱が生じた可能性があることである。運動観察は瞬時に評価することが求められるが、そうした瞬時の判断ができなかったことが考えられる。動作を評価するには観察の観点を十分に理解することが前提にある。しかしそれだけでは十分ではなく、それをもとに瞬時に行われる運動を評価・判断する目を養うための学習期間が必要になることである。

実際の動作は複数の動きが連続的にしかも一瞬に行われることが多い。したがって、保育士や小学校教諭は、日頃から運動を観察する機会（体育や運動遊びの時間などで意識的に訓練する努力も必要であると考えられる。そのためこうした学習用DVDを利活用する意味があると思われる。

第4には、評価基準の曖昧さが考えられる。評価基準はプロジェクト班員が作成したが、それを決める際にも班員間でもモデルのある動作に対して全体印象ではAとBで意見が分かれたり、部分動作でも○と×で全員による統一した評価が得られたわけではなかった。したがって、観察者においてもプロジェクト班員と同じような迷いや問題を抱えていたことが推察される。こうした問題点は、主観をとまなう観察的評価の限界と考えられるが、今後は可能な限り、動きの本質を抽出して精度の高い観察評価基準を作成することが重要であろう。

#### IV まとめ

基礎的動作を観察するための観点をもとに保育士に実際の子どもの動作（DVD映像）を観察・評価してもらい、その妥当性や有効性を検討することを試みた。その要旨は以下のである。

今回の調査では、学習前にすでに全ての動作で評価基準と観察者の一致率が約7割に達していた。しかし、学習後の一致率は顕著に向上したわけで

はなかった。このことは、動作を評価するための学習の仕方についてさらに検討が必要であることを示唆している。具体的には次の点に注意する必要がある。

1. 動作を評価するための観点をさらに分かりやすくすること
2. 動作を観察するための学習方法（機会や期間など）を具体的に提示すること

最後に、本研究に対してテスト後に得られた観察者の感想や印象や今後さらに効果的なテストおよび学習用DVDを作成するための留意点を付記する。

全ての観察者は、こうした基礎的な動作を映像化して運動指導に役立てようとする試みについて、その意義を理解しており、否定的な意見はなかった。そのため、こうした動きを観察するための映像は、多くの指導者からのニーズがあること（これまで動きの指導に関しては何をどう見て良いのか分からなかったため十分な指導をしてこなかった）が分かった。また、子どもの発達段階に応じた動きの変化などもあればなお良いという意見もあった。以下はテスト用および学習用DVDの問題点の主なものである。

##### 『テスト用DVD』

- ・「○」か「×」かに振り分けられない中間の子がいた場合のチェックの仕方に困った。
- ・評価は3段階であるとよい。
- ・児童用と教師用の評価シートがあるとよい。
- ・観察の観点が多いと（5観点）は見られない（跳びのり／降り）。
- ・動作を観察する適切な方向を統一すること（例えば、ドリブルの映像は横から）、また、モデルの十分観察できる大きさにすること。

##### 『学習用DVD』

- ・評価の判定基準の演技（子ども）が見たい。
- ・子供にも見せるときには発達段階（できるようになる順番）を追って示されるとよい。

### 3-3 動作の評価能力向上を目的とした学習プログラムの効果に関する報告

窪 康之 (奈良産業大学)

#### I. はじめに

本報告書は、日本体育協会スポーツ医・科学研究プロジェクト『幼少年期に身につけておくべき基本運動（基礎的動き）に関する研究』の一環として作成した学習プログラムの効果を報告するものである。学習プログラムは、生活、遊び、スポーツの中でみられる様々な動作についての成熟型を動画として提示し、その特徴を説明することで、保育士や幼稚園・小学校教諭、幼少年を対象としたスポーツ指導者などに動作を評価する観点を学ばせようとするものである。プログラムで用いた学習用DVDには、走る、跳ぶ、投げる、捕る、蹴る、よじ登る、転がるなどを含む35種目の基本動作についての動画と説明が収録されているが、本報告は、このうちの6種目について行った学習の効果に関する調査結果を示す。

#### II. 方法

本調査では、私立みつわ台保育園（千葉市）の保育士6名（TK, KK, HS, TD, KS, NR）に協力を依頼した。保育士らが参加した学習プログラムは、DVDに収められた成人による成熟型の動作を通常速度で2回、スローモーションで1回、再び通常速度で2回、計5回連続再生して観察するものである。はじめの2回の通常速度時には、動作全体の印象を、スローモーション時には、特に注意すべき個別の観点を文字で提示し、必要に応じてストップモーションも用いた。最後の2回の通常速度時には、動作に集中するため文字情報は入れなかった。本調査でとりあげたのは、①20m（幼児）・50m（児童）走、②立幅跳、③前転（2回連続）、④遠投、⑤プレースキック、⑥両足まわり跳びの6種目であった。学習期間は一週間であり、各自にDVDを配布して自宅で観察させた。最低1回の学習機会を確保するため、全員が

参加する観察会を保育園で設けた。

この学習プログラムの効果を検証するため、学習前と後に以下のようなテストを行った。6種目の運動について、成人による成熟型の動作と5名の子ども（幼児、児童を含む）の動作あわせて6つの動画を用意した。はじめに成熟型の動作を観察してよい動作のイメージを確認し、続けて5名の子どもの動作を観察した。映像は1名につき4回繰り返して再生した。それぞれの子どもの動作について、4回の再生中に、本プロジェクトが作成した観点に基づき評価を行わせた。評価観点は結果において詳しく示すが、全体印象1項目（A・B・Cの3段階評価）、個別の動作に関する評価ポイント3～5項目（○・×の2段階評価）というものであった。保育士らには、できるだけ全ての項目について評価するよう指示したが、どうしても判断のつかないものについては、「n」と答えさせた。図1は、調査時の様子を示したものであるが、テストは、6名の保育士全員が同時に映像を観察しながら評価を行った。したがって、できるだけ他人に影響を与えるような言動をしないよう指示した。



図1 調査時の様子

### Ⅲ. 結果と考察

表1～6は、それぞれ20・50m走、立幅跳、前転（2回連続）、遠投、プレースキック、両足まわり跳びについて学習前後に行ったテストの結果を示したものである。試技IDのA～Eは子どもを特定するものであり、それぞれの子どもの動作について右に示す項目の評価を行った。PJは本プロジェクト会議で決定した正答であり、各保育士が学習前後に行った評価を並べて示してある。

図2は、各保育士が5名の子どもの動作を評価する中で「n」と答えた総数を各運動の学習前後で比較したものである。

図3は、各保育士が5名の子どもの動作を評価する中で、PJ、すなわち正答と一致した割合（百分率）を各運動の学習前後で比較したものである。

本報告では、学習効果を検証する観点として、「分からない」という答え、すなわち「n」が減少したか否か、PJの示す正答との一致率、すなわち正答率が向上したか否かについて見ていくことにする。

#### 1) 20・50m走

図2左上段を見ると、学習後で「n」が減った保育士は2名（KS, NR）、増えたのは2名（HS, KK）、変わらなかったのは2名（TD, TK）であった。なお、TKは全動作を通じて「n」が一

度もなかった。表1から、走動作において「n」の増減に強く結びついていたのは、腕振りに関する評価項目③であった。保育士の感想から、「適度に曲がっている」という表現が観察力を向上させた場合と鈍らせた場合を分けたようである。

図3左上段を見ると、学習後に正答率が向上した保育士は4名（KK, KS, NR, TK）、低下したのは1名（HS）、変わらなかったのは1名（TD）であった。表1からは正答率の変化に影響した項目は特定できず、全体として、走の観察に関しては学習効果があったと言えよう。

#### 2) 立幅跳

図2右上段を見ると、学習後で「n」が減った保育士は3名（HS, KS, NR）、増えたのは2名（KK, TD）、変わらなかったのは1名（TK）であった。表2から、跳動作において「n」の増減に強く結びついていたのは、身体全体の前傾に関する評価項目③であった。保育士の感想から、「大きく前傾」の度合いの判断がよくできるようになったものとそうでないものに別れたようである。

図3右上段を見ると、学習後で全員の正答率が向上していた。表2からは正答率の向上に影響した項目は特定できず、全体として、立幅跳の観察に関しては学習効果があったと言えよう。

表1 20・50m走の評価結果

試技ID	評価の観点・尺度	PJ		TK		KK		HS		TD		KS		NR	
		Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
A	全体印象：前方にスムーズに進んでいる。	C	B	B	C	B	C	B	C	C	B	C	C	C	C
	①腿が良く上がっている。	x	x	x	O	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	②歩幅が大きい。	x	x	x	O	x	x	x	n	n	n	x	x	n	n
	③腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている。	x	x	x	x	x	x	x	n	x	x	x	x	x	x
B	全体印象：前方にスムーズに進んでいる。	A	A	A	B	A	A	B	A	A	B	A	A	A	A
	①腿が良く上がっている。	O	O	O	O	n	O	n	n	O	n	O	O	O	O
	②歩幅が大きい。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	③腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている。	O	O	O	O	O	O	x	O	n	O	n	O	O	O
C	全体印象：前方にスムーズに進んでいる。	C	B	B	C	C	C	B	B	B	B	C	B	B	B
	①腿が良く上がっている。	x	O	x	x	x	x	x	x	x	x	x	n	n	n
	②歩幅が大きい。	x	x	x	x	x	x	x	n	x	x	x	n	n	n
	③腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている。	O	x	O	O	n	O	x	O	n	n	x	n	x	x
D	全体印象：前方にスムーズに進んでいる。	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A
	①腿が良く上がっている。	O	x	O	x	O	O	O	O	O	O	O	n	n	n
	②歩幅が大きい。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	③腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
E	全体印象：前方にスムーズに進んでいる。	B	B	B	n	B	C	B	B	B	B	B	B	B	B
	①腿が良く上がっている。	x	x	O	n	n	O	n	n	n	n	n	n	O	O
	②歩幅が大きい。	x	O	O	O	n	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	③腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている。	O	x	x	O	n	x	x	n	n	n	x	n	O	O

表2 立幅跳の評価結果

試技ID	評価の観点・尺度	PJ		TK		KK		HS		TD		KS		NR	
		Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
A	全体印象:両脚で前方へ力強く跳躍している。	C	B	B	C	B	C	B	C	B	C	B	B	B	B
	①準備で膝と腰をよく曲げている。	x	O	O	n	n	x	x	x	n	x	n	n	n	O
	②腕を後方から前方にタイミングよく振っている。	x	x	x	O	n	n	n	x	n	x	x	x	x	x
	③離地時に身体全体を大きく前傾している。	x	O	O	O	x	n	O	O	x	O	O	O	n	n
	④両足で着地している。	O	O	O	B	n	x	x	O	x	n	x	x	x	x
B	全体印象:両脚で前方へ力強く跳躍している。	A	B	A	B	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A
	①準備で膝と腰をよく曲げている。	O	x	O	n	n	n	O	x	O	x	O	O	O	O
	②腕を後方から前方にタイミングよく振っている。	O	x	O	O	O	O	O	O	O	x	O	O	O	O
	③離地時に身体全体を大きく前傾している。	O	O	O	O	O	O	O	n	O	O	O	O	O	O
	④両足で着地している。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
C	全体印象:両脚で前方へ力強く跳躍している。	B	B	A	B	A	B	B	C	B	B	A	B	B	B
	①準備で膝と腰をよく曲げている。	O	O	O	x	O	x	O	x	O	x	O	O	O	O
	②腕を後方から前方にタイミングよく振っている。	x	x	x	x	O	O	x	x	n	O	n	x	x	x
	③離地時に身体全体を大きく前傾している。	O	x	O	O	O	x	n	x	n	n	O	n	O	O
	④両足で着地している。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
D	全体印象:両脚で前方へ力強く跳躍している。	A	B	A	B	B	B	A	B	A	B	B	B	B	B
	①準備で膝と腰をよく曲げている。	O	x	O	O	O	O	O	n	O	x	n	n	n	O
	②腕を後方から前方にタイミングよく振っている。	O	O	O	n	O	O	O	O	O	n	n	O	n	O
	③離地時に身体全体を大きく前傾している。	O	O	O	n	n	n	O	n	n	n	O	O	O	n
	④両足で着地している。	O	O	O	O	O	n	O	n	O	O	O	O	O	O
E	全体印象:両脚で前方へ力強く跳躍している。	C	B	B	C	C	C	B	C	C	C	C	B	C	C
	①準備で膝と腰をよく曲げている。	x	x	O	x	x	n	x	n	O	x	x	x	n	O
	②腕を後方から前方にタイミングよく振っている。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	③離地時に身体全体を大きく前傾している。	x	x	x	x	x	x	n	x	n	x	x	x	x	n
	④両足で着地している。	O	O	O	O	n	O	O	x	n	x	x	O	O	O

表3 前転(2回連続)の評価結果

試技ID	評価の観点・尺度	PJ		TK		KK		HS		TD		KS		NR	
		Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
A	全体印象:転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある。	B	B	B	B	B	C	C	C	B	B	A	B	B	B
	①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる。	O	x	O	O	O	n	x	O	O	O	O	O	n	O
	②背中を丸めたまま転がることができる。	O	O	x	x	n	n	O	O	O	O	O	O	O	O
	③起き上がることができる。	O	O	O	O	O	n	O	n	O	O	O	O	O	n
B	全体印象:転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある。	C	C	B	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
	①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる。	x	x	O	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	②背中を丸めたまま転がることができる。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	③起き上がることができる。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
C	全体印象:転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある。	A	B	A	A	A	A	A	B	A	B	A	A	A	A
	①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	②背中を丸めたまま転がることができる。	O	x	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	③起き上がることができる。	O	O	O	O	O	O	O	n	O	O	O	O	O	O
D	全体印象:転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある。	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
	①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる。	x	x	x	n	x	x	x	n	x	x	x	x	x	x
	②背中を丸めたまま転がることができる。	x	x	x	x	x	x	x	n	x	x	x	x	x	x
	③起き上がることができる。	x	x	x	x	x	x	n	x	n	x	n	x	x	x
E	全体印象:転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある。	B	C	B	B	C	C	B	C	C	C	B	C	B	B
	①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる。	O	x	O	O	n	n	n	n	O	n	O	x	n	O
	②背中を丸めたまま転がることができる。	x	x	x	n	n	x	O	x	x	x	x	x	x	x
	③起き上がることができる。	x	x	x	x	x	n	O	x	x	x	n	x	n	n

表4 遠投の評価結果

試技ID	評価の観点・尺度	PJ		TK		KK		HS		TD		KS		NR	
		Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
A	全体印象: 全身を使って、腕をむちのように振って投げている。	C	B	C	C	C	C	C	C	B	C	C	C	C	C
	①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。	x	x	x	n	O	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	②ステップ脚(投げ腕と反対側)が前に出る。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。	x	O	x	n	x	n	x	n	x	x	x	x	x	x
B	全体印象: 全身を使って、腕をむちのように振って投げている。	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
	①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	②ステップ脚(投げ腕と反対側)が前に出る。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
C	全体印象: 全身を使って、腕をむちのように振って投げている。	B	B	B	A	C	B	B	B	B	B	B	B	B	A
	①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。	x	O	O	x	O	x	x	n	x	n	n	n	n	O
	②ステップ脚(投げ腕と反対側)が前に出る。	O	x	O	n	O	O	O	O	O	x	O	O	O	O
	③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。	O	x	x	n	n	x	x	n	n	n	x	n	x	O
D	全体印象: 全身を使って、腕をむちのように振って投げている。	C	B	B	B	B	C	C	C	B	B	B	B	B	B
	①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。	x	x	x	x	x	x	x	x	n	n	x	n	n	O
	②ステップ脚(投げ腕と反対側)が前に出る。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	n	O	O	O	O
	③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。	x	O	O	x	O	x	x	x	n	O	x	n	n	n
E	全体印象: 全身を使って、腕をむちのように振って投げている。	B	B	B	B	B	B	C	B	C	B	C	B	B	B
	①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。	O	O	x	n	O	n	x	O	O	n	x	O	O	O
	②ステップ脚(投げ腕と反対側)が前に出る。	O	x	x	O	n	O	O	O	x	O	O	O	O	x
	③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。	O	x	O	n	O	n	x	n	n	n	x	n	n	n

表5 プレースキックの評価結果

試技ID	評価の観点・尺度	PJ		TK		KK		HS		TD		KS		NR	
		Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
A	全体印象: 助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢よく飛んでいる。	C	B	B	B	B	C	C	B	B	B	B	B	B	B
	①ボールをよく見ている。	O	O	O	n	n	n	O	n	O	n	O	O	O	x
	②軸足が力強く踏み込まれている。	x	x	x	n	n	x	x	x	n	x	n	n	n	x
	③蹴り脚のバックイングが大きい。	x	x	O	x	x	x	x	x	x	x	x	n	n	x
	④蹴り脚が勢い良く前方に振られている。	x	O	O	O	O	x	x	O	x	n	n	n	n	x
B	全体印象: 助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢よく飛んでいる。	A	B	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A
	①ボールをよく見ている。	O	O	O	O	A	n	O	O	O	O	O	O	O	O
	②軸足が力強く踏み込まれている。	O	x	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	③蹴り脚のバックイングが大きい。	O	O	O	O	O	O	O	n	n	O	O	O	O	O
	④蹴り脚が勢い良く前方に振られている。	O	O	O	O	O	n	x	O	O	O	O	O	O	n
C	全体印象: 助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢よく飛んでいる。	B	B	B	B	B	C	C	C	B	B	A	B	B	B
	①ボールをよく見ている。	O	x	O	O	O	n	O	x	x	O	O	n	x	x
	②軸足が力強く踏み込まれている。	x	x	x	n	n	x	x	x	x	O	n	n	x	x
	③蹴り脚のバックイングが大きい。	x	x	O	x	n	x	x	x	n	x	x	x	x	x
	④蹴り脚が勢い良く前方に振られている。	x	O	x	O	O	O	O	O	O	n	n	n	n	O
D	全体印象: 助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢よく飛んでいる。	A	B	B	B	A	B	A	A	A	A	B	B	B	B
	①ボールをよく見ている。	O	O	O	n	O	n	O	O	O	O	n	O	n	O
	②軸足が力強く踏み込まれている。	O	x	x	n	O	x	O	x	O	O	O	n	x	n
	③蹴り脚のバックイングが大きい。	x	O	O	n	O	x	x	O	O	O	O	x	x	x
	④蹴り脚が勢い良く前方に振られている。	O	x	O	O	O	x	x	n	n	O	x	n	n	x
E	全体印象: 助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢よく飛んでいる。	C	B	B	C	C	C	C	C	C	C	B	B	B	C
	①ボールをよく見ている。	O	O	O	n	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
	②軸足が力強く踏み込まれている。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	③蹴り脚のバックイングが大きい。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	④蹴り脚が勢い良く前方に振られている。	x	O	O	n	n	x	x	O	n	x	x	n	n	O

表6 両足まわり跳びの評価結果

試技ID	評価の観点・尺度	PJ		TK		KK		HS		TD		KS		NR	
		Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
A	全体印象: 準備動作から着地までをなめらかにしている。	B	C	B	B	B	C	C	B	B	C	B	B	B	B
	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。	O	x	x	n	O	n	n	x	n	x	n	n	n	n
	②バランスを崩さず着地できる。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
B	全体印象: 準備動作から着地までをなめらかにしている。	C	B	B	C	C	B	C	B	C	B	C	C	C	C
	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。	x	O	x	x	x	n	x	n	x	n	x	x	x	x
	②バランスを崩さず着地できる。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
C	全体印象: 準備動作から着地までをなめらかにしている。	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	B	A	B	B
	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。	O	O	O	O	n	O	O	O	O	O	O	O	n	n
	②バランスを崩さず着地できる。	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	n	n	O	O
D	全体印象: 準備動作から着地までをなめらかにしている。	B	B	B	B	C	C	C	B	B	B	B	B	B	B
	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。	O	O	O	O	n	O	n	n	n	n	n	n	O	O
	②バランスを崩さず着地できる。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
E	全体印象: 準備動作から着地までをなめらかにしている。	C	C	C	B	C	B	C	C	C	C	C	C	C	C
	①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。	x	x	x	n	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
	②バランスを崩さず着地できる。	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

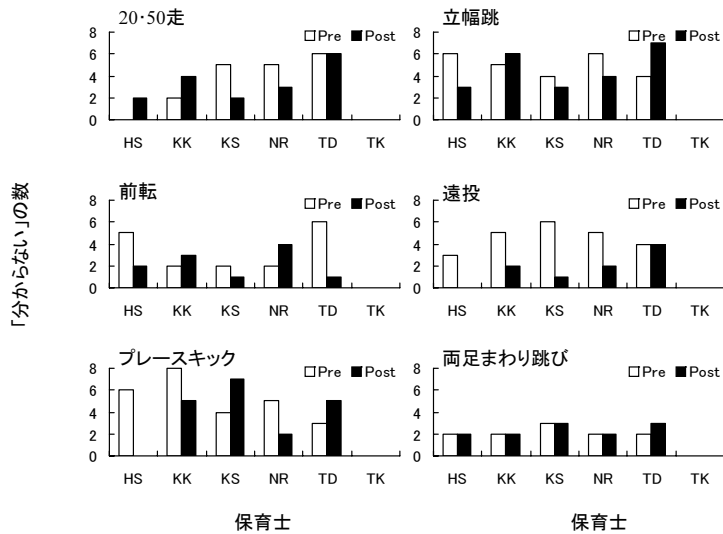


図2 「分からない」と答えた数の変化

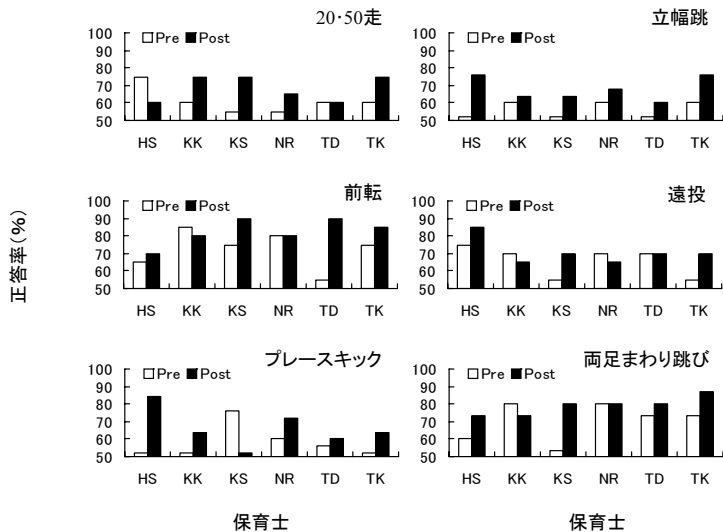


図3 正答率の変化

### 3) 前転 (2回連続)

図2左中段を見ると、学習後で「n」が減った保育士は3名(HS, KS, TD)、増えたのは2名(KK, NR)、変わらなかったのは1名(TK)であった。表3を見ると、「n」の減少に関連していたのは、起きあがれることに関する評価項目③であり、「n」の増加に関連していたものは、両手について頭を入れることに関する評価項目①

であった。

図3左中段を見ると、学習後で正答率が向上した保育士は4名(HS, KS, TD, TK)、低下したのは1名(KK)、変わらなかったのは1名(NR)であった。表3からは正答率の向上に影響した項目は特定できず、全体として、前転の観察に関しては学習効果があったと言えよう。

#### 4) 遠投

図2右中段を見ると、学習後で「n」が減った保育士は4名(HS, KK, KS, NR)、変わらなかったのは2名(TD, TK)であった。「n」は大幅に減少したと言えるが、表4から、準備局面に関する評価項目①と主要局面に関する評価項目③において評価の観点が決まったことが大きいようである。

図3右中段を見ると、学習後で正答率が向上した保育士は3名(HS, KS, TK)、低下したのは2名(KK, NR)、変わらなかったのは1名(TD)であった。表4を見ると、正答率の向上に影響を与えたのは、主要局面に関する評価項目③の正答が増えたことによるようである。

評価項目③については、「リードして」や「肩や腕が遅れて」ということの意味が動画と文字を見ただけではよく分からず、調査者による口頭での説明で理解が増したようであった。動画中に○や矢印などを示して、もう少し着眼点を明確にできるようにしたほうがよいであろう。

#### 5) プレースキック

図2左下段を見ると、学習後で「n」が減った保育士は3名(HS, KK, NR)、増えたのは2名(KS, TD)、変わらなかったのは1名(TK)であった。表5から、「n」の減少に影響を与えたのは、ボールをよく見ることにに関する評価項目①であったようである。

図3左下段を見ると、学習後で正答率が向上したのは5名(HS, KK, NR, TD, TK)、低下したのは1名(KS)であった。表5から、正答率の向上に影響を与えたのは、ボールをよく見ることにに関する評価項目①であったようである。

ボールをよく見ることにに関する評価は、比較的簡単に思えるが、今回の調査対象者にとっては、「n」減少、正答率向上の両方において重要であったと言える。

#### 6) 両足まわり跳び

図2右下段を見ると、学習後で「n」が増えた保育士は1名(TD)、変わらなかったのは5名(HS, KK, KS, NR, TK)であった。他の運動

と比べ、学習前の時点で「n」が少ない傾向にあったため、学習の効果が出にくかったと考えられる。

図3右下段を見ると、学習後で正答率が向上した保育士は4名(HS, KS, TD, TK)、低下したのは1名(KK)、変わらなかったのは1名(NR)であった。表6を見ると、正答率の向上に影響したのは、全体印象と跳び出し姿勢に関する評価項目①の正答率であったと考えられる。

## IV. まとめ

本報告では、「分からない」という答えの減少と正答率の向上という観点から、学習プログラムの効果を検証してきた。以下にそのまとめと今後のプロジェクトに対するコメントを示す。

- 1) 「分からない」は全体として減少する傾向にあり、学習により保育士らに評価観点をよく理解してもらえたと考えられる。しかし、「適度に」や「大きく」などの言葉を含む一部の評価観点では、観点を提示されたことで逆に迷いを生じさせるケースもあった。これらの評価観点の文言には、推敲の余地があらう。また、「肩がリードして」は、「肩が先に出て」と表現し直した方が理解を深められたようである。
- 2) 正答率は全体として向上する傾向にあり、保育士らの評価能力は学習により向上したと考えられる。上記の「分からない」項目が減り、評価観点が明確な項目が増えなければ、正答率は向上しないので、評価観点の文言をわかりやすくできるかどうか、評価能力を向上させる鍵と言えそうである。

今回は、6名の保育士が同時に映像を見て評価したため、逐一内省報告をさせることができなかった。したがって、どのような言葉が混乱を生むのか、判断に迷うのかを掘り下げることが困難であった。今後の課題として、評価者の感想を吸い上げながら、評価観点の文言に微調整をくわえる必要があるかもしれない。

## 3-4 映像を用いた基礎的動きの評価の妥当性 - 全体印象と部分的着目点での評価

佐々木 玲子 (慶應義塾大学)

### 1. はじめに

本研究プロジェクトではこれまでに、幼少期に身につけるべき基礎的動きの質的評価法を提示するため、対象とする基礎的動きとその評価観点、およびそれらの動きの習得度の実態調査を行ってきた。次段階として、実際の子どもたちの動作の評価およびその改善のために、指導現場での有効な活用が求められる。本調査では、提案した評価観点をを用いて実際に現場の指導者が判定をし、それらの観点に基づいてどのように評価が可能であるかを確認した。本報告では、その結果から、評価の観点、評価語などの妥当性について検討を行った。

### 2. 方 法

**対象：**

同一園の保育士19名を対象とした。

**評価映像：**

本プロジェクトにて作成した「評価観点テスト用DVD プレテスト用」の映像を評価した。収録された評価の映像10種目は、提示順に「全力走」、「立ち幅跳び」、「よじのぼり・おり」、「前転」、「跳び越しくぐり」、「遠投」、「正確投げ」、「ブレスキック」、「ドリブル」、「両足まわりとび」であった。映像はそれぞれの種目について、「よい」動き、「未熟な」動きを混在させた各5例の子どもの動きを収録したものである。

**調査手順：**

DVDに収録されている順に、各種目とも1つの事例について続けて4回くり返して映像が提示された。対象者には、各事例において1回目の映像では全体印象について、それ以降は部分観点について観察するよう指示が与えられた。全体印象の着眼点については言語化された一文で示されている。部分観点とは、本プロジェクトで設定した、動きを観察する際の着目点であり、種目ごとに2

つから4つの観点が言語化して設定されており、全体印象と共に評価に用いる表に記載されている。

全体印象はA, B, Cで、部分観点については○×を、配付された評価表に記入して、それぞれの動きを評価した。

調査の実施は遊戯室内において、スクリーンに映写された映像を対象者全員が同時に見て一斉に行った。

**分析：**

各種目について、あらかじめ本プロジェクト班において検討し決定された各観点における評価(A, B, Cおよび○, ×)に対して、本調査で行った評価との一致度(一致しているか否か、いわゆる正答率)を、すべての項目について出し集計した。本報告では便宜的に、前者を基準評価、後者を回答評価とする。

本報告では、種目による一致度の差異ならびに評価の観点による一致度の差異から、その特徴と評価アイテムとしての妥当性について検討した。

### 3. 結果と考察

基準評価と回答評価が一致したものの占める割合を一致度として、評価の観点を「全体印象」と「部分観点」に分け、種目ごとに示したのが図1である。ただし、「よじのぼり・おり」と「正確投げ」については、それぞれ、「のぼり」と「おり」、「投げ」と「捕る」を別に扱った。図1では、全体印象の一致度の高い種目から順に並べた。

#### 1) 種目による一致度の違い

全体印象では、「前転」の一致度が最も高く(82.1%)、「全力走」が最も低かった(51.6%)。部分観点では、前転の一致度が最も高く(91.2%)、よじのぼりおり(おり)が最も低かった(63.7%)。種目別にみると、以下のようになる。

- 全力走では全体印象の一致度が最も低かった。全体を見る場合の観点が「前方にスムーズに進んでいる」というものであるが、表現としてと



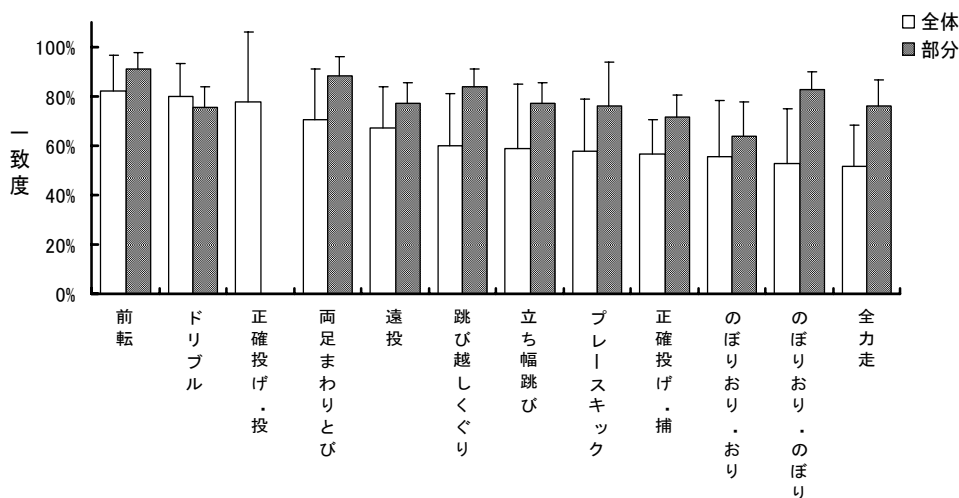


図1 各種目における基準評価との一致度（全体印象と部分観点別）

らえにくい、あるいは評価しにくいものである可能性が示唆された。また、現場ではなくビデオ映像であることが走っている動きのとらえにくさにつながっているということも考えられる。さらに基準評価が低いものほど（評価BやC）回答の一致度が低く、未熟な動きほど印象の評価が難しくなると考えられる。

- 立ち幅跳びでは、「両脚で前方へ力強く跳躍している」という全体印象での、特に未熟な事例（基準評価はC）における回答の一致度が低かった。
- よじのぼり・おりでは、のぼり・おりを分けて見た。のぼりでは、全体印象「スムーズによじのぼることができる」に対する回答の一致度が低いのに対し、部分観点では逆に一致度が高かった。スムーズによじのぼる、という表現がわかりにくかったか可能性が考えられる。おりるでは、全体も部分も全般に一致度は低かった。特におりる時の膝の使い方や「やわらかく」といった表現に対する解釈にばらつきがあるものと思われる。
- 前転では、全体印象、部分観点ともに一致度が高かった。部分観点については、「両手をついてあごを引き、頭を入れることができる」「背中を丸めたまま転がることができる」「起き上がることができる」といった前転動作実施にあ

たって留意する点や判断が容易なものが挙げられており、一致度は最も高かった。

- 跳び越しくぐりでは、全般に中位の一致度であったが、未熟な事例に対しての全体印象「跳ぶ動きとくぐる動きがすばやく連続していた」での一致度が低く、「すばやく連続」に対する評価がばらついた結果と考えられる。
- 遠投では、全体印象、部分観点とも比較的一致度が高く、両者の差異も小さかった。遠投のように上手投げで思い切り投げる動作の良し悪しは、全体の動きの印象やどのようなところに関心をつけるかが明確な動きではないかと思われる。
- 正確投げは、よじのぼり・おりと同様に、投・打を分けて見た。「投」の一度は高いが、全体印象の観点は「相手の胸あたりに捕りやすい球を投げている」というものであり、これは対象児の動作というよりは、行った投動作の結果を判断してしまうことになる可能性が考えられる。たとえば「相手の胸のあたりに向けて、あるいは向かって…」など、当該児が的に向かって正確に投げる動作を示す表現を加えた方よいのではないかと思われる。一方で、「捕」での一致度は高くなかった。
- ブレースキックでは、部分観点での一致度が全体印象に比べて高かった。
- ドリブルでは、全体印象、部分観点とも一致度

は高く、特に他の種目と異なり、全体印象のほうがやや高かった。

- ・両足まわりとびでは、全体印象、部分観点とも一致度は比較的高く、特に部分観点の「体をまっすぐにして上方へ跳び上がっている」「バランスを崩さず着地できる」というのは比較的明確に判定できるものと思われる。

これらのことから、種目によって、動きとして正確な評価がしやすいものと、評価し難いものがあると思われる。また、全体印象よりも部分に着目した方が動きの良し悪しを判断、評価しやすい傾向にあることが伺われた。

## 2) 観点による評価の違い

今回の調査では、対象者が評価したものが、基準となる評価とどれだけ一致しているかをみた。その一致度について、ある観点に基づいて動き全体を評価する「全体印象」と、動きの中で重要と思われるいくつかの部分それぞれに着目してその点の良し悪しを評価する「部分観点」とに分けてみると、全体印象での一致度の方が部分観点での一致度よりも全般に低い傾向にあった。このことは、動き全体を見た場合には即座に的確な評価を下しきれない場合でも、個別の部分に眼をつけるとその良し悪しがわかるという場合があることを示すと考えられる。ただ、「全体」、「部分」のどちらにしても、どのような観点、どのようなところに眼をつけるかが示されることで、動きを評価するための目安になることは確かだといえよう。

また、動作によって「全体」と「部分」の評価で基準との一致度が小さいものと大きいものがあった。「前転」、「ドリブル」、「遠投」、「とびおり」では両者の差は小さく、「よじのぼり」、「全力走」ではそれが大きかった。たとえば「遠投」では、それぞれの評価の観点あるいは尺度とされる事柄が「全身を使って、腕をむちのように振って投げている」(全体)と「上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている」「ステップ脚が前に出る」「肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる」

(以上、部分)などのように、評価の次元が似ている、あるいは部分の観点を総合すると全体の動きに結びつく、といった動作は比較的差が小さいものと考えられる。一方、「全力走」では、「前方にスムーズに進んでいる」(全体)と「腿が良く上がっている」「歩幅が大きい」「腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている」(以上、部分)のように、全体印象では動きのスピード感や滑らかさなどの、空間的、時間的双方が同時に含まれた要素から判断され、部分では動いている中から一瞬を切り出した空間的要素から判断されるものという違いがある。観点の評価の質(どの感覚を必要とするか、など)が異なると、両者の隔たりは大きくなる可能性があるのではないかと考えられる。

## 4. まとめ

以上のことから、動きを評価する際、動きやその運動様式によっては全体的にはとらえにくいものでも、動きをみる観点、眼のつけどころの提示があると評価をしやすくなる、あるいは正しく評価ができるという可能性が示唆された。これは動作を適切に評価するための有効な方法のひとつといえるのではないかと考えられる。特に、経験の浅い指導者などにとっては、その動きのポイントとなるいくつかの観点、眼のつけどころを知ることが、子どもの動きを評価し改善していくためにも意味のあることだと思われる。

一方で、本調査結果からは、必ずしも分解した要素の組み合わせが全体の動きになるわけではないことも示されており、要素としての部分に眼をつけながら、全体の動きを観察すること、その両者の重要性を示唆しているのとらえられるのであろう。

さらに、全体、部分ともに、表現を含め、観点や尺度として示されたものについても、より適切なものになるよう検討を加えることも必要であろう。

## 3-5 動きの観察能力と質的評価

佐藤 徹（北海道教育大学岩見沢校）

### I. 動きの質の評価について

#### 1. 評価に質的視点を取り入れる意義

これまで広く行われてきた体力測定、運動能力テストなどは、達成した回数、距離、重量、速度などの測定値に応じた量的評価が行われてきた。その客観的データは、地域的、経年的、世代的な比較を可能とし、わが国の国民、とくに子どもの運動能力、体力の変化の把握にとってきわめて有用な示唆を与えてきた。

そのような運動評価事情のなかで、今回のプロジェクト研究において、動きを質的視点から評価する方法が取り入れられた意義を確認することが重要である。

動きの質的評価のもっとも有用な点は、評価内容の運動指導への還元性にある。つまり、「腕の振りが小さい」などと具体的な動きとして評価するので、それはそのまま指導につながる。これに対して、「スピードが遅い」という測定データは、スピードを上げるためにどうすべきかという情報は与えてくれない。

以上の点を考慮すれば、質的視点からの評価内容は、その結果ができるだけその後の指導に適用できるものとする必要がある。別の見方をすれば、他との比較手段としての適合性に拘泥すべきではない。比較が主目的になれば、評価結果の客観性が保証されなければならないのは当然である。客観性を堅持するためには、客観的に把握できる内容のみがその対象とならざるをえない。

#### 2. 評価の対象（運動質とは何か）

端的に言えば、動きの質を評価することは、よい動きか悪い動きかを見分けることである。

ボールを遠くまで投げる子は、少ししか投げることができない子よりも、よい投げ方をしていることが多い。というより、ほとんどがそうであろう。そのため、回数や距離、スピードなどの測定

値から動きの質も判定できるという意見もあながち間違いというわけではない。

しかし、「よい動き（＝質の高い動き）」は絶対的なものとして即目的に存在しているわけではない。マリナーズのイチローとヤンkeesの松井選手の動きの優劣を尋ねられて、即座に答えられる専門家はいないであろう。人間の動きの良し悪しは、目的や場の状況、選手の体力など多様な要因から成り立っているのであって、よい動きそのものなどはないからである。

子どもの基礎的な動きであっても、年齢や発達段階、体格の違いなどを考慮に入れないわけにはいかない。むしろ、われわれは無意識のうちにそれらを斟酌しながら動きを見ている（評価している）。「子どもにしてはいい走り」だとか「大学生にもなっておかしな走り方」だというように、幼稚園児と大学生の走運動を同じ尺度で観察することはありえない。

### 3. 質的モデルとしての運動類型

前記の「子どもにしては良い走り方」だという評価が成立するためには、“子どもらしい走り方”のイメージが評価者のなかに存在していることが必要である。この場合、子どもの走る姿がすべて“子どもらしい走り方”であるのではない。大人の走りとは異なる走運動のイメージが暗黙のうちに形成されているからこそ、それと異なる場合には違和感をもつのである。このような“～らしい”動きのイメージは「運動類型 (Typus, type)」と呼ばれる。

運動類型は、機械的・物理的尺度から固定的に分類されるのではなく、場の状況や実施者の諸特性、社会規範や時代様式などさまざまな価値観にもとづいて人々の間の理解によって形成されるものである。たとえば熟練者と非熟練者を一義的に区別する基準などありえない。つまり、類型を区別する明確な基準を設けることはできず、もっと

も極端な例、いわゆる極性 (Polarität) からのみ言及することができる。

運動の類型学は、動きの質の評価に関しても非常に重要な意義を持っている。"ぎこちない動き" そのものがあるわけではない。"スムーズな動き" との対比からのみとえられる特性である。しかも、"ぎこちない" から "スムーズ" の間には程度の違いが無段階に連続的に存在する。

したがって、ひとつ、あるいはいくつかの事例を見るだけで動きの質を評価できるようにはならない。すでに指導や観察の経験が豊かで評価力のある指導者というのは、無意識のうちにこれらの多様な動きの違いの連続性を把握しているのである。

多様な現象を呈する運動経過の質を典型的に把握する能力を意図的に得ようとする場合には、質的特徴がよく現れている事例を観察することが有効である。このことに関して、さまざまな人間の動作を類型学的視点から考察したオランダのボイテンディクは次のように述べている。「発見しようとしている特徴的なものが多い現象の中に十分はっきりと現れるとは限らない。…だから本質的なものが何よりも著明に直観できるような例を求めねばならない。」(『女性』みすず書房、p.234)

本質的なものが著明に直観できるような例は「典型 (例)」である。典型の認識の上で、現実の多様な運動現象を観察していく経験を通して類型的把握の能力が形成されていくのである。

#### 4. 動きの時間性と全体性

あたりまえのことだが、運動とは動いていることである。運動は、音楽メロディと同じように、時間とともに経過してはじめて成立することから時間ゲシュタルトといわれる。それゆえ、静止させてしまった (時間を止めた) ものはもはや運動ではない

さらに、人間の動作は全身が機能的に作用しあっている。そのため、動きの質を評価するときに、部分的に、たとえば腕の振りや膝の動きだけを取り出して評価対象とすると、動きの本質的特徴を見失う可能性がある。

たとえば、遠投の際に投げる腕と同じ方の足を

前に踏み出していると、一般にはまだ未熟だと判断される。しかし、そのような足の出し方をしても、上半身、とくに腕の使い方や手首のスナップがうまく行われ、投げる距離も大きいという場合もある。ステップ足だけで投動作が未熟かどうか評価することは危険である。しかし現実には、誰にでもすぐに確認できるステップ足から、投動作の発達を評価してしまうことが少なくない。

重要なことは、動きを全体として見るということである。全身という意味だけでなく、運動そのものを全体的に見るということである。スローモーションやスチル画像は、確かに細かな動きを見る手助けにはなるが、静止した身体姿勢の評価の寄せ集めが必ずしも動きの全体的経過の評価として適切であるとは限らない。実際に評価活動を行ってみると、個々の部分的評価は悪くないのに、ノーマルスピードでの運動経過は何かぎこちない、あるいはタイミングがおかしいといった印象を持つことが珍しくない。この違和感のような印象は、動きの全体印象であって、スチル画像のように止めてしまえばこの特性は把握できなくなる。

#### 5. 訓練対象としての運動観察能力

測定値で判定できるものであれば、評価のために特別な訓練は必要ない。しかし、一瞬ごとに消え去ってしまう時間ゲシュタルトである運動経過のなかに固有の特性を見いだすのは、ある程度の運動観察訓練を必要とする。評価に質的観点を取り入れるということは、必然的に評価者の運動観察能力を前提とするということである。

幼稚園や小学校の教師にとって、専門的なスポーツ技術の良し悪しを見分ける能力は必要ではないが、子どもの基礎的運動技能の大まかな達成度は識別できるだけの観察訓練は必要である。子どもの歌を聴いて、音程が適正なのか間違っているのか判別できない教師であっては音楽教育はできない。運動教育に関しても同様に、教師の観察力に関して一定の基本訓練は不可欠であろう。

## Ⅱ. 運動観察・評価テストの結果

### 1. テストの方法

①被験者：北海道教育大学岩見沢校スポーツ教育課程の2年次学生5名（a～e）

②期日：

1回目テスト：平成19年12月14日（テスト用ビデオ使用）

2回目テスト：平成20年1月18日（1回目と試技者の順序を入れ替えたビデオ）

\*途中で観察練習用ビデオでの学習を1回行った。

③結果

表中のA～Eは観察対象者（試技者）、a～eはテスト受験者である。a1は1回目のテスト結果、a2は2回目である。

		観察対象者	評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2
走運動	A	全体	C	A C	B C	C C	B C	B C	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
		①	×	○ ×	× ×	○ ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
		②	×	○ ×	○ ×	○ ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
		③	×	B ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
	B	全体	A	A B	A B	B B	B B	B A	A A	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		①	○	○ ×	× ×	× ×	× ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		②	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		③	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	C	全体	C	C B	B B	C B	C B	B B	B B	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
		①	×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
		②	×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
		③	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	D	全体	A	A A	A A	A A	A A	A A	A A	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		①	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		②	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
③		○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	
E	全体	B	C A	B A	C B	B B	B B	B B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	
	①	×	× ○	○ ○	○ ○	○ ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	
	②	×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	
	③	○	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	

全体印象：前方にスムーズに進んでいる。  
 ①腿が良く上がっている。  
 ②歩幅が大きい。  
 ③腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている。

		観察対象者	評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2
立幅跳	A	全体	C	B B	B B	B C	C B	B B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	
		①	×	○ ○	× ○	○ ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	
		②	×	× ×	○ ×	○ ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	
		③	×	○ ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	
		④	○	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	
	B	全体	A	A A	A A	A A	A A	A A	A A	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		①	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		②	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		③	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		④	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	C	全体	B	B B	B C	B B	B B	B B	B B	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
		①	○	○ ○	× ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		②	×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
		③	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		④	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	D	全体	A	A A	A A	A A	A A	A B	A A	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		①	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	× ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		②	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
		③	○	○ ×	○ ○	○ ○	× ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×
		④	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
E	全体	C	C B	C B	C C	C C	C B	C B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	
	①	×	× ○	○ ○	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ○	
	②	×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	
	③	×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	
	④	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	

全体印象：両脚で前方へ力強く跳躍している。  
 ①準備で膝と腰をよく曲げている。  
 ②腕を後方から前方にタイミングよく振っている。  
 ③離地時に身体全体を大きく前傾している。  
 ④両足で着地している。

		観察対象者	評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2	
よじ登り下り	A	登り	全体	A	A	B	A	B	C	C	A	A	A	A	
			①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			②	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○
		③	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		下り	全体	A	B	A	B	A	C	C	B	B	C	B	
			①	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	
	②		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×		
	B	登り	全体	C	C	C	C	C	C	C	C	B	C	B	C
			①	×	○	○	×	×	○	○	×	×	○	×	
			②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		③	×	×	○	×	×	○	○	○	×	×	×		
		下り	全体	B	B	B	C	B	C	B	B	B	A	A	
			①	○	○	○	×	○	○	○	×	×	○	○	
	②		○	×	○	×	×	×	○	○	○	○	○		
	C	登り	全体	A	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	
			①	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	
			②	○	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	
		③	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
		下り	全体	A	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	
			①	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	
	②		○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○		
	D	登り	全体	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	B	A
			①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			②	×	○	○	×	×	×	○	×	○	×	○	
③		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
下り		全体	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A		
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
E	登り	全体	C	B	A	B	A	C	A	B	A	B	A		
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
		②	×	○	○	×	○	×	○	×	○	×	○		
	③	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	下り	全体	A	B	A	B	A	C	A	B	A	B	A		
		①	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○		
②		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			

全体印象：スムーズによじ登る（跳び乗る）ことができる

①両腕で体を支えることができる。

②跳び箱の上に素早くよじ登る（跳び乗る）ことができる。

③跳び箱の上で身体のバランスがとれている。

全体印象：大きな音をたてずに柔らかく着地できる。

①着地で足のクッション（腰や膝を曲げる）を使うことができる。

②着地で身体のバランスがとれている。

		観察対象者	評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2
跳び越しくぐり	A	全体	B	B	B	A	A	B	B	B	B	B	A	A
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	B	全体	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	C	全体	B	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	○	×	B	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	D	全体	B	C	B	B	B	C	C	C	C	B	A	A
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
	E	全体	C	B	A	B	B	B	C	A	B	B	B	B
		①	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

全体印象：跳ぶ動きとくぐる動きがすばやく連続している。

①ゴムを跳び越すことができる。

②体を低くしてゴムをくぐることができる。

観察対象者		評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2	
前転	A	全体	B	B	B	B	B	B	B	B	C	B	A	
		①	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○	○	
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		③	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	
	B	全体	C	C	B	C	C	C	C	C	C	C	C	C
		①	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		③	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	C	全体	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		③	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
	D	全体	C	C	C	C	C	C	C	C	B	C	C	C
		①	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×
		②	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×
③		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
E	全体	B	B	B	B	C	B	B	C	B	C	C	C	
	①	○	○	○	○	×	×	○	×	○	×	○	×	
	②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	③	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	

全体印象：転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある。  
 ①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる。  
 ②背中を丸めたまま転がることできる。  
 ③起き上がることができる。

観察対象者		評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2	
遠投	A	全体	C	C	C	C	C	C	C	B	C	C	C	
		①	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		②	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	
		③	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	
	B	全体	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		③	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	C	全体	B	C	B	B	A	C	B	B	B	B	B	B
		①	×	×	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		③	○	×	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○
	D	全体	C	C	B	B	B	C	C	B	B	B	B	B
		①	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③		×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	
E	全体	B	B	B	C	B	B	C	B	B	B	B	B	
	①	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○	
	②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	③	○	○	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	

全体印象：全身を使って、腕をむちのように振って投げている。  
 ①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。  
 ②ステップ脚（投げ腕と反対側）が前に出る。  
 ③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。



		観察対象者	評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2	
正確投 げ	A	投	全体	B	B	B	A	A	C	C	B	B	C	B	
			全体	B	B	B	C	B	B	B	B	B	B	B	B
		捕	①	○	○	×	○	○	×	○	×	×	×	○	○
			②	○	○	○	×	×	○	×	○	×	○	○	×
	③		×	○	×	×	○	×	○	×	○	×	×	×	×
	B	投	全体	A	B	A	A	A	A	A	A	B	A	B	B
			全体	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	B	A
		捕	①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	③		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	
	C	投	全体	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
			全体	C	C	B	C	B	A	B	C	C	C	C	C
		捕	①	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	×
			②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
	③		×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	
	D	投	全体	B	A	A	A	A	A	A	A	A	B	B	C
			全体	C	B	B	B	B	B	B	C	B	B	B	B
		捕	①	×	×	×	○	○	×	○	×	○	×	○	×
			②	×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	×	○
	③		×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	
E	投	全体	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	
		全体	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	
	捕	①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
③		○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○		

---投--- 全体印象：相手の胸のあたりに捕りやすい球を投げている。  
 全体印象：ボールの正面に身体を移動させてキャッチしている。  
 捕Ⅱのみ ①準備した腕の肘が曲がっている。  
 ②手のひらでボールを受けている。  
 ③腕を曲げてボールの勢いをコントロールしている。

		観察対象者	評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2	
プレー スキッ ク	A	全体	C	C	B	B	C	C	B	B	B	B	B	B	
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		②	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○
		③	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	B	全体	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
		③	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	C	全体	B	B	B	B	B	B	B	B	B	C	B	B	B
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
		②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		③	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
	D	全体	A	A	A	B	B	A	A	A	A	B	B	A	A
		①	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○
		②	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	○	○
		③	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○	○
	E	全体	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
		①	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		③	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
④	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○	×	×	×		

全体印象：助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる。  
 ①ボールをよく見ている。  
 ②軸足が力強く踏み込まれている。  
 ③蹴り脚のバックスイングが大きい。  
 ④蹴り脚が勢いよく前方に振られている。

		観察対象者	評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2	
ドリブル	A	全体	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		③	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	B	全体	B	B	A	C	A	B	B	B	A	B	A	C	C
		①	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×
		②	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×
		③	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×
	C	全体	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		②	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		③	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	D	全体	C	C	B	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
		①	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
③		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
E	全体	B	B	B	B	B	C	B	B	B	B	B	B	A	
	①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	②	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○	
	③	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	

全体印象：ボールと身体の移動がスムーズである。

①同じ高さで安定してボールをついている。

②身体とボールの関係（距離）が安定している。

③顔や上体が適度に前を向いている（極度に下をむいていない、ボールばかり見ていない）。

		観察対象者	評価対象	模範解答	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2	
両足回り跳び	A	全体	B	B	B	C	B	B	C	B	B	B	C	B	
		①	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○
		②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	B	全体	C	A	B	B	B	A	A	B	B	B	B	C	C
		①	×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×
	C	全体	A	A	B	A	B	B	B	A	A	A	A	B	A
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	D	全体	B	B	B	B	B	B	C	B	B	B	B	B	C
		①	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	E	全体	C	C	B	C	C	C	C	B	B	B	B	C	C
		①	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		②	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

全体印象：準備動作から着地までをなめらかに行っている。

①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。

②バランスを崩さず着地できる。

## ⑤まとめ

被験者は、長年にわたって日常的にスポーツ活動に関わっている者（大学生）ばかりであったため、模範解答と比べてかなり類似した評価をしている傾向にあった。しかし、幼児の動きを注意深く観察したことはあまりなかったため、どの程度の動きが幼児にとって標準的なのかとまどっていた例も少なくなかった。

1回目のテスト（a1～e1）では、予備的観察もなく、最初から評価テストを行ったため、幼児や小学生の技能レベルの標準が分からず、評価も模範解答と比べて大きく異なっていた例も少なくない。評価対象にはどのような観察対象者（試技者）がいて、どの程度の動きを行うのか、テスト前にビデオ全体を一通り見ておくことが必要であろう。

2回目のテストでは（a2～e2）、その前に模範解答と評価練習ビデオを見たため、かなり整合性のとれた結果となっている。とくに、非常に技能が高いA評価の者や、逆にC評価の非常に劣っている者に関してはほとんどの被験者が同様の評価を与えていた。

したがって、上手な（運動技能が発達した）動きと未熟な動きの判別はそれほど難しい課題ではないと思われる。問題は、技能的に劣っている動きには具体的にどんな欠点が内在しているのかを見極める能力である。そのために今回のような評価基準が必要となるのであり、今後、よりの確な基準を探っていく努力が求められる。

なお、この結果において、模範解答と被験者の回答を照合して、その違いを数量的に比較してもあまり意味はない。同じ評価結果であっても、それぞれの被験者のとらえ方は同一ではないからである。

### －評価に関する問題点の事例－

以下に示すのは、今回の調査を通して、評価に関して問題となった事例である。これらの事例以外においても類似の問題はあると思われ、安直に点数化（数値化）することのないように留意すべ

きであろう。

#### “すばやく”という評価：

単にスピードだけを対象とするのでは不十分である。「よじ昇り」や「跳び越しくぐり」の運動では、動きにどのようなつながりがあるかを評価すべきである。例えば、よじ昇りでは、ジャンプと腕の支えの協働、さらにそれらと脚の引きつけ動作が局面融合をしているかどうかなどが観察対象となる。跳び越しくぐりでは、ジャンプ後の着地の際に、くぐる動作が先取りされ、顔や身体の向きや着地の仕方にどのような先取り動作が現れているかを見る。

#### プレースキック：

「ボールをよく見ている」という評価観点では、目（顔）の向きばかりにとらわれやすい。動きが非常に遅く未熟な子の場合、目はボールに釘付けになっている。一方、足に当てることに不安のない（空振りの心配などない）子は、それほどボールばかり凝視することはない。どちらが発達度が高いかは明らかだが、部分的評価では逆の結果になってしまう。

#### 正確投げ：

何度か同じ動作をするテスト項目では、うまくいくときもあれば失敗することもある。たまたまいい場所へ投げることが数回あればよい評価とせざるを得ない。そのため、今回のテストでも結果に大きな差が出た種目のひとつである。

まぐれでうまくできたのかそうでないのかは見慣れた者ならずぐ判別できる。動きの質を評価するのであれば、「いい場所へ投げることができたかどうか」ではなく、「いい場所へ投げることができる投げ方をしているかどうか」を見るべきである。

#### 両足回り跳び：

360度ひねろうとした子は着地姿勢が崩れている例が多い。一方、身体軸がまっすぐで着地も安定しているが3/4回転しかしていない子もいる。どちらが質的に高いのか評価は難しい。課題の出方を検討すべきであろう。

### 3-6 基本的運動の質的評価における学習効果について -保育系学生を対象として-

野中壽子(名古屋市立大学)

#### [1] はじめに

本調査は、幼少期に獲得すべき基本的運動の習熟度を質的に評価する基準を策定することを目的としている。保育所・幼稚園、および小学校で指導に携わる保育士、教諭が子どもの動きのおかしさに気付くことが非常に重要であることは、これまで検討を重ねてきた中で改めて確認されたが、それには現場の先生方が子どもの動きを正しく評価することが必要となってくる。そこで、本年度は、これまでに蓄積された3歳の幼児から小学校4年生の児童までを対象とした基本的運動の調査を元に、各動作の発達段階別の典型例のDVDを作成し、このDVDによる評価のテストを実施した。さらに別のDVDに収録された模範試行を定期的に視聴してもらい、評価能力の学習効果について検討し、本格的な評価実施に向けての問題点を抽出することを目的とした。

#### [2] 調査の概要

**対象：**保育士資格取得コースの大学4年生3名  
**方法：**Pre-testとして10種目の基本的運動習熟度の評価テストを行なった後、評価学習用DVDを10日間、毎日見るよう要請した。今回は、模範試行をDVDで見ることによる学習効果の検討であるため、個々の種目について評価観点の詳しい解説は行なわなかった。この後、Post-testを行ない、テスト後に今回の調査全般についてインタビュー形式の質問調査を行なった。Pre-testとPost-testに用いられた映像は、各種目、幼児から小学生を通して5例ずつピックアップし、種目によって発達段階はランダムになるように配置した。また、Pre-testとPost-testで取り上げた例は同一のものであるが、配列は異なるようにした。

#### [3] Pre-Postによる学習効果

各種目とも、全体印象の評価A, B, Cをそれぞれ3, 2, 1点と得点化し、部分要素の評価はできている(○)を1点とした。基準評価との差を学習前(Pre)と学習後(Post)で比較したのが(表)である。負の値は、被験者の評価点が基準点より高かったことを示している。

一般的に、本調査の評価の被験者らは幼児の全体印象による評価を高く見積る傾向がみられた。これは、実習等を通じて幼児と接する機会が多いため、「幼児の中でこれくらいできれば上手い方ではないか」と考え、幼児から小学生までを通しての発達段階を踏まえての評価が難しかったのではないかと推察される。これらの被験者は学生とはいえ、いわば保育士・幼稚園教諭予備軍であり、実際の保育現場でも同様の傾向がみられると推察できる。すなわち、幼児の中だけでの動きの評価では「この動きは最終的にはこのようにできるようになる」という完成型のイメージが持ちにくいと考えられる。このことから、保育・幼児教育に携わる専門家は、小学校4年生ではこのくらいの動きができてることが望ましい、というように、子ども期を通じた発達課題を把握していることが重要であると考えられる。

しかし一方で、基準評価の全体印象がAで、要素の評価もすべて○の「上手な」例、反対に全体印象がCで要素はすべて×の「未熟な」例についてのエラーは少なく、「良い動き」「未熟な動き」は保育現場の先生方でも評価できるものと考えられる。

個々の種目についての結果は次の通りである。

##### 1) 20m、50m走

男子児童の例で、腿は上がっていない、歩幅も狭い、と評価しているのに、「前方にスムーズに進んでいる」という全体印象は、全員Bをつけていた。これは、低年齢児で走動作が未熟

な場合、途中で減速して走速度が一定ではなかったり、場合によっては途中で止まる例などもみられるため、それと比較するとスムーズに進んでいるという評価になったと考えられる。幼児と小学3、4年生では習熟度にかなり差があり、幼児を見慣れている群ではPost-testでもスムーズな動きと認識されたままで、学習効果は顕著ではなかった。

## 2) 立ち幅跳び

両足で着地しているかどうか、は観点の中では最も判断がしやすいのでエラーは少ないが、他の観点や全体印象ではエラーが多かった。離地時の身体の前傾の有無や全体印象の評価にや学習効果がみられた。

## 3) よじ登りおり・跳び乗りおり

幼児はよじ登りが課題で、小学生は跳び乗りが課題であるが、男子児童の跳び乗りを過大評価する傾向がみられた。これはどうしても幼児の動きの印象が残っていて、「それに比べればさっと乗れている」との判断がされたものと思われる。

## 4) 前 転

全体印象Aで部分評価もすべて○の場合と、全体印象Cで部分評価もすべて×の場合はエラーがほとんどみられないが、その他の例ではエラーにもばらつきがみられた。斜めに回転してしまう男子児童の例では、手の着きや起き上がり動作を高め評価する傾向がみられた。

## 5) 跳び越しくぐり

前向きに跳び越すか、横向きで跳び越すかで、動きの質が全く異なると考えられるが、今回の評価観点では動きの向きの要素が入っていないので、加える必要があると思われた。幼児でまたぐような跳び方をしている場合は全体印象はCで、「ゴムを跳び越すことができる」という要素も×であるが、幼児によくみられる動きであるため、高めに評価する傾向がみられた。

## 6) 遠 投

この種目も、最も良い動きと未熟な動きについてのエラーはほとんどみられない。部分評価の「肩がリードしてボールや腕が遅れて出て来る」の評価が最も難しかったといえる。学習効果は顕著ではなかったが、解説を加えれば理解もしやすい観点ではないかと思われる。

## 7) 正確投げ

全体を通して、評価のエラーが最も大きかった種目であった。原因として、二人組が入るように撮影された映像のため、画像がやや遠く見にくかったことと、数回キャッチボールを繰り返す中で、試行間でのばらつきがみられたことが考えられる。キャッチボールは二人組で行なっても、撮影は一人を追うようにし、また他の種目と同様、一つの試行を繰り返してみせるようにした方がよいと思われる。

## 8) プレースキック

部分評価のエラーが多く、被験者間でのばらつきがみられ、評価者自身のキック動作経験の少なさを推察させた。従って学習効果も顕著ではなく、特に詳細な解説が必要であると考えられた。

## 9) ドリブル

動作速度は問題にされていないが、速すぎると安定性に欠けるとの印象があり、その点での評価が分かれる傾向がみられたが、学習効果もみられた。

## 10) 両足まわり跳び

バランスを崩さず着地できるかどうかについては、判断しやすい評価だといえるが、全体評価にエラーがみられ、学習効果もみられなかった。この種目は、できるだけたくさん回ろうとして安定性をやや欠いた回転になるものと、安定した回転をしようとする半回転しかないのでは、動作遂行の目標が異なるため、全体印象の判断が分かれる傾向がある。回転結果を考慮するか、もう少し具体的な評価のキーワードが必要であると思われた。

(表) 基本的運動習熟度の評価テスト Pre-testとPost-testの比較

※ 評価欄は基準評価を示す

※ Pre、Post欄は基準評価と被験者の評価との差の平均をとった - は基準評価と一致したことを示す

20m、50m走 (レベル I・II)

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：前方にスムーズに進んでいる。	C	-1.0	-0.3	A	-	0.3	C	-1.3	-1.0	A	-	-	B	-	-0.7
①腿が良く上がっている。	×	-	-	○	0.3	0.3	×	-	-	○	-	0.3	×	-0.7	-0.7
②歩幅が大きい。	×	-	-	○	-	0.3	×	-	-	○	0.3	0.3	×	-0.7	-0.7
③腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている。	×	-	-	○	-	-	○	0.3	0.3	○	-	-	○	0.3	0.3

立幅跳 (レベル I・II)

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：両脚で前方へ力強く跳躍している。	C	-0.7	-0.7	A	-	-	B	-0.7	-0.3	A	0.3	-	C	-0.3	-0.7
①準備で膝と腰をよく曲げている。	×	-0.3	-0.3	○	-	0.3	○	-	-	○	0.3	-	×	-0.3	-0.7
②腕を後方から前方にタイミングよく振っている。	×	-0.7	-0.3	○	-	-	×	-0.7	-0.3	○	-	-	×	-	-
③離地時に身体全体を大きく前傾している。	×	-	-0.7	○	0.3	-	○	1.0	0.7	○	0.7	0.3	×	-	-0.3
④両足で着地している。	○	1.0	0.3	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-

よじ登りおり (レベル I)・跳び乗りおり (レベル II)

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：スムーズによじ登る (跳び乗る) ことができる。	A	-	1.0	C	-0.3	-	A	-	-	B	-0.7	-0.3	C	-1.7	-1.3
①両腕で体を支えることができる。	○	0.3	0.3	×	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-
②跳び箱の上に素早くよじ登る (跳び乗る) ことができる。	○	-0.7	0.3	×	-	-	○	-	-	×	-0.3	-0.7	×	-0.3	-0.3
③跳び箱の上で身体のバランスがとれている。	○	-	-	×	-0.3	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-
全体印象：大きな音をたてずに柔らかく着地できる。	A	0.7	1.3	B	0.3	0.3	A	-	-	A	0.3	0.7	A	0.7	1.0
①着地で脚のクッション (腰や膝を曲げる) を使うことができる。	○	0.3	0.7	○	0.3	0.7	○	-	-	○	0.3	0.3	○	0.7	0.7
②着地で身体のバランスがとれている。	○	-	-	○	0.7	-	○	-	-	○	-	-	○	0.3	-

前転 (レベル I・II)

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：転がりがなめらかで、1回目と2回目の前転につながりがある。	B	0.3	0.3	C	-0.3	-	A	-	-	C	-	-	B	0.3	0.3
①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる。	○	0.3	-	×	-	-	○	-	-	×	-	-0.3	○	0.3	-
②背中を丸めたまま転がることことができる。	○	-	-	×	-	-	○	-	-	×	-	-	×	-	-
③起き上がることができる。	○	0.3	0.3	×	-	-	○	0.3	-	×	-	-0.3	×	-	-0.3

跳びこしくぐり (レベル I・II)

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：跳ぶ動きとくぐる動きがすばやく連続している。	B	0.7	-	A	-	-	B	-	0.3	B	-	0.3	C	-0.7	-1.0
①ゴムを跳び越すことができる。	○	0.3	-	○	-	-	○	-	0.3	○	-	-	×	-0.3	-0.3
②体を低くしてゴムをくぐることことができる。	○	0.3	-	○	-	-	○	0.3	0.7	○	-	-	○	-	-

遠投（レベルⅠ・Ⅱ）

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：全身を使って、腕をむちのように振って投げている。	C	-	-	A	-	-	B	0.3	-	C	-1.0	-0.7	B	-	0.3
①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。	×	-	-	○	-	-	×	-	-0.7	×	-	-0.3	○	0.7	0.3
②ステップ脚（投げ腕と反対側）が前に出る。	×	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-
③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。	×	-	-	○	0.3	-	○	1.0	0.7	×	-	-	○	1.0	1.0

正確投（レベルⅠ・Ⅱ）

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
[投]全体印象：相手の胸のあたりに捕りやすい球を投げている。	B	0.7	0.3	A	0.3	0.3	C	-	-	B	-0.3	-0.3	A	0.3	1.0
[捕]全体印象：ボールの正面に身体を移動させてキャッチしている。	B	1.0	-	A	0.3	0.3	C	-0.7	-0.3	C	-1.0	-1.0	A	0.3	0.3
①準備した腕の肘が曲がっている。	○	1.0	0.3	○	-	-	×	-0.3	-0.7	×	-0.3	-0.7	○	-	-
②手のひらでボールを受けている。	○	0.7	1.0	○	-	-	×	-0.3	-0.3	×	0.7	-0.3	○	-	-
③腕を曲げてボールの勢いをコントロールしている。	×	-	-0.7	○	-	-	×	-	-	×	-0.3	-0.3	○	0.7	0.3

プレースキック（レベルⅠ・Ⅱ）

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる。	C	-0.7	-	A	0.3	-0.3	B	-0.3	-0.7	A	-	-	C	0.3	-
①ボールをよく見ている。	○	0.3	0.3	○	-	-	○	-	-	○	0.3	-	○	-	-
②軸足が力強く踏み込まれている。	×	-	-	○	-	-0.3	×	-0.7	-0.3	○	0.3	0.3	×	0.3	-
③蹴り脚のバックスイングが大きい。	×	-	-	○	-	-0.3	×	-0.7	-	×	0	-0.3	×	0.3	0.3
④蹴り脚が勢いよく前方に振られている。	×	-0.3	0.3	○	-	-	×	-1.0	-1.0	○	0	-0.3	×	-	-0.3

ドリブル（レベルⅠ・Ⅱ）

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：ボールと身体の移動がスムーズである。	A	-	-	B	-0.7	-0.3	A	1.0	-	C	-0.3	-	B	-	-0.3
①同じ高さで安定してボールをついている。	○	-	-	×	-0.3	-0.3	○	0.3	-	×	-	-	○	0.3	-
②身体とボールの関係（距離）が安定している。	○	-	-	○	0.7	-	○	0.3	-	×	-	-	○	0.3	-0.3
③顔や上半が適度に前を向いている（極度に下をむいていない、ボールばかり見えない）。	○	-	-	○	-	0.7	○	-	-	×	-	-	×	-0.3	-0.3

両足まわり跳び（レベルⅠ・Ⅱ）

評価の観点・尺度	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post	評価	Pre	Post
全体印象：準備動作から着地までをなめらかにやっている。	B	0.3	-0.7	C	-0.3	-0.3	A	-	-	B	-	-	C	-0.3	0.7
①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。	○	1.0	-0.3	×	-	-	○	-	-	○	0.7	0.3	×	-	1.0
②バランスを崩さず着地できる。	×	-	-	×	-	-	○	-	0.3	×	-	-	×	-	-

## [4] 被験者への質問調査に対する回答

### 全体について：

- ①模範試行を行なったのが成人で、子どもでないことについては、気にならなかった。良い動きのイメージを持つのには役立った。
- ②できている子どもは模範と同じ動きが見られた。模範と「何か違う」とは思っても、何が違うのか言語化しにくいので、その機序を説明してもらって役に立つ。
- ③これまで、全体的な動きで見ているだけだったので、要素で見るのは新鮮だった。
- ④投げるのが上手だったら捕るのも上手だろう、と先入観があったが、必ずしもそうではないと知った。

### 評価観点について：

- ①項目にない観点をどうするか。「何か違う」と感じたポイントになっている気がする。  
ex. 重心がぐらつく
- ②いくつも見ているとよくわからなくなる。間に模範を差し挟めば評価がぶれなくなるのでは。

### 学習用DVDについて：

- ①「ここを見て欲しい」という学習ポイントが強調されて示されるとよかった。
- ②現場の保育者をお願いすると、1回30分は長い。10分程度で見られるものであれば継続できると思う。

個々の種目について挙がった意見は次の通りである。

#### 1) よじ登り降り

- ①着地の評価が「大きな音を立てずに」とあるが、音声は入っていないので想像して評価した。
- ②「跳び乗る」という表現は、跳び箱に足を着かないことのみを指しているのか、足は多少着いても腕で支えていれば良いのか、わからなかった。腕で支えているが一度では上がれなかった子どものケースで迷った。
- ③両手で身体を支えて、の評価が難しかった。

#### 2) 跳びこしくぐり

- ①「跳びこすことができる」「身体を低くして

くぐることができる」の観点は問題なくできるので、全体印象は動きの速さでABCを評価した。

- ②ゴムにあたらなければ良いのか、両足が一緒に跳んでいるかどうか、と自分なりの基準を設けて評価した

#### 3) 遠投

- ①「肩がリードして」という表現が分かりにくかったが、模範を見ていると多少わかる。幼児にはテイクバックが難しいように思えた。

#### 4) 正確投げ

- ①全体印象の「移動してキャッチ」は、ほとんど移動する必要がないので、1回微妙に動いた時に判断した。
- ②投げる方では「捕りやすい球」という全体印象は、それ以前のスキルレベルの場合（届かない、等）判断に迷った。
- ③キャッチで「肘が曲がる」などは個人内変動がみられ、どの時点で評価したら良いのか迷った。

#### 5) プレースキック

- ①全体印象としてスムーズにキックは行なっても、蹴ったボールに勢いがいない場合の判断に迷った。

#### 6) ドリブル

- ①評価に速度は問われていないが、「同じ高さで」「身体とボールの距離」の観点では安定していると思われるが、速度が速すぎて全体印象として不安定に見える場合、判断に迷った。
- ②ドリブル、というのは腰の高さで行なうものと思っていたが、かなり高い位置で行なっている場合でも、「同じ高さで」「身体とボールの距離」であれば良いのか。また、距離がもう少し長ければ失敗しそうに見える場合、安定と判断して良いのか。

#### 7) 両足まわり跳び

- ①「まっすぐ上に」のまっすぐの判定に迷った。模範はまさにまっすぐ上に跳んでいたが、きれいすぎて実際の子どもの動きとのギャップが大きかった。どこまでをまっすぐ、とするのか基準が欲しかった。



②高さと同軸の傾きと、どちらを優先させるべきか判断に迷った。

被験者は、全体印象にある評価観点では差がつかなかった場合、自分なりの評価の基準を作って(素早くできるかどうか、等)ABC評価をしている傾向がみられた。この点では絶対評価というより相対評価に近いものになっているといえる。

## [5] おわりに

今回は、評価学習用DVD視聴による学習効果の有無について検討するため、Pre-test後に評価観点の詳しい説明は行なわなかった。このため、Pre-testを実施した時に疑問に思ったことが解決

できないままDVDを観ても、学習効果は上がりにくいといえる。しかしPre-test終了後にできるだけ解説を詳しく行なうか、学習用DVDに評価に関する解説情報をできるだけ多く載せる、あるいは別に解説リーフレットを作成する、などによって学習効果は確実に向上すると推察される。

動きを要素に分解しての評価は、運動の専門家でないあまり行なっていない作業であるといえ、1度評価を経験するだけでも、評価能力の向上には有効であると考えられる。また、幼児から小学生までの動きを連続して観ることで、保育士・幼稚園教諭は小学生の発達段階を、小学校教員は幼児期の発達段階のイメージを持つことができるようになり、自分が受持つ子どもを指導する際に役立つと思われる。

## 3-7 基礎的動きの評価観点学習の効果および評価テストの信頼性について

本 間 三和子（筑波大学）

### 1. はじめに

本稿では、体育系大学院生および大学生を対象に、本プロジェクトで作成した基礎的動きの評価観点に関する学習の効果および評価テストの信頼性を検討した結果を報告する。

### 2. 方 法

#### 2.1 被検者

体育系大学院生10名と大学4年生2名の計12名が本調査に協力した。12名を学習群（L）6名と非学習群（NL）6名に分類した。

#### 2.2 評価観点学習の対象とした基礎的動きと評価観点

##### 2.2.1 基礎的動き

評価観点学習の対象とした基礎的動きは、次の10項目とした：①20m, 50m走，②立幅跳，③よじ登りおり・跳び乗りおり，④前転，⑤跳びこしくぐり，⑥遠投，⑦正確投，⑧プレースキック，⑨ドリブル，⑩両足まわり跳び。

##### 2.2.2 評価観点と評価方法

上述した10項目の動きについて、子どもの動画5試技を各4回見て、全体印象と部分について評価させた。評価はプレテストとポストテストの2回実施した。各動きの全体印象と部分の観点は表1の左欄に示したとおりである。例えば、「20m, 50m走」の場合、全体印象の観点は「前方に進んでいる」、部分の観点は「①腿が良くあがっている，②歩幅が大きい，③腕は前後に大きく振られており，肘は適度に曲っている」の3点である。いずれもチェック用シートに全体印象の評価（A, B, C）および部分の評価（○または×）をチェックさせた。全体印象および部分の評価は、迷ってもいづれかを必ずチェックするように指示した。

#### 2.3 プレテスト・ポストテスト・学習用DVDのコンテンツ

##### 2.3.1 プレテスト（第1回評価）DVD

10項目の動きそれぞれについて、まず、よい動きの模範映像（成人モデル）が示され、続いて幼児・児童の動画5名分（5試技）が示されている。幼児・児童の動画はさまざまなタイプのもものがランダムに収録されている。動画は、1試技（1人の動き）が4回くり返される。1回目の動画では全体印象について評価し、それ以降は部分について観察、評価した。

##### 2.3.2 ポストテスト（第2回評価）DVD

プレテストと同じ10項目の動きについて、同様に、それぞれよい動きの模範映像（成人モデル）と幼児・児童の動画5名分（5試技）が示されている。幼児・児童の動画はプレテストと同じ5名の動画であるが、プレテストとは収録順序を故意に変えてある。動画は、1試技（1人の動き）が4回くり返される。1回目の映像では全体印象について評価し、それ以降は部分について観察、評価した。

##### 2.3.3 学習用DVD

基礎的動きとしてリストアップされた運動について、動きのモデルが動画として収録されており、それぞれのモデル動画には評価の観点が示されている。それぞれのモデル動画は、通常再生（2回）→スロー再生（1回）→通常再生（1-2回）と複数回連続して再生される。通常再生では評価観点の全体印象が示され、理想的な動作の全体的な印象が確認できる。スロー再生では、動きの部分についての評価観点が示され、運動の局面ごとに着目すべき部位と理想的な動作（どこが、どうなっているか）が確認できる。

## 2.4 実験方法

学習群，非学習群ともに評価観点学習DVDの評価を2回実施した。学習群はプレテスト（第1回評価）のあと，1-2回学習用DVDを見て，評価観点を学習し，ポストテスト（第2回評価）を行った。非学習群はプレテストのあと学習用DVDを見ないで，ポストテストを行い再評価した。

## 2.5 統計処理

基礎的動きそれぞれについて，全体印象評価と部分の評価ごとに，学習群と非学習群における平均正答数と平均正答率を算出した。また，基礎的動きそれぞれにおける，全体印象と部分を併せた全評価の平均正答数と平均正答率を算出した。一つの動きにつき5名の試技があり，5試技それぞれに全体印象評価と2-4カ所の部分評価を行ったため，被検者12名の一つの基礎的動きの評価の総解答数は90-210になった。正答率は正答数を全解答数で除して100を乗じて算出した。

なお，ここでは各群の被検者が6名ずつと少なかったため，群間およびプレテスト・ポストテスト間の有意差検定を行わず，評価観点学習の効果および評価の信頼性の検討は，正答率の変化からその傾向を見るにとどめた。

## 3. 結果と考察

表1は，学習群および非学習群における基礎的動き10項目の全体印象評価と部分の評価の正答数と正答率のローデータである。プレテスト（第1回評価）とポストテスト（第2回評価）の正答数および正答率の増減数と増減率を示した。

図1-1から図1-10は，学習群および非学習群のプレテストとポストテストの平均正答率を比較したものである。図1-11は群別に10項目の全体印象評価と部分の評価すべてを合計し，平均正答率の変化を示した。

図2-1から図2-10は，学習群（L）と非学習群（NL）の被検者個々におけるプレテストとポストテストの正答率の変化を示したものである。図2-11は被検者個々における，10項目の全体印象評価と部分の評価すべての平均正答率の変化を示した。学習群（L）は実線で，非学習群（NL）

はグレーの線でプレテストとポストテストを結んだ。

図1では群別の正答率の変化の平均的傾向が，図2では評価者個々の変化が読み取れる。

### 3.1 評価観点学習の効果

評価観点学習の効果を，学習群と非学習群のプレテストとポストテストの正答率の変化（増減率）から検討する（図1）。

学習群においてプレテストからポストテストで+5%以上の正答率の変化があったのは，20m，50m走（+5%：プレテスト68%→ポストテスト73%），立幅跳（+7%：プレテスト73%→ポストテスト80%），跳びこしくぐり（+6%：プレテスト66%→ポストテスト72%），遠投（+9%：プレテスト77%→ポストテスト86%），正確投（+6%：プレテスト65%→ポストテスト71%），ブレースキック（+5%：プレテスト66%→ポストテスト71%），ドリブル（+5%：プレテスト78%→ポストテスト83%）であった。一方，ほとんど変化のなかったのは，よじ登りおり，前転，両足まわり跳びの3項目であった。

学習群が非学習群に比べて大きな変化率を示したのは，正確投げ，よじ登りおり・跳び乗りおり，正確投げ，ドリブル，跳びこしくぐり，遠投であった。これらの動きの評価観点学習は効果があったと考えてもよいだろう。特に，よじ登りおり・跳び乗りおり，跳びこしくぐり，遠投は，学習群の数名が大きな学習効果を示したことから，学習群の平均正答率が上がり，学習効果が高まった。しかし，評価者個々にみると（図2），学習群の中には正答率が上がった者もいれば下がった者もいて，一概に非学習群よりも学習効果があったとは断言しがたい。

### 3.2 評価テストの信頼性

非学習群のプレテストとポストテストの評価結果を比較し，プレテストとポストテストの正答率に大きな差がなければ，テストは妥当で，信頼性の高いものであったと考えられる。

非学習群において項目ごとに評価結果のプレとポストの正答率の差（増減率）をみてもと（表

表1 学習群および非学習群における基礎的動き10項目の全体印象と部分観点評価の正答数と正答率 プレテスト(pre)とポストテスト(post)の比較一

	学習群 (6名)				非学習群 (6名)						
	Pre	Post	増減数	正答率	増減率(%)	Pre	Post	増減数	正答率	増減率(%)	
<b>20m、50m走</b>											
全体印象	12	18	6	40	60	15	20	5	50	67	17
①	26	25	-1	87	83	24	25	1	80	83	3
②	26	24	-2	87	80	26	27	1	87	90	3
③	23	24	1	77	80	22	20	-2	73	67	-7
<b>立幅跳</b>											
全体印象	24	24	0	80	80	17	24	7	57	80	23
①	24	22	-2	80	73	27	25	-2	90	83	-7
②	26	28	2	87	93	28	28	0	93	93	0
③	15	21	6	50	70	16	22	6	53	73	20
④	21	25	4	70	83	20	22	2	67	73	7
<b>よじ登りおり・跳び乗りおり</b>											
全体印象	20	17	-3	67	57	23	17	-6	77	57	-20
①	23	24	1	77	80	25	28	3	83	93	10
②	22	22	0	73	73	27	24	-3	90	80	-10
③	25	29	4	83	97	21	26	5	70	87	17
全体印象	15	18	3	50	60	14	9	-5	47	30	-17
①	22	18	-4	73	60	21	13	-8	70	43	-27
③	24	26	2	80	87	21	23	2	70	77	7
<b>前転</b>											
全体印象	22	25	3	73	83	22	23	1	73	77	3
①	26	26	0	87	87	19	24	5	63	80	17
②	28	26	-2	93	87	30	29	-1	100	97	-3
③	26	27	1	87	90	25	26	1	83	87	3
<b>跳びこしくぐり</b>											
全体印象	15	16	1	50	53	20	19	-1	67	63	-3
①	27	28	1	90	93	30	29	-1	100	97	-3
②	17	21	4	57	70	20	22	2	67	73	7

非学習群 (6名)					
	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
22	23	1	73	77	3
25	23	-2	83	77	-7
16	21	5	53	70	17
16	21	5	53	70	17

学習群 (6名)					
	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
20	25	5	67	83	17
23	26	3	77	87	10
30	28	-2	100	93	-7
19	24	5	63	80	17

### 遠投

全体印象	全身を使って、腕をむちのように振って投げている。
①	上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。
②	ステップ脚(投げ腕と反対側)が前に出る。
③	肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。

	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
22	25	3	73	83	10
20	20	0	67	67	0
24	20	-4	80	67	-13
25	26	1	83	87	3
21	22	1	70	73	3

	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
20	23	3	67	77	10
12	19	7	40	63	23
23	20	-3	77	67	-10
24	25	1	80	83	3
19	19	0	63	63	0

### 正確投

投	相手の胸のあたりに捕りやすい球を投げている。
全体印象	ボールの正面に身体を移動させてキョッチしている。
①	準備した腕の肘が曲がっている。
②	手のひらでボールを受けている。
③	腕を曲げてボールの勢いをコントロールしている。

	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
15	23	8	50	77	27
21	25	4	70	83	13
28	25	-3	93	83	-10
26	26	0	87	87	0
21	23	2	70	77	7

	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
14	16	2	47	53	7
18	27	9	60	90	30
22	22	0	73	73	0
28	25	-3	93	83	-10
17	16	-1	57	53	-3

### プレースキック

全体印象	助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる。
①	ボールをよく見ている。
②	軸足が力強く踏み込まれている。
③	蹴り脚のバックスイングが大きい。
④	蹴り脚が勢いが良く前方に振られている。

	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
23	16	-7	77	53	-23
27	23	-4	90	77	-13
22	26	4	73	87	13
24	23	-1	80	77	-3

	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
22	22	0	73	73	0
24	25	1	80	83	3
24	27	3	80	90	10
23	25	2	77	83	7

### ドリブル

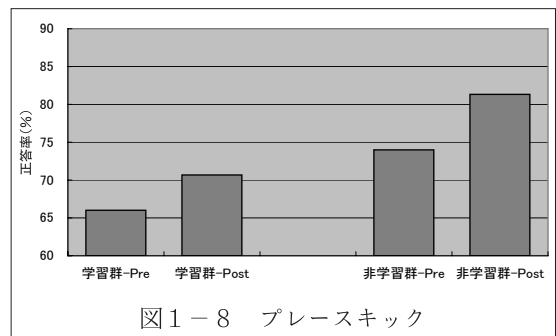
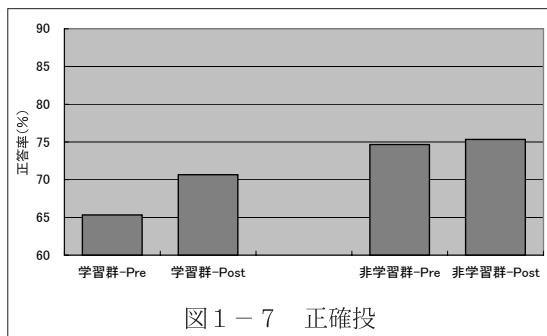
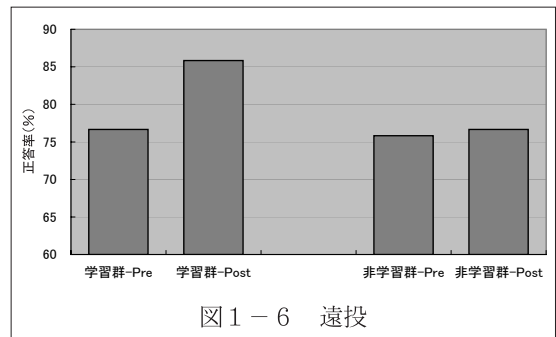
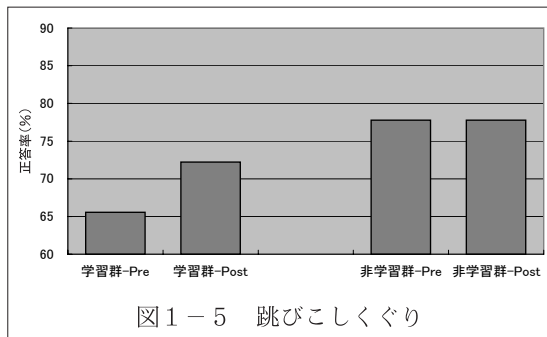
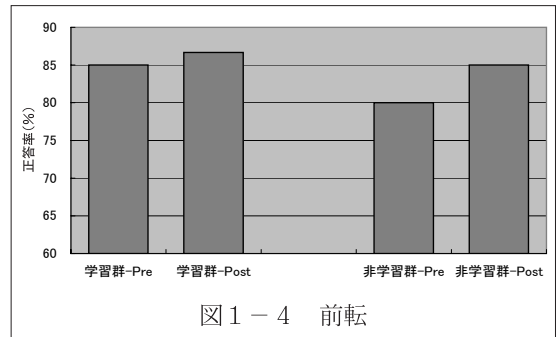
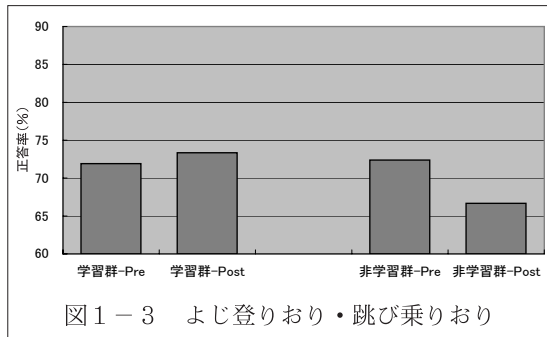
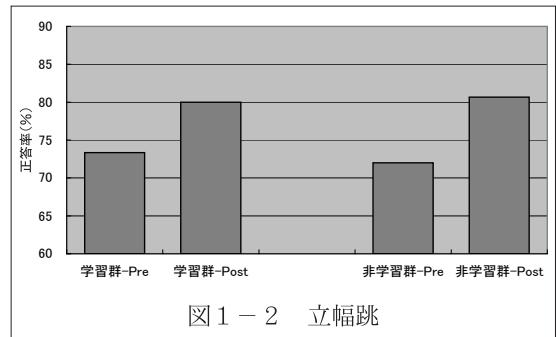
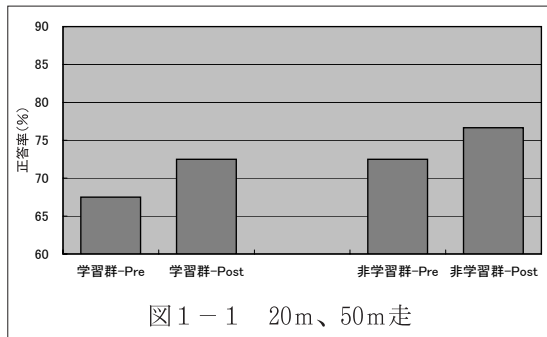
全体印象	ボールと体の移動がスムーズである。
①	同じ高さで安定してボールをついている。
②	身体とボールの関係(距離)が安定している。
③	顔や上半体が適度に前を向いている。

	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
18	23	5	60	77	17
26	26	0	87	87	0
30	29	-1	100	97	-3

	Pre	Post	Pre	Post	
正答数	正答数	増減数	正答率	正答率	増減率(%)
13	16	3	43	53	10
24	22	-2	80	73	-7
28	27	-1	93	90	-3

### 両足まわり跳び

全体印象	準備動作から着地までをなめらかにしている。
①	体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。
②	バランスを崩さずに着地できる。



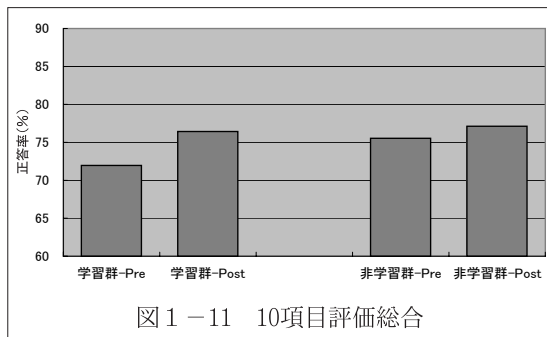
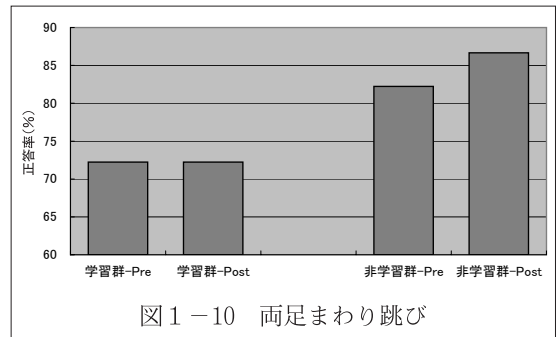
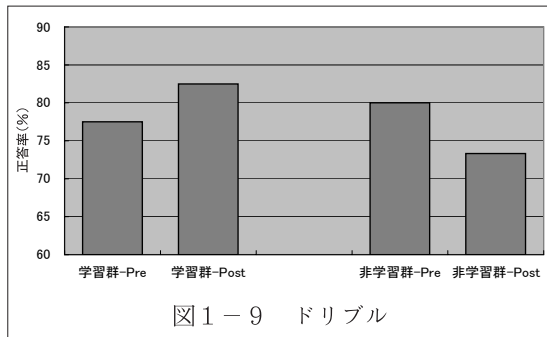


図1 学習群および非学習群における基礎的動き10項目の観点評価の正答率  
—プレテスト (pre) とポストテスト (post) の比較—

1), 増減率が10%以内におさまっていたのは, 20m, 50m走の部分観点①②③ (増減率3, 3, -7%), 立幅跳の部分観点①②④ (増減率-7, 0, 7%), よじ登りの部分観点①② (増減率10, -10%), 跳びおりの部分観点② (増減率7%), 前転の全体印象 (増減率3%) と部分観点②③ (増減率-3, 3%), 跳びこしくぐりの全体印象 (増減率-3%) と部分観点①② (増減率-3, 7%), 遠投の全体印象 (増減率3%) と部分観点① (増減率-7%), 正確投の投の全体印象 (増減率10%) ・捕の全体印象 (増減率0%) と捕の部分観点②③ (増減率3, 3%), プレースキックの部分観点②③④ (増減率-10, 0, 7%), ドリブルの部分観点③ (増減率-3%), 両足まわり跳びの部分観点①③ (増減率0, -3%) であった。これらの項目の全体印象もしくは部分の評価は安定しており, 信頼性が高い傾向にあると考えられる。

その一方で, 非学習群のプレテストとポストテストの評価結果の差が大きかったのは, 20m, 50

m走の全体印象 (増減率17%), 立幅跳の全体印象 (増減率23%), よじ登りの全体印象 (増減率-20%), よじ登りの部分観点③ (増減率17%), 跳びおりの全体印象 (増減率-17%), 跳びおりの部分観点① (増減率-27%), 前転の部分観点① (増減率17%), 遠投の部分観点②③ (増減率17, 17%), 正確投の捕の部分観点① (増減率-13%), プレースキックの全体印象 (増減率27%) と部分観点① (増減率13%), ドリブルの全体印象 (増減率-23%) と部分観点①② (増減率-13, 13%), 両足まわり跳びの全体印象 (増減率17%) であった。特に, 立幅跳の全体印象, よじ登りの全体印象, 跳びおりの部分観点①, プレースキックの全体印象, ドリブルの全体印象はプレテストとポストテストの増減率の差が20%以上あったことから, 評価が安定しづらいものであったと考えられる。

全体印象と部分の評価を比較すると, 20m, 50m走は全体印象評価の信頼性はそれほど高くない

が、部分観点評価は信頼性が高い傾向にあった。また、プレースキック、ドリブル、両足まわり跳びにおいて全体印象評価よりも部分観点評価の方が信頼性が高い傾向にあった。プレースキック、ドリブル、両足まわり跳びの全体印象評価には、「スムーズ」「なめらか」という言葉が共通して入っていたことから、評価を行う際に「スムーズ」「なめらか」の基準がわかりにくいのではないかとと思われる。

### 3.3 評価者（被検者）のプレテスト・ポストテスト後の感想

表2に評価者のプレテスト、ポストテスト後の感想をまとめた。DVDコンテンツに対する感想、評価に関する感想、本プロジェクトに関する感想等、いろいろみられた。

本プロジェクトの目的については肯定的意見が多く、質的に動きを評価することの重要性が述べられていた。

評価の難しさについては、「自分の専門以外の動きの評価が難しかった」「見慣れない運動の評価の基準が変わり易かった」「動作が素早いと観察が難しくなっていく」「一人目の試技の評価が難しい」などが指摘された。また、「全体の印象が良くても必ずしも部分評価がよいとは限らない」「各項目はできているようで全体的には評価が低かったりと、実際にいろいろな動きを評価すると難しかった」という意見に代表されるように、全体印象と部分の評価が必ずしも連動しているとはいえないことが示された。

「映像の模範と試技者の年齢が違うので動きが多少異なる」「模範と試技者の年代が異なることから動きが同様のものになるとは考え難い」という意見があったように、模範映像と試技者の年代を合わせることが課題と考えられた。

学習群では「前回と比べると見るポイントが少

し変わったように感じる」「以前DVDを見た時と違い運動のタイミングにおける留意点がクリアになったと思う」など、評価観点学習の効果があったという意見がみられた一方で、「前回よりも自分の中で評価が厳しくなった。2回目ということもあり、より部分と全体を客観的にみられるようになったからかもしれない」「前は歳相応の動きとして甘めにつけたが、今回は模範演技と比較してつけた。そうすると点数の低いものばかりになると感じた」「DVDを見てうまいイメージがあるので評価が厳しくなったと思う」のように、模範映像が焼きついたため、前回よりも評価が厳しくなったという意見が複数みられた。

## 4. まとめ

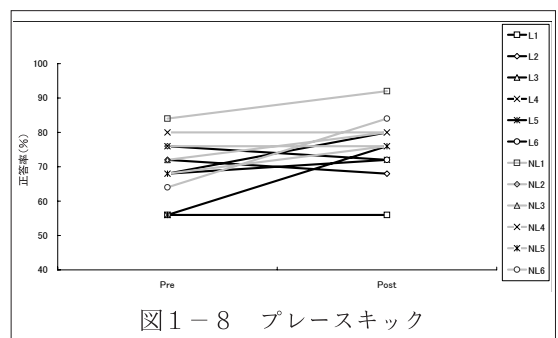
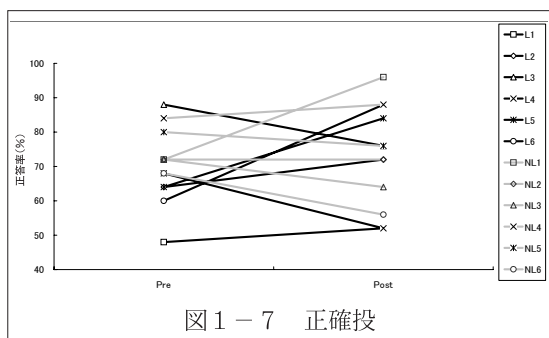
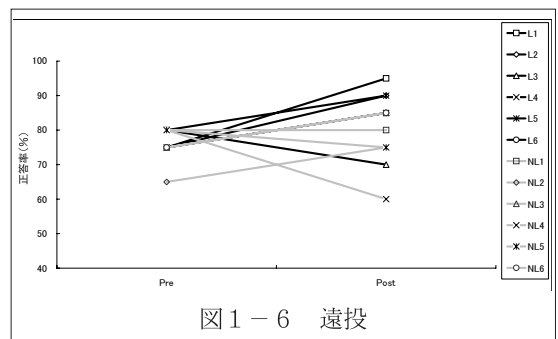
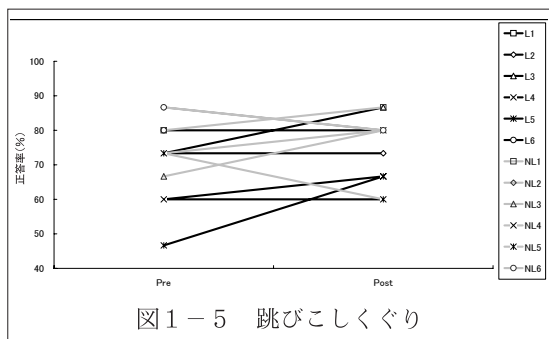
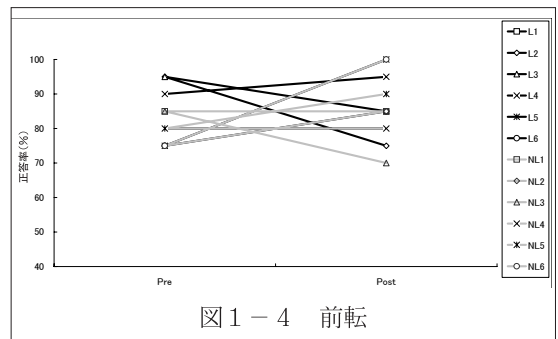
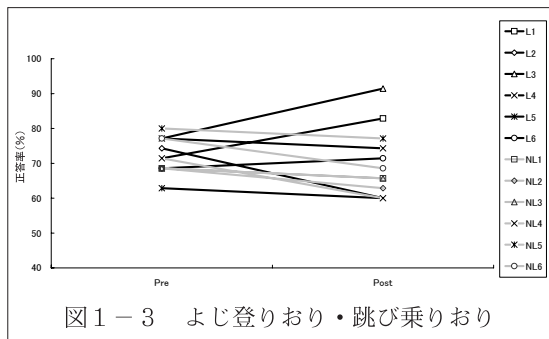
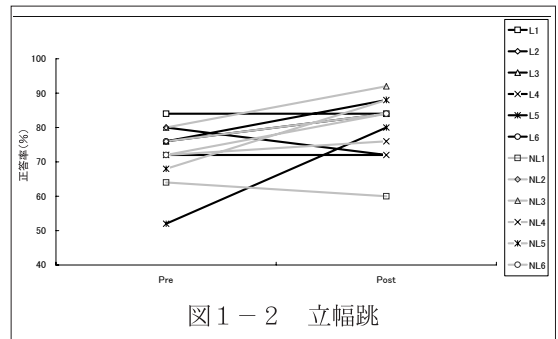
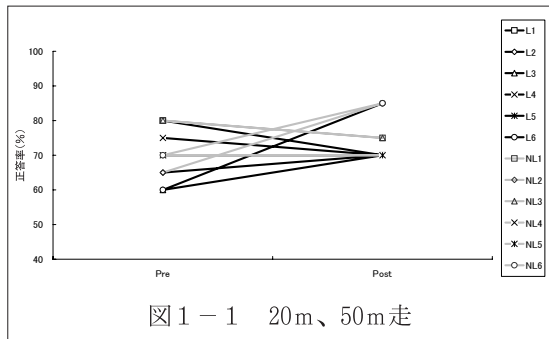
今回のテスト結果では、評価者が体育専攻学生であったことも影響し、平均して7割以上の正答率が得られ、おおむねその実用性を示すことができた。本プロジェクトで作成した基礎的動きの評価観点は、まだ改善の余地はあるもののリーズナブルなものとなっており、今後、修正を加えることによって有用性の高いものになるであろう。

筆者はシンクロナイズドスイミングの審判員資格（国際A級、国内A級）を有しており、20年以上の審判経験を持つ。質的評価の難しさは身をもって知っていると自負しているが、評価基準を明瞭にし、何度も動画で学習することによって評価能力が身に付くことも体験から知っている。本プロジェクトで進めている基礎的動きの質的評価は、これまで現場の指導者（教員）が重要なことはわかっているけれども難しいために避けてきたことである。教員が動きの評価能力、言い換えれば動きの良し悪しを見抜く能力を身に付け、子どもたちに最低限必要な基礎的動きを正しく身に付けさせることができれば、子どもたちの身体能力をさらに高めることにつながると思われる。



表2 評価者のプレテスト（第1回評価）とポストテスト（第2回評価）直後の感想

		第1回テスト（プレ）直後	第2回テスト（ポスト）直後
学習群	L1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チェック項目を覚えて何度か（3回目か4回目）やると、見ただけで評価できるようになっていた。</li> <li>・学習用DVDを見ると影響されると思いました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・DVDを見てうまいイメージがあるので評価が厳しくなったと思う。</li> </ul>
	L2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難しかったのが正直な感想です。</li> <li>・全体と項目の評価を行ったが、全体印象は見る観点で大きく変化するように思う。</li> <li>・ドリブルの評価が速さをスムーズといっているのか、それともゆっくりでも正確ならいいのか判断が分からなかった。高すぎるドリブルだけれど安定していたらよいのかも、分かりにくかった。</li> <li>・両足まわり跳びは、まわる角度は決まっていな？？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習用DVDで注目するところに「→」や「囲み」を入れるともっとわかりやすくなるのではないかと思った。音楽も入れるとみててあきないかなと思う。</li> <li>・小学生の先生を対象としたときに運動自体あまりやっていない人が多いと思うので観点を教えて評価できるかなと思った。実験段階だとは思いますが。</li> <li>・完成したら学校体育も変化すると思うので応援しています。</li> </ul>
	L3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・映像を見せてもらった際にチェック項目の数に関わらず、同じ再生回数だったので次回はその点を調整するとより見せ易くなると思う。</li> <li>・さまざまな映像を見せてもらったが、運動における基準（できているのかどうか）の明確性が足りないと感じた。また、自身でも明確におしておかなければならないと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・以前DVDを見た時と違い運動のタイミングにおける留意点がクリアになったと思う。</li> <li>・瞬間的に運動者の欠けているものを把握するには知識と観察力が必要で、指導者における重要なファクターだと思う。</li> <li>・今後DVDを見ることでより発達・発展的学習の機会があれば幸いである。</li> </ul>
	L4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・項目が多い種目については映像を増やしてほしい。映像を繰り返し流すよりも一度ストップしたほうが見やすい。</li> <li>・チェックポイントの基準をもう少し明確にもらえたら評価が行いやすい。例）ドリブル……一定の高さでボールを安定してついている。これには胸の高さ・腰の高さなどの項目が追加されるとチェックしやすい。</li> <li>・基礎的運動能力が小さい子供から低下しているのだとわかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・DVDの動きの中で、一時停止をしながら解説ができた箇所はわかりやすく理解しやすかった。</li> <li>・DVDを見た後でチェックする箇所が変化した場合もあるが、おそらく個人の主観によって左右されるものと考えられる。</li> <li>・その日によって変化が生じる可能性がある。</li> </ul>
	L5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模範と試技者の年齢が違うので動きが多少異なると思いました。</li> <li>・「この年代にしてはできている」や「各項目はできているようで全体的には評価が低かったりと、実際にいろいろな動きを評価すると難しかった。</li> <li>・評価の基準がもっとはっきりしていないと点数をつけにくいと思いました。</li> <li>・全体印象はまず何が、確実に出来なければならないのか（優先順位）が明確になっている状態で評価してあげたいと思いました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回のテストの時もプリントに書いてある項目を評価の観点として見たので、今回DVDを見てその見方はあまり変わらないと思いました。</li> <li>・要は同じ動き（被験者）を何回見るかで評価に正確性が出るだけだと思います。</li> <li>・また基礎的な動きとして模範と試技者の年代が異なることから動きが同様のものになるとは考え難いと思います。</li> <li>・また全体の印象が良くても必ずしも項目評価よいとは限らないと思いました。</li> </ul>
	L6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の動きは予想できなかつたり、さまざまな動きをするので、ある意味一貫した評価は難しいと思った。しかもそれを瞬時に行うには指導や接する機会、経験が必要だと感じた。</li> <li>・もし、評価に「△」があると非常にその回数は多くなったと思う。はっきり、明確な評価をし、指導するならば、○か×が好ましいだろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回と比べると見るポイントが少し変わったように感じる。</li> <li>・ある動き（ポイント）だけに注目して評価することが今回のほうがスムーズに行えた。しかし、評価の際に前回よりも厳しく見ると甘く見える場合の両面性が出たように思う。つまり、評価の観点が不明瞭で一貫性がないのが原因だろう。</li> <li>・この評価方法は現場における評価としては有効的だと思う。</li> </ul>
非学習群	NL1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体的な印象とチェック項目に多少ずれが生じる。全体的にはBだが項目はすべて×であるなど。</li> <li>・自分が一貫性を持って評価できているか疑問である。</li> <li>・年齢が違うのに同じ評価方法でいいのか。</li> <li>・模範演技の時にチェックすべきポイントなどを図で挿入していただくとわかりやすい。</li> <li>・回数やタイムで評価できないとやはり難しいと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絶対評価にならなければいけないのに結局、相対評価になってしまう自分がいた気がする。</li> <li>・跳びこしくぐりにおいて評価の項目が少ない気がした。自分がよい、よくないと思った項目がないために、評価しづらかった。</li> <li>・跳び終わってから、ゴムをくぐるまでの動作が素早い。などは印象ではなく項目に入れてほしい。</li> <li>・先日この実験に関して友達と話をしたらおもしろいと興味を持っていた。もっと煮詰めればよいものになると思う。</li> </ul>
	NL2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・このような評価を行ったのは初めてであったが、自分の専門とする種目以外を評価するのは非常に難しかった。評価するには基準が必要であるが模範があったことでそれを基準に評価できた。</li> <li>・評価するには必ず一人目があいまいになってしまう。それを基に他を評価する感覚が否めない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回は2回目だったので、1度目よりも見る観点が定まり、どの範囲で「良いのか」「悪いのか」を判断すればよいか、あらかじめわかっていた。その点で1度目よりは全体的な評価のバランスは修正されたと思う。</li> <li>・映像の中には言葉だけではよくわからないものもあるので、どのようなものかわかっており、基準が定まっていれば、見ている側の評価のスピードも速くなる。</li> </ul>
	NL3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の専門のものは自分の価値観から見ることができた。</li> <li>・専門外の試技は全体のバランスを見て、尺度を決めて評価をしました。</li> <li>・運動の枠組みから外れた試技の評価をするのに、どの程度ではかるるか迷った。例えば、運動はできているが協調性がない。協調性はあるが運動ができていない。</li> <li>・全体的に評価に慣れておらず、自信をもって評価できる試技が少なかった。そのため、なんとなくで悪い試技は分かるが、実際の現場でのフィードバックの仕方が難しいと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2回目なので評価をしやすかった。</li> <li>・学習ビデオを見ないで客観的な基準がわからず、自分の中の物腰で決めてしまった。</li> <li>・見慣れない運動評価の基準が変わり易かった。</li> </ul>
	NL4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私の評価方法がその年代においてのバランスで評価していた。</li> <li>・回転系が日常生活にはほとんど無いため、苦手な子が多かったようだ。ものを相手にする（ボールを使う）と、その反応（結果）で自分の動きと他との違いや良い悪いがわかるけれども、身体ひとつと自分自身じゃないからない。</li> <li>・「評価する」「評価されること」は重要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回よりも自分の中で評価が厳しくなった。2回目ということもあり、より部分と全体を客観的にみられるようになったからかもしれない。</li> <li>・前は年齢相応の動きとして甘めにつけたが、今回は模範演技と比較してつけた。そうすると点数の低いものばかりになると感じた。</li> </ul>
	NL5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正確投などの観察は少し難しい。子供たちの動作がすごくバラバラな感じを受けた。</li> <li>・映像の向き（方向）で観察しづらい試技があった。</li> <li>・基本的な動作が行えない子供たちがいることに少し驚いた。</li> </ul>	
	NL6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各種目の一人目の評価を気にしてしまった。</li> <li>・時間はそれほど長くは感じなかった。</li> <li>・良い例だけでなく良くない例も入っていたので評価の練習にはよいと思った。</li> <li>・DやEになると模範映像を忘れてしまうので普段からよいイメージを持っていると評価しやすくなると感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1時間程度集中してみなければならぬのでテストを受けるだけでも勉強になると思う。</li> <li>・繰り返し受けることで見るべきポイントが頭に入っている感じがした。</li> <li>・動作が素早いと観察が難しくなっていくので、さまざまなスピードの動作を見ることによって観察眼が養われる気がする。</li> </ul>



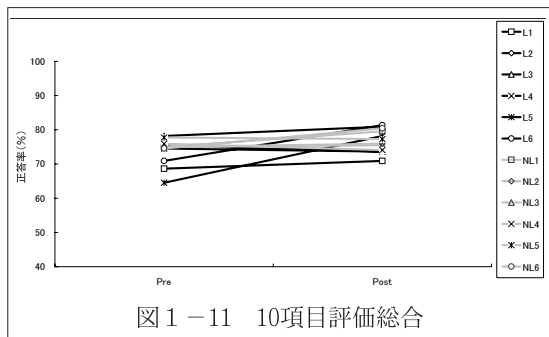
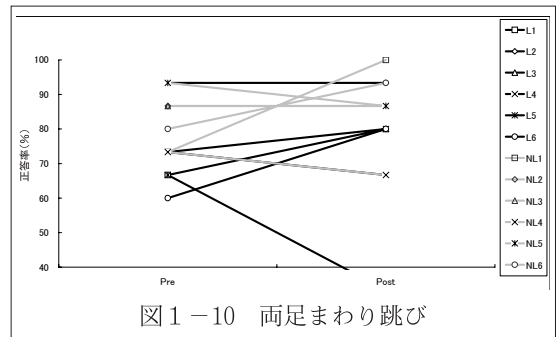
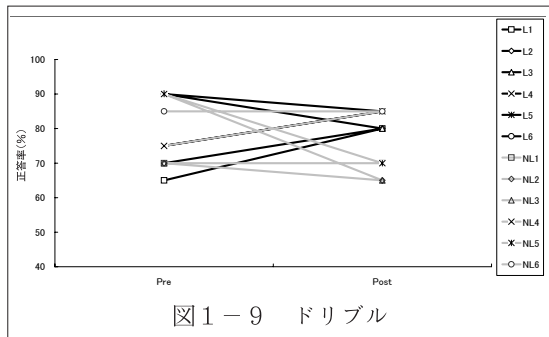


図2 学習群 (L) および非学習群 (NL) 全評価者における基礎的動き10項目の観点評価の正答率  
 -プレテスト (pre) とポストテスト (post) の比較-

### 3-8 幼少年期に身につけておくべき基礎的動きに関する評価観点テストについて

山 神 眞 一 (香川大学)

幼少年期に身につけておくべき基礎的動きに関する研究用の評価観点テスト及び評価観点学習用のDVD作成を目的として、遠投、キャッチボール(補のみ)、プレスキック、ドリブル、両足まわり跳び、よじ登り降り、前転、跳びこしくぐりの7つの動作に関する評価観点テスト(全体印象及び部分評価観点)を評価観点学習(模範映像による観察学習)の前後に行い、評価観点テストと評価観点学習用のDVDの有効性の検証を行った。

#### I. 研究方法

1. 実施日：プレテスト；平成19年12月27日  
ポストテスト；平成20年1月22日
2. 対象者：大学院生3名(修士1年生23歳男性1名、修士2年生24歳の男性2名)・小学校教員2名(44歳女性1名、42歳男性1名)の計5名
3. 対象動作：遠投(テニスボールを遠くに投げる)、キャッチボール(補助者が投げ上げたドッジボールを両手でキャッチする：補のみ)、プレスキック(地面に置いたボールを遠くに蹴る)、ドリブル(ドッジボールをドリブルしながら10m進む)、両足まわり跳び(両足で同時にジャンプしてまわり着地する)、よじ登り降り(腰の高さ程度の跳び箱をよじ登って飛び降りる)、前転(マットの上を連続して2回前転する)、跳びこしくぐり(低く張ったゴムを両足で飛び越えてくぐる動作を連続して行う)の7つの動作を対象とした。
4. 実施方法：7つの動作に関して評価観点テストを評価学習観点学習の前後にプレテスト・ポストテストとして院生(3名)・小学校教員(2名)の計5名を対象として行った。7つの動作にはそれぞれ5人の子どもたち(幼児・小学生)を対象とした動作が映像としてあり、それを見てチェック用シートに全体印象(A,B,C)

及び部分観点(○または×)をチェックする。その際、映像は4回繰り返し返され、1回目の映像で全体印象について、それ以降は部分観点について評価し、チェックする。プレテストを行った後、約1か月間、7つの動作に関する評価観点学習用DVDを週1~3回個人で学習(観察)する。約1か月の学習の後、学習の効果を検証するために、プレテストと同様の評価観点テストをポストテストとして行った。

5. 分析方法：7つの動作についての全体印象と部分観点の評価結果をプレテストとポストテストの変化率で分析した。個人別と5人の全体的変化の度合いに着目して分析し、考察を行った。

#### II. 結果及び考察

被験者は、M1(院生2年男性)、M2(院生2年男性)、M3(院生1年男性)、T1(小学校教員男性)、T2(小学校教員女性)である。数字は%を示している。

##### 1. 遠投 (%)

	全体印象		部分評価	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
被験者M1	80	80	80	73
被験者M2	60	100	73	87
被験者M3	80	80	87	80
被験者T1	80	80	93	80
被験者T2	100	80	87	87
平均正答率	80	84	84	81

全体印象、部分評価ともにプレテストとポストテストで著しい変化はなく、80%レベルの正答率であった。また、院生と教員との比較においても大きな差異はみられなかった。

## 2. キャッチボール (％)

	全体印象		部分評価	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
被験者M1	100	100	80	100
被験者M2	80	60	73	80
被験者M3	100	100	87	100
被験者T1	100	100	100	100
被験者T2	40	40	47	47
平均正答率	84	80	77	85

全体印象、部分評価は被験者T2の他は4人も高い正答率であり、100%も多くみられた。捕球についての評価に関して、被験者T2は女性であり、キャッチボール経験不足が影響している可能性も考えられる。

## 3. プレースキック (％)

	全体印象		部分評価	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
被験者M1	60	80	80	85
被験者M2	40	40	75	70
被験者M3	80	80	80	70
被験者T1	60	60	60	75
被験者T2	40	80	70	85
平均正答率	56	68	73	77

全体印象に関して、プレテストとポストテストにおいて評価にバラツキがみられ、プレースキックの動作の全体印象からみた評価の難しさが示唆された。正答率も部分評価の方が高い傾向にあった。ただし、全体印象、部分評価ともに平均正答率としては、わずかながら伸びがみられた。また、院生と教員との比較においても大きな差異はみられなかった。

## 4. ドリブル (％)

	全体印象		部分評価	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
被験者M1	100	80	80	87
被験者M2	100	80	73	80
被験者M3	40	60	80	87
被験者T1	100	100	80	87
被験者T2	40	60	67	73
平均正答率	76	72	76	83

全体印象では、プレテストとポストテストにおいて正答率は被験者によってバラツキがあり、一定の傾向はみられず全体印象に大きな評価観点の差異が考えられる。部分評価に関しては、どの被験者もポストテストで正答率が高くなる傾向を示した。また、院生と教員との比較においても大きな差異はみられなかった。

## 5. 両足まわり跳び (％)

	全体印象		部分評価	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
被験者M1	80	60	90	90
被験者M2	60	60	90	80
被験者M3	60	80	90	90
被験者T1	80	80	90	90
被験者T2	80	60	100	80
平均正答率	72	68	92	86

全体印象の評価よりも部分評価の方がプレテストとポストテストにおいて、平均して高い正答率にあることがわかった。全体印象が平均で70%程度であるのに対して、部分評価は90%前後であった。また、院生と教員との比較においても大きな差異はみられなかった。

## 6. よじ登り降り (％)

	全体印象		部分評価	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
被験者M1	60	50	92	76
被験者M2	60	70	80	96
被験者M3	70	60	88	76
被験者T1	70	40	92	84
被験者T2	70	70	88	80
平均正答率	66	58	88	82

全体印象の評価よりも部分評価の方がプレテストとポストテストにおいて、平均して高い正答率にあることがわかった。全体印象が平均で60%前後であるのに対して、部分評価は80%を超えていた。さらに、全体印象、部分評価ともにポストテストの正答率が3人以上で低下する傾向がみられた。また、院生と教員との比較においても大きな差異はみられなかった。

## 7. 前転 (%)

	全体印象		部分評価	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
被験者M1	100	80	87	87
被験者M2	80	100	80	93
被験者M3	100	80	93	93
被験者T1	100	90	100	100
被験者T2	100	100	100	87
平均正答率	96	88	92	92

全体印象、部分評価ともに平均で90%程度の高い正答率を示し、前転の評価に関しては、ともに評価しやすい動作であることがわかった。ただし、正答率に顕著な学習効果はみられなかった。正答率に関しては、院生よりもわずかに教員の方が全体印象、部分評価ともに高い傾向にあった。

## 8. 飛びこしくぐり (%)

	全体印象		部分評価	
	プレテスト	ポストテスト	プレテスト	ポストテスト
被験者M1	40	80	100	90
被験者M2	100	80	90	70
被験者M3	80	80	90	90
被験者T1	80	100	90	100
被験者T2	100	80	90	70
平均正答率	80	80	92	84

全体印象、部分評価ともに平均で80%を超える高い正答率を示し、飛びこしくぐりの評価に関しては、ともに評価しやすい動作であることがわかった。ただし、正答率に顕著な学習効果はみられなかった。また、院生と教員との比較においても大きな差異はみられなかった。

以上の結果より、今回の評価観点テストの全体印象と部分評価の観点・尺度については、ブレースキック、両足まわり跳び、及びよじ登りおりの3つの動作に関して全体印象と部分評価の正答率に差異がみられ、全体印象の評価が低い正答率を示す傾向にあることがわかった。他の5つの動作では全体印象と部分評価ともに80%を超える正答率であったことを考えると、今回の被験者数は5名と少ないものの、全体印象の観点や尺度を前記の3つの動作に関しては再考する必要があるもの

と思われる。

## Ⅲ. 評価観点テストと評価学習観点学習に関する意見・感想

### 1. 全体的意見・感想：

①模範映像（大学生）と幼児・児童と比較する点において、その発達段階を考慮してしまい、幼児には甘い評価をつけてしまいがちとなる。模範映像も幼児・児童が良い。

②プレテストとポストテストとではポストテストの方が厳しい評価になった。

③ビデオの画像でどの被験者から始まるのかわかりにくいところがあった。

### 2. テスト項目毎の意見・感想：

①遠投について：③「肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる」が一つの流れの中では見えにくかった。

②キャッチボール：投の全体印象「相手の胸あたりに捕りやすい球を投げている」は、結果のみを評価している内容だと思うが動きそのものの評価観点は捕りやすいということで良いのだろうか？胸のあたりになげればすべてA判定になるような評価になるが良いのか？

③ブレースキック：全体印象「助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる」において、ボールの角度は関係ないのだろうか？また、模範の大学女子学生のけり足のバックスイングの様子がわかりやすかった。

④ドリブル：少しホールド気味に進んでいる動作の判断が難しかった。

⑤両足まわり跳び：半回転と1回転があったが、それはどう判断するのか？

⑥よじ登り降り：③の「跳び箱この上で身体のバランスがとれている」身体のバランスがとれているより、「バランスよく歩けている」という具体性がある方が評価しやすいと思う。

⑦前転：試技Eは、全体的としては、なめらかでつながりがあるように見えるが、部分的にはよく見ると動きが十分ではないものがあった。どう判断するのか？

⑧飛び越しくぐり：飛び越すことができれば良い

のか、跳び方の評価は？また、ゴムをくぐるのもゴムを持ったり、ひっかけたりしているが、くぐり方の評価は？

### 3. プレ・ポストテストからわかったこと：

全体としては、被験者数が5名と少なかったこともあり、プレとポストで大きな変化はみられなかったが、評価観点学習用DVDのモデルは、子どもをモデルにすることで学習効果がより直接的

なものになるという意見があったことと、学習用DVDの構成をもう少し興味のもてるものにしてほしいとの要望もあった。特に、現場の先生に対して将来この評価観点学習用DVDを広めていくには、ストーリー性のある面白い教材としての価値のあるものを作成しないと積極的に活用しにくいという印象を持った。

## 4 おわりに代えて：本プロジェクト成果の活用法について

阿江 通良

本プロジェクトは、歩、走、跳、投などの幼少年期に身につけておくべき基礎的動きについて、幼少年の習得度に関する実態調査を行い、基礎的動きの評価法、効果的な習得法などを提案することを意図して行なわれた。研究班員の度重なる検討から、表1に示したように身につけておくべき基礎的動きとして、日常生活に着目した12種、生存・危機の場（環界への対応）に着目した10種、スポーツに着目した7種の計29種の動きを選択した。そして、これらについて、幼児を対象とした動きおよび児童を対象とした動き（表1ではそれぞれレベルⅠおよびⅡ）と、評価者が日常生活や準備運動などにおいて評価すべき動き（表1では準備運動的項目）および調査時間を設定して評価すべき動き（表1ではテスト項目）に分けて設定した。また、指導者がこれらの動きを質的に評価する場合の観点（全体印象および評価観点）、測定に当たったの注意点なども示した。さらに、本年度には、評価者の運動観察・評価力を向上させるため、動きの評価テスト用DVDおよび評価学習用DVDを作成した。

しかし、3年間の研究期間では、基礎的動きを習得させる方法を研究し、効果的な指導法を提案するまでには至らなかった。そこで、これまでの体育・スポーツ科学、特にバイオメカニクスや体育・スポーツ方法学の知見を参考にして本プロジェクトの成果を指導にどのように活用するとよいかを述べて、本プロジェクトのまとめとする。

図1は、スポーツ動作を改善する場合のループおよび各段階における留意点をまとめたものである。まず、子どもや評価あるいは指導する動きに関する知識などを得る（準備段階）。そして、スポーツ動作の改善ループに入るが、その第1歩は

運動の観察と評価である。この段階では、子どもの動きを肉眼のみでなくVTRなどを用いて観察し、その良し悪しを評価する。ここでは、本プロジェクトで提案した評価の観点（表1）を利用して、まず子どもの基礎的動きの全体印象を、ついで質的評価の観点にもとづいて評価する。そして、どの点が達成されているか、あるいはどの点に問題があるかなどを明らかにする（図1では、「制限要因や技術的欠点の究明」と表現されている）。ついで、本プロジェクトの動きの成就率（例えば、本報告書の2-7小学校低・中学年における基本運動（基礎的動き）の調査報告、国土班員）のデータ（平均値）を参考にして該当する子どもがどの水準にあるか（その学年では上位にあるか、あるいは習得が少し遅れているかなど）を知ることができる。この段階で、どの観点（動き）ができるか、できないかを知ることが、習得のさせ方（練習手段など）や指導法をデザインするうえで不可欠なことである。

立つ、構える、ものを持つ、歩くなどの運動については、子どもの行動を日常生活では親が、園内や学校内では保育士や教員が観察したり、あるいは体育の準備運動などにおいて評価することが可能である。

本年度でこのプロジェクトは与えられた研究期間を終了する。しかし、1) 動きの評価基準を作成するという観点からこれまでに収集したデータを再集計・再整理すること、2) 得られた知見をもとに、基礎的動きのモデル動作や質的評価の観点などを収録した運動観察・評価学習用DVD（仮称）を作成すること、3) 主な基礎的動きの指導法を提案することなどの課題が残されている。



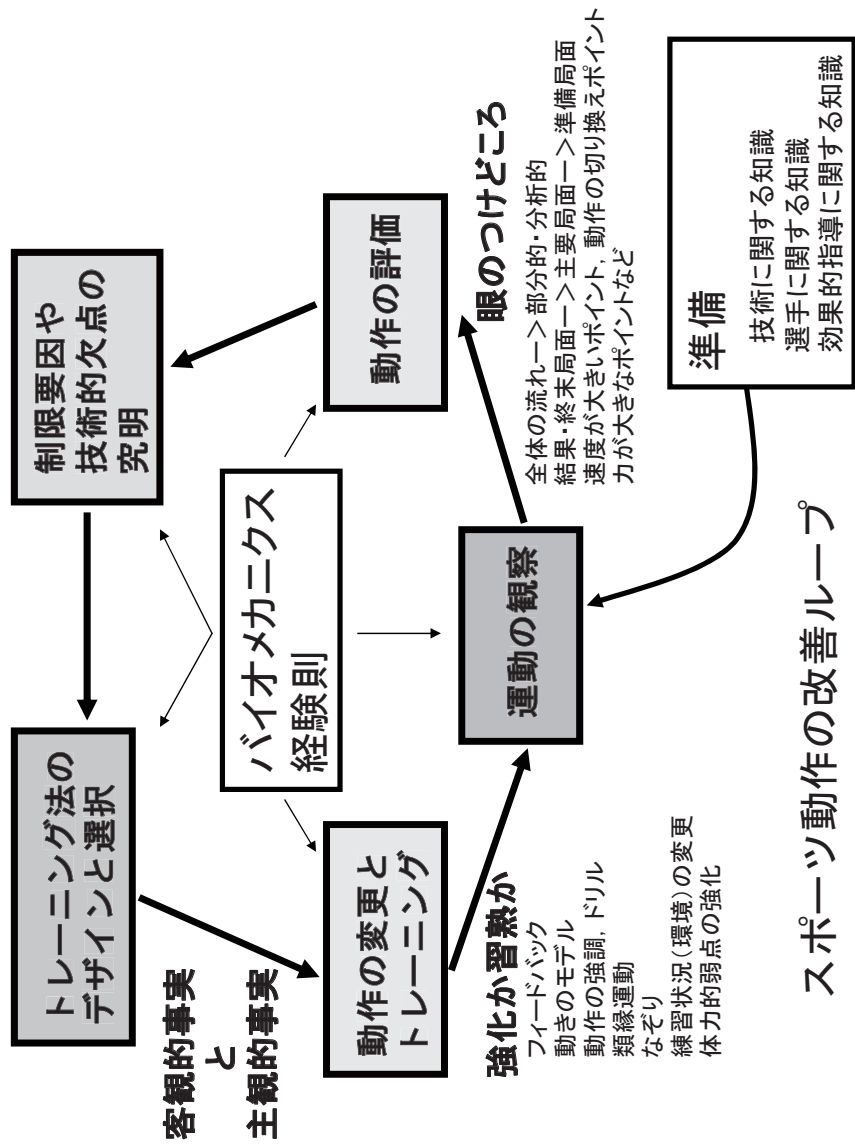


図1 スポーツ動作の改善ループと各段階における留意点

表1 基礎的動きの種類と評価の観点

分類カテゴリー	基礎的動き	テスト項目名	測定方法	評価の観点・尺度（最終案）	用具：留意事項ほか
①日常生活	・立つ（臥位から、座位から、椅座位から）	立位姿勢 しゃがみ立ち レベルI・II 準備運動	立位から両手を前に出して両足を揃えてしゃがんで立つ。	全体印象：しゃがみ立ちがスムーズにバランスを崩さずできる。 1)足を腰幅くらいに開き、踵を浮かせる、2)足を閉じているが、踵を浮かせる、3)足を開き、踵を浮かせない、4)足を閉じ、踵を浮かせない。 全体印象：前後にふらつかずバランスがとれている。 ①屈曲したときに大腿が水平になっている。 ②四股の姿勢を3秒間保持できる。	
	・構える（中腰での四股）	四股 レベルI・II 準備運動	つま先や膝をできるだけ外に向けて、足首・膝の角度が90度になるようにしゃがむ。		
	・ものを持つ、握る（片手、両手）	重いものの上げ下ろし+移動 レベルI・II 準備運動	レベルI 体重の1/3程度の重りを持ち上げる。 レベルII 10m運んで往復する。	全体印象：背筋を伸ばして、脚の力で持ち上げている。 ①両手で重りを身体の近くに保持している。 ②立ち上がったときにバランスがとれている。 ③下げるときにも上げるときと同様の姿勢が保持されている。 レベルII ①安定して移動することができる。	重りは、砂入りレジ袋、段ボール、ダンベルなどを使って作る 小さな台の上に重りを置き、手を入れる隙間を作る。
	・懸垂（屈）	懸垂支持（だんご虫）、うんてい レベルI・II テスト項目	懸垂屈腕で、脚（腰、膝関節）を曲げて前に保持する。 鉄棒の横移動またはうんていの移動。	懸垂（だんご虫） ①10秒間、肘を曲げてぶら下がられる。 *ぶら下がられた時間を計測する。 うんてい 全体印象：リズムよく進んでいる。 ①腕や脚の振込みを使うことができる。 ②腕を左右交互に出すことが出来る。 ③1段以上とばすことが出来る。	鉄棒 自重を腕で支えられる動き。筋力や筋持久力の指標にもなる。 屈曲姿勢から始める。順手、逆手どちらでもよい。
	・歩（前後）×水平、上り、下り、バランス	正歩 レベルI・II 準備運動	日常の歩きを評価する 持続歩 レベルIでは2km、レベルIIでは4kmが休みながらも歩けるか。	全体印象：足を引かず、リズムカラルに歩いている。 ①上体は力まず背筋が伸びている。 ②極端に下を見していない。 ③腕は力を抜いて振っている。 ④足を前にまっすぐ振り出して踵からつまづいていない。	持続歩 正しい歩行フォーム（指示の必要あり）が身についているかを評価する。 普段どれくらい歩いているかを聞き取ってもよい。
		平均台歩き（往復あり） レベルI・II テスト項目	平均台の上を歩く。折り返し地点でしゃがみ平均台を手で触れてから戻る（やり直しは2回まで）。	全体印象：バランスよく、フラフラしない歩いている（走ったようにしていない）。 ①交互に足を出している。 ②方向変換でバランスを崩さない。	平均台

分類カテゴリ	基礎的動き	テスト項目名	測定方法	評価の観点・尺度（最終案）	用具：留意事項ほか
①日常生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 全力疾走</li> </ul>	20m、50m走 レベルⅠ・Ⅱ テスト項目		<p>全体印象：前方にスムーズに進んでいる。</p> <p>①腿が良く上がっている。</p> <p>②歩幅が大きい。</p> <p>③腕は前後に大きく振られており、肘は適度に曲がっている。</p> <p>* タイムを計測する</p>	<p>観察区間は、レベルⅠがスタートから10m（5-15m）あたり、レベルⅡがスタートから25m（20-30m）あたりとする。</p>
		立幅跳 レベルⅠ・Ⅱ テスト項目		<p>全体印象：両脚で前方へ力強く跳躍している。</p> <p>①膝と腰をよく曲げて準備している。</p> <p>②腕を後方から前方にタイミングよく振っている。</p> <p>③離地時に身体全体を大きく前傾している。</p> <p>④両足で着地している。</p> <p>* 跳躍記録を測定する。</p>	<p>練習のポイント 着地時に踵が耳よりも前方にある。</p>
	走幅跳（目標物越え） レベルⅠ・Ⅱ テスト項目		<p>全体印象：助走スピードを生かしてスムーズに踏み切ることができている。</p> <p>①踏み切りの手前で、歩幅をあまり変えずに踏み切ることができる。</p> <p>②踏切脚を力強く伸ばして前上方に跳び出している。</p> <p>③両足で着地している（レベルⅡのみ）。</p> <p>* 跳躍記録を測定する（レベルⅡのみ）。</p>	<p>レベルⅠは目標物（川・池を模した物）を用意する。</p>	
	助走ゴム跳び レベルⅠ テスト項目	<p>正面もしくは斜めより、数歩の助走をしてきて、片足で踏み切ってゴムを超えるように跳躍する。ゴムの高さは大腿の真ん中あたりとする。</p>	<p>全体印象：助走の勢いを利用してスムーズに跳び越えることができる。</p> <p>①立ち止まらずに踏み切ることができる。</p> <p>②片足で踏み切ることができる。</p> <p>③両足で安全に着地できる。</p>	<p>支柱（または人）、ゴム</p>	
	走高跳 レベルⅡ テスト項目		<p>全体印象：リズムカルな助走から踏み切って上に跳ぶことができる。</p> <p>①片足で踏み切って上方へ跳びあがれる。</p> <p>②はざま跳び（またぎ跳び）でバーを越えることができる。</p> <p>③安全に着地している。</p> <p>* 跳躍記録を測定する。</p>		

分類カテゴリー	基礎的動き	テスト項目名	測定方法	評価の観点・尺度（最終案）	用具：留意事項ほか
①日常生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>混合跳（胸+腕）</li> </ul>	よじ登りおり	高さの異なる跳び箱を縦に並べる。高い方に素早く跳び箱（胸の高さ）の跳び箱に素早く跳びのり（よじ登り）、上がったら低い方へ移動し、そこから床へとび下りる。	よじ登り 全体印象：スムーズによじ登ることができる。 ①両腕で体を支えることができる。 ②跳び箱の上に素早くよじ登ることができる。 跳びおり 全体印象：大きな音をたてずに柔らかな着地できる。 ①着地で足のクッション（腰や膝を曲げる）を使用することができる。 ②着地で身体のパランスがとれている	2台の跳び箱 1台は胸の高さ程度、もう1台は腰の高さ程度。 縦に2台つないで置く。 高い方の縦からとびのり（高い方の横からよじ登り）、低い方の縦からとび下りる。
		跳び乗りおり	着地は、手を着かないように、なるべく静かにとまらるように指示する。	跳びのり 全体印象：スムーズに跳び乗ることができる ①両腕で体を支えることができる。 ②跳び箱の上に素早く跳び乗ることができる。 ③跳び箱の上で身体のパランスがとれている。 ※跳びおりは上記と同じ	高い方から下りることができる者は、高い方からでもよい。高い方の跳び箱に上れない場合には低い方の上で行う。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>リズムカルな跳（リズム変化のある跳）</li> </ul>	ケンケンパ（3、4拍子） レベルⅠ・Ⅱ テスト項目	ケンケンパを4回連続で行う。 レベルⅠ：ケンケンの足は規定しない。 レベルⅡ：ケンケンの足を1フリーズごとに変える（右両足-左両足-右右…）。	全体印象：片足一両足の切換えがスムーズでリズムよくできる。 ①最後まで（4回）同じリズムでできる。	床にビニールテープなどでコースを作る レベルⅠ：30cm四方、レベルⅡ：50cm四方 ※ケンステップなどを用いても良い。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>よじ登る、降りる（坂、階段 or 肩高以上、越える）</li> <li>背負う</li> </ul>	とびのりおり（胸の高さ） おんぶ+歩行 レベルⅠ・Ⅱ 準備運動	体格が同程度の子どもを背負う、または背負ったまま移動する。	前掲	デモンストレーションは三拍子のリズムで行う（「ケンケンパ」と唱えながら行う）。
			<b>【背負い手】</b> 全体印象：腰の上にしっかりと乗り手を乗せてバランスよく運ぶことができる。 ①上体が適度に前傾し、膝を曲げて構えている。 ②乗り手の腿がずれないように両手で保持している。 ③ふらふらせず歩くことができる。 <b>【乗り手】</b> 全体印象：しっかりと背負い手に腕を巻きつけて乗ることができる。 ①背負い手に跳び乗れる。 ②背負い手に適度に体重を預けている。	レベルⅠは5m、レベルⅡは10mに目印  ものを背負う、あるいは背負って移動できる能力、および背負い手に負担をかけない姿勢を工夫できるか。	

分類カテゴリー	基礎的動き	テスト項目名	測定方法	評価の観点・尺度（最終案）	用具：留意事項ほか
②生存・危機の場（探界への対応）	・転（回転、受身）	揺りかごと立ちレベルⅠ テスト運動	立った姿勢から、しゃがんでから後ろに倒れ、背中をマットに着く。その後、立ち上がり最初の直立姿勢に戻る（手を着くかどうかなど、動きは自由とする）。	全体印象：転がり動作から立ち上がりまでスムーズに行うことができる。 ①あごを引いて、背中を丸めて揺らす（転がる）ことができる（後頭部を床に強く打ち付けけない）。 ②立ち上がるができる。	マット
		前転	2回続けて行う。頭越しに回れない者は、補助者が回してやる。	全体印象：転がりながめらかで、1回目と2回目の前転につながらがある。 ①両手をついてあごを引き、頭を入れることができる。 ②背中を丸めたまま転がるができる。 ③起き上がるができる。	マット
		後転 レベルⅡ テスト項目	立った姿勢から（自由な動きで）しゃがんでから後ろに倒れ、後ろに回転する。斜め回りになってよい。	全体印象：立位姿勢からなめらかに転がり、スピーディな後転ができる。 ①背中を丸めてあごを引いて転がるができる。 ②手（腕）を使ってマット（床）を押している。 ③まっすぐ転がるができる。	マット 準備動作で、手のひらを上側に向けて、耳の横に置くことができるか に留意する。
	・倒立	足たたき レベルⅠ・Ⅱ 準備運動	床に両手をついて両足を同時に振り上げ、足の内側をたたき合わせる。	全体印象：腕で全身を支えることができる。 ①足が腰より高く上げられている。 *足をたたいた回数を測定する。（目標は3回）	マット
		登り棒 （2～3m） レベルⅠ・Ⅱ テスト項目	1本の棒を使って上まで登り、ゆっくりと降りる。 ※目標の高さ（レベルⅠが2m、レベルⅡが3m）にビニールテープを巻いておく。	全体印象：動きが途切れず上まで登れる ①腕による引きつけと足で棒を扶んで脚による身体の押し上げができる。 ②腕の引きつけと脚による押し上げが連動している。 ③スピードをコントロールして安全に降りられる。	指を挟むなどの事故が考えられるので、テープは少なくとも最上端から50cm手前に貼るようにする。 手を滑らせず、安全にゆっくりにおりにように指示する。着地時の安全（地面の状況）にも配慮する。
		ジグザグ走 （10m） レベルⅠ・Ⅱ テスト項目	4、5.5、7、8.5、10m地点にポールを置いて、ポールに触れないでジグザグに走って戻る。	全体印象：障害に触れず、きびきびと方向を変えて走っている。 ①ポールに触れずに走ることができる。 ②スピードを落とさずに走ることができる。 ③方向変換時に身体を内側に倒している。	・ポールの高さは身長以上を目安とする。 ・2本並べて競争させてもよい

分類カテゴリー	基礎的動き	テスト項目名	測定方法	評価の観点・尺度 (最終案)	用具：留意事項ほか
②生存・危機の対場 (限界への対応)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• またぐ、くぐる (膝高以下)</li> </ul>	跳びこしくぐり レベルⅠ・Ⅱ テスト項目	2 m 間隔程度の支柱 (または大人の足の間) に渡したゴムに対して横向きに立ち、片足踏み切り (レベルⅡは両足) でテープを跳び越え、すぐに手をついてテープ下をくぐり立ち上がる (連続5回)。  2 回行わせ左右両方向の回転に挑戦させる。	全体印象：跳ぶ動きとくぐる動きがすばやく連続している。 ① ギョムを跳び越すことができる。 ② 体を低くしてギョムをくぐることができる。 * 5 回にかかった時間を計測する。	ストップウォッチ、ゴムひも  レベルⅠは35cm, レベルⅡは45cmの高さでギョムテープを渡す (際の高さ?)。  1, 2 回練習をして要領を確認する。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• はう</li> </ul>	アザラシ歩き (2 m)  レベルⅠ 準備運動		全体印象：手だけですばやく2～3メートル進むことができる。 ① 腕をあまり曲げずに、歩くように進むことができる。 ② 下半身を引き直すことができる。	アザラシ歩きは滑りやすい床の上で行う。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 跳び降りる</li> </ul>	手押し車 (5 m)  レベルⅡ 準備運動		全体印象：体をまっすぐにした (腰が落ちない) 姿勢で、スムーズに進むことができる。 ① 腕をあまり曲げずに、歩くように進むことができる。	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 浮、泳 (速、持続)、潜</li> </ul>	とびのりおり (胸の高さ)  顔つけワニ歩き  レベルⅠ テスト項目  ボビング移動  レベルⅡ テスト項目	両腕で胴体を支えて2 m進む。  プールの底を蹴り腕で水を下に押しつけて水上に飛び上がり、反動で沈むという動作 (浮き沈み) をしながら5 m 移動する。	全体印象：リズムカラルに前進できる。 ① 顔を水につけられる。 ② 足を浮かせられる。  全体印象：呼吸をしながら楽に移動できる。 ① 床をしっかり蹴って飛び上がれる。 ② 浮き沈みのリズムが一定である。	水深のかなり浅いレベルⅠ用プール  水深1～1.3m程度のプール  5 m できれば練習次第で何mでもいける。
		プールの端から上がる  レベルⅡ テスト項目	水中からプールサイドに上がる。	全体印象：スムーズに上がることができる。 ① 両腕で体を支えることができる。 ② プールサイドに素早く上がることができる。	プール

分類カテゴリー	基礎的動き	テスト項目名	測定方法	評価の観点・尺度（最終案）	用具：留意事項ほか
②生存・危機の場（探界への対応）	・浮、泳（速、持続）、潜	浮き身 レベルII テスト項目	呼吸を確保して30秒間浮いている（どんな格好でもよい）。または移動できる。	全体印象：楽に浮いていられる。 ①浮体なしで浮いていられる。 ②背浮きで頭の方へ移動できる。	プール、ストッパーウォッチ、1.5-2Lのペットボトル、ビート板（浮力2kgf程度）、アルブイ
	・飛び込む（足、頭）	けのび レベルII テスト項目	プールの壁を足裏で蹴り、けのびをする。	全体印象：全身を伸ばしたけのび姿勢（ストリームライン）をととり、水中を進むことができる。 ①壁をしっかりと蹴っている。 ②両腕を頭上に伸ばし両脚を揃えている。	プール、蹴るための壁 ストリームラインの図を示す。
	・飛び込む（足、頭）	足から飛び込み レベルII 準備運動	水面と同じ高さまたは水面から約30cm程度の高さから、足からプールの飛び込む。	全体印象：足から難なく（躊躇なく）飛び込める。 ①体をまっすぐにして飛び込める	プール（飛び込んでも安全な深さのあるもの）
	・投（軽-重、正確投-遠投） 300g、3kg、5kg むち型、プッシュ型、回転型	遠投 レベルI・II テスト項目	2メートルの幅の中で、約30°の投擲ゾーンに向かって全力でできるだけ速くへ投げつけるつもりで行う。	全体印象：全身を使って、腕をむちのように振って投げている。 ①上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。 ②ステップ脚（投げ腕と反対側）が前に出る。 ③肩がリードしてボールや腕が遅れて出てくる。	硬式テニスボール（ソフトボールでも可） 遠投は距離を計測しないので、網などに向かって投げてよい。
③スポーツ	・蹴（静-動、正確蹴り-距離蹴り）	正確投（キック・ボール・投） レベルI・II テスト項目	5m間隔で子ども同士がキックボールする（3-5回づつ）。 レベルIは大人がしゃがんで受ける。	全体印象：相手の胸のあたりに捕りやすい球を投げている。 *移動しなくてよい場所に投げられた回数測定する（相手が捕れなかったかどうかは不問）。	
		ボールキック（ブレース&ゴロ） レベルI・II テスト項目	ブレースキック レベルIは2m、レベルIIは3m助走して正面に向かってボールを蹴る（3回）。 ゴロキック 斜め45度から転がってくるボールをブレースキックと同様に蹴る（3回）。	全体印象：助走からスムーズにキックを行い、ボールが勢いよく飛んでいる。 ①ボールをよく見ている。 ②軸足が力強く踏み込まれている。 ③蹴り脚のバックスイングが大きい。 ④蹴り脚が勢い良く前方に振られている。	サッカーボール、傾斜台 傾斜台の高さ レベルI：高さ30cm（約2.4m/s） レベルII：高さ60cm（約3.4m/s）

分類カテゴリー	基礎的動き	テスト項目名	測定方法	評価の観点・尺度（最終案）	用具：留意事項ほか
③スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・捕（受け）軽重</li> </ul>	ワンバウンドキャッチ レベルⅠ テスト項目	子どもから3-4m離れた成人の頭の高さから子供の1m程度前方にボールを落下させ、ワンバウンドしたボールをうける（5回）。 バウンドさせる位置は、子どもが少し移動して捕るように、左右に振ってみる。	<p>全体印象：ボールの落下地点に移動してキャッチしている。</p> <p>①準備した腕の肘が曲がっている。</p> <p>②手のひらでボールを受けている。</p> <p>* キャッチできた回数測定する。</p>	ドッジボール できるだけ体を使わずに手で捕球するよう教示する。
		キャッチボール（捕） レベルⅡ テスト項目	5m間隔で子ども同士がキャッチボールする（3回づつ）。	<p>全体印象：ボールの正面に身体を移動させてキャッチしている。</p> <p>①準備した腕の肘が曲がっている。</p> <p>②手のひらでボールを受けている。</p> <p>③腕を曲げてボールの勢いをコントロールしている。</p> <p>* キャッチできた回数測定する。</p>	硬式テニスボール
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・打（手、道具）（目標物：静、動）</li> <li>・水平打（野球型）、両手打ち下し型、サーブ型</li> </ul>	ティーバットイング レベルⅠ・Ⅱ テスト項目	バットイングティーンの上に置いたボールを打つ（3回）。	<p>全体印象：バックスイングからボールを打つまでの間にスムーズな体重移動があり、ボールが勢いよく飛んでいる。</p> <p>①軸足にためをつくり、上半身をひねってバックスイングしている。</p> <p>②ステップ足を踏み出して打っている。</p> <p>③素早くバットを振っている</p> <p>オブション（トスによるティーバットイング） 斜め前方</p>	プラスチック製のバットとボール、バットイングティーン（既製品、コーン、牛乳パック製などを腰くらいの高さに設定） できるだけ強い球をうつように指示する。
		ボールつき（左右） レベルⅠ テスト項目 ドリブル レベルⅡ テスト項目	その場で10回ボールを打つ。 10mの距離を片手でドリブルしながら進む。	<p>全体印象：連続してリズムカルにボールをつける。</p> <p>①同じ高さで安定してボールをついている。</p> <p>②手の動きとボールの動きが合っている。</p>	ドッジボール
		ドリブル レベルⅡ テスト項目	10mの距離を片手でドリブルしながら進む。	<p>全体印象：ボールと身体との移動がスムーズである。</p> <p>①同じ高さで安定してボールをついている。</p> <p>②身体とボールの関係（距離）が安定している。</p> <p>③顔や上体が適度に前を向いている（極度に下をむいていない、ボールばかり見えていない）。</p>	



分類カテゴリ	基礎的動き	テスト項目名	測定方法	評価の観点・尺度（最終案）	用具：留意事項ほか
③スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・回る（縦軸回転、ピルエット）</li> </ul>	テスト項目名 両足まわり跳び（左右） レベルⅠ・Ⅱ テスト項目	測定方法 立位の状態から両足で踏み切り、ターゲットとなる角度に向けてひねり跳び、安定した着地を行う。	評価の観点・尺度（最終案） 全体印象：準備動作から着地までをなめらかにしている。 ①体を真っ直ぐにして上方へ跳び上がっている。 ②バランスを崩さず着地できる。 ＊目標の回転角度は、180、360度の2種類とし、テープなどでマークをつけてもよい。 ＊＊最終的に動作が止まった時点のつま先の方で評価をする。	用具：留意事項ほか 練習時の留意点 動作開始時に両足が0度から動かない。 ジャンプ（両足で離地）する。 安定して着地することを徹底する。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なわとび</li> </ul>	なわとび レベルⅠ テスト項目	ひとりとりとびをリズムカールに連続して行う。	評価の観点・尺度（最終案） 全体印象：リズムよく連続して跳んでいる。 ①腕を大きく動かさずになわを回している。 ②上肢（なわまわし）と下肢（ジャンプ）のタイミングがある。 ③両足でジャンプできる。	なわ なわの長さは個人に合わせる。 1回まわし1回跳びでも2回跳びでもよしとする。

---

平成19年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I

幼少年期に身につけておくべき基本運動(基礎的動き)に関する研究— 第3報 —

◎発行日：平成20年3月31日

◎編集者：阿江 通良(幼少年期に身につけておくべき基本運動(基礎的動き)に関する研究班長)

◎発行者：財団法人日本体育協会

(〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1)

◎印刷：株式会社博文堂

(東京都世田谷区代田2-14-7)

---